増補改正 俳諧歳時記栞草

二

増補 俳諧歳時記栞草

江戸 曲亭主人纂輯
藍亭青藍増補

夏

【漢書律暦志】太陽者南方、南任也、陽氣任養物、於時為夏、夏假也、物假大乃宣平、

炎帝【淮南子】南方火也、其帝炎帝、其佐朱明、執衡而治夏、

祝融【禮月令】夏月其帝炎帝、其神祝融、祝融顓頊氏之子、曰黎、為火官正者、

昊天【纂要】天曰昊天、言氣浩汗

朱明【爾雅】夏為朱明、一曰長贏、註、氣赤而光明、故曰朱明、

蒸炒【韓文】自從五月困暑濕、如坐深甑遭蒸炒【説苑】湯之時大旱七年、雒坼川竭、煎沙爛石、

四月

仲呂【月令】律中仲呂、高誘註曰、陽散在外、陰實在中、所謂旅陽成功、

立夏【孝経緯】穀雨後十五日、斗指巽為立夏、

蹁踵【通俗志】作蹁蹟【廣義】

跰蹟ハ四月ノ名也、

小満 〔月令廣義〕立夏後十五日、斗指巳ヲ為小満、四月ノ中、小満者物長于此少得盈満也、

余月 〔爾雅疏釈〕四月ヲ為余、

乾月 〔月令廣義〕四月卦乾、五陽決退一陰ヲ陰変而為純陽、乾ハ天也、

正陽月 〔西京雑記〕陽徳用事和気皆陽、為正陽月、

巳月 〔晋書楽志〕夏正建寅為正月、故四月為巳、

首夏、初夏、孟夏 〔元帝纂要〕

卯花月 卯月 〔釈名〕波流花 さかりにひらくる故にうのはな月と云、又畧して卯月とも云、

花残月 〔蔵玉〕くれはてし春のなごりや山ふかく志げみがくれの花のこり月 後鳥羽院

得鳥羽月 〔蔵玉〕ふぢの花夏にくれぬる山の下こやまさらんえとりはの月 有家

五月

蕤賓 律 〔律暦志〕蕤ハ継也、賓ハ導也、言ハ陽始導陰気使継養物也、位于午在五月ニ、

芒種 節 〔月令廣義〕孝経緯云、小満後十五日、斗指酉為芒種、五月節、言ハ有芒之穀可播種也、

夏至 中 〔同上〕芒種後十五日、斗指午ニ為夏至、言ハ万物于此假大而極至也、

仲夏 仲ハ同中、五月ハ夏ノ中也、

茂林、蔚林 〔纂要〕木ヲ曰蔚林茂林ト

皐月 〔爾雅疏釈〕五月ヲ為皐月ト、五月得戊ヲ曰属皐ト、

鶉月 〔周礼注〕蕤賓午ハ之気也、五月建焉而辰有鶉首ニ云、鶉首者星ノ名、鶉首月之畧乎、

橘月 〔蔵玉〕たが代にうへしたちばな月の名をとゞめてしのぶ昔のおもひ出らん 家隆

月見ぬ月 〔蔵玉〕さみだれの晴るゝもみえぬ空よりや月みず月といひそめけん 顕昭

早苗月 五月ハ農人ニ苗を挿む、故ニ早苗月と云、今畧して早月と云、

六月

林鐘 律 〔律暦志〕林ハ君也、言ハ陰気受任助蕤賓君主種物使長楙盛也、位於未在六月ニ、〔月令〕六月、律中林鐘 注 林衆、鐘聚也、〔白虎通〕言ハ万物成熟種類多也、云云

小暑 節 〔月令廣義〕孝経緯云、夏至後十五日、斗指丁為小暑、六月節ナリ、

大

暑中【同上】小暑後十五日、斗指未為大暑、六月中、

季夏【礼記】季夏之月、日在柳、【字彙】凡末月曰季月、

瓜期【左傳】齊侯使連稱管至父戍葵丘、瓜時而往、及瓜代、

且月【尓雅】六月為且、疏云、六月得已則曰、則且、且子余切、

遯月【易本義】遯退避也、為卦二陰浸長、陽當退避、故為遯、六月之卦也、

朔月【年浪草】ニ云、季吟【増山井】ニ六月の異名とす、【礼記】曰、朔月少牢五俎四簋、此月朔の義之未詳其義、仍てこれを闕く、

陽氷【年浪草】云、【増山井】云、疑らくハ誤か、按ニ陽ハ賜ニ作べし、【月令廣義】賜氷、石季竜于氷臺蔵氷、三伏之日、以賜大臣、又林滋賜氷の賦あり、

風待月【蔵玉】

松かけに床居とてくるゝ六月や風待月の友のことさよ　顕昭

鳴神月【同上】

夕立ハあまねきをやらくある神の月ふとありぬ夏やくるらん　定家

常夏月【同上】

ちりはらひ妹かこゝろむとこなつの月にもちそゆる花のさかりを　後鳥羽院

みな月【奥義抄】農事ともことことくしつきなるゆゑ、みなしづきと云、○一説ニハ此月暑熱烈しく、水泉滴て尽くるゆゑに、水無月と云、さまさまの説あれども信じがたし、又荷田東麻呂ハ、雷鳴かみなる月の上下を略して、みな月と云となり、此説ぞ姑くよるべくや、

へ

四月

虎杖競 朔日【蔓纒論】貴布祢の御神事之、此日加茂の氏人騎馬にて詣づ、帰る時市原野の連理の芝と云所ニ於て、虎杖を争ひとり、其大小多少を論ず、例のことにて甚興じ、

稲荷祭 中卯日○山城国紀伊郡ニ有、【紀事】四月卯日二ツあるときハ初の卯日を用ふ、新御供、社家松本氏調進ス、神輿五基ニ供するなり、己の刻ばかりに神輿五基、御旅所の西に出て東寺の南門の内ニ入る、此所に於て床をかまへ五社の神輿おのおの南にむかひて其上ニ安置ス、寺僧おのおの御供所ニ侍す、ここに於て東寺の役人甲冑を着し、左手に長刀を携へ、右手に御供餅をさゝげて、東寺の地人の妻四人、寺中頭屋院より雑品供物と唐櫃に盛り、頭上にいたゞき来て、神輿毎にこれを供じて、寺僧一人擅上ニ進ミ出て奉幣ス、又護摩を修ス、一座終りて後、社家并ニ氏子供

奉し、北の方大宮通りを経て、五条松原より、五条の橋を過ぎ、大和大路より本山に入○

龍頭太

俳諧歳時記云　羽倉家譜　桓武天皇御宇の人、荷田氏の祖也、山城国稲荷祭の時、神輿のさきへかゝる面を龍頭太と云、その外の祭の假面ハ王の㒵と称す、龍頭太ハ田中の社の神職にて、その面則ち龍頭太が作なるを以て、さて名づけらるゝとぞ云て

伊勢神衣祭

十四日　公事根源　神衣祭ハ神祇令の色より神服部潔斎して、三河の赤引の神調の糸を以て神衣をおりて、又麻績連と云氏人、麻をうみて和妙荒妙を織て、神明に奉るを神衣の祭とぞ申し（延喜式にくはし）

忌さす

かつ部、神祭の条に出、

岩梨

和漢三才図会　江州三井寺の山中にあり、苗の高サ二三寸、葉の大サ瓢樹の葉の如くにて尖らず、地に攅て生ず、二月小白花をひらく、虎耳草花に似たり、三月実を結ぶ、青大豆の如くにて同し、数顆攅り生ズ、楊梅の様しくて、葉の交ひに裹まる、外色青く内紫黒色、小児皮を剥て食ふ、味微酸く甘し、

覆盆子

本草　葉に鉤刺あり、一枝五葉、葉小にして面皆青く光り、薄くして毛あり、白花をひらく、四五月実のる子と成てを、蓬蘽よりも小くして稀疎に生ず、熟すれバ烏赤し、本草附注　子覆盆の形に似たり、故に名之○蓬蘽、覆盆子、藨、樹莓、蛇莓、おほよそ五種あり、

石藤

和漢三才図会　芫花（俗云以波不知）花葉並に藤に似て小し、三月花をひらく、紫色或ハ白花と云、又草藤上の説のごとし、紫花白花の二種あり、三月より四月に至りて花をひらく、又一種夏藤あり、黄白色、蔓葉花あれども紫藤に似て小し、

馬蓼

大和本艸　山州山科の近道に往々有り、四月花を発く、本草凡物の大なるを馬と以て名くと云、日本にてハ相似てやゝことなるものを犬と云、犬蓼、犬山椒、犬黄楊などいふ、いぬ蓼ハ葉に黒点あり、

芋植る

芋の注、秋部にてみてしるべし、

紫羅傘

本草品経　紫羅傘、或ハ鳶尾と名く、葉射干に似て、花の色紫碧、抽でず、其根を或ハ鳶頭と云、薬に入る○鳶尾ハ燕子花の類にして、花早くひらく、白花もあり、

石薢花

或ハ石蔛に作る、本草　石上に叢生ず、其根糾結して甚だ繁し、茎葉生して皆青色、乾くときハ黄色、紅花をひらく、節の上に自ら根鬚を生し、亦折下して砂石を以て栽之、或ハ物と

以て盛り、屋下に掛、頻りに澆に水を以てす、年を経て死ず、俗に称して千年潤石斛とす

蘭花

〔本草〕虎髭草、一名燈心草、これ即竜の髭須のことにて、但し竜の髭須は堅小にして瓤実す、此草は稍粗にして瓤虚して白し、呉人栽之時、瓤を取て燈炷とす、艸を以て席及び蓑を織る、〔和名抄〕藺、和名為、辨色立成云、鷺尻刺

五月

卯地打

〔世諺問答〕今日、童の小弓を持て、いんちとてすること何の故ぞや、答むかし左右の馬場にて、馬に騎て弓射ることの侍るをいむとてこの日などもちゐや、是よりや始とはんべるらむ、〔紀事〕児童、柳の木を以て大小の刀を作て、これを菖蒲刀と云、男児これを腰に横たへ、頭巾を着て山伏の体にいでたち、晩に及て、鴨河の辺に出て左右に列て、礫を擲て相戦ふ、是を印地といふ、〔てくぐせうし〕江東佐々木の社の祭礼、五月五日（今ニ卯地打云）、

守宮を搗

〔武帝記〕端午の日、守宮を取て、飼ふに丹砂を以て、体と赤く重き、次の歳此日搗之、人の臂に塗る、犯すことあれバ消ゆ、故に守宮といふ

生玉の流鏑馬

五日 〔神社啓蒙〕生玉神社ハ摂津国東生郡、天王寺の辺にあり、祭る処の神一座、天生玉神なり、〔社家註進〕明應年中、本願寺の僧この所に来りて寺院となさしめ、神地を掠めて境内に接へんとせしかば、神その不潔を悪みて、かの僧を罰す、僧おそれて、神殿造営の宿祷といごとき、神主藤原吉勝にいのつて、願辞を告く、数日にして僧の病愈ゆ、遂に神殿を今の旅店の廻りに遷し奉る、後に神璽を別所に遷す、慶長年中、秀吉、城廓を築ての刻、今の地に遷す、〔紀事追加〕今日午の刻、流鏑馬あり、門外より鳥居の方へ馳す、其装束、腹帯、陣羽織を着し、只一さんにて止むなく

今宮祭

（九日之今十五日ヲ用）○山城国愛宕郡紫野にあり、祭る所牛頭天皇〔諸神記〕正暦五年六月廿七日、疫神を船岡山に安置せらる、長保三年五月九日、疫神を紫野に遷座せらる、霊夢の告によつてなり、京師の衆庶、御霊会を行ふ〔紀事〕午時神輿二基、相殿の宮各旅所に出づ、相殿の宮ハ一説、愛宕の宮なり、古へ愛宕権現鷹ケ峯にありて、此社を今の愛宕山に移す、一条院御宇勧請す、愛宕卒社地主神なり、故に摂社とす、神幸の日、鉾十二本あり先

鉾を出す町所〻にも別當供奉し、氏子相從ふ神幸小川通りよりも、元誓願寺大宮通りを過、船罡山の北の麓を過て、本山に入る、

【六月】忌火御飯

【江次第】忌火御飯（六月十一月十二月一日早旦供之）以御臺盤一脚供之次供御飯ヲ

【公事根源】内膳司より奉まる御菜四種和布御汁一坏下畧、と大床子の御座にて供まつる、景行天皇の御時よりはじまる、忌火とハ火を忌むなり、神事などの時ハ不浄の火をうちかふることとや、これハ月次神今食の御神事を今日より始めらるゝなるべし、

嚴島祭

十五日　藝州佐伯郡宮島にあり、祭る一所の神三座　市杵島姫神、田心姫神、湍津姫神、○或書云推古天皇の御宇、播广国の住人内舎人佐伯の鞍職、當国に左迁ス、恩賀の島にあり、時に紅帆の船来る、船の中に瓶あり、瓶の中に鉾を立赤幣を着、うちに三女あり、容粧端正にて曰、我皇祚守護の為来現せり、よろしく宝殿を恩賀の島に造るべし、と云と、時に推古天皇二十二年十一月、叡聞に達し、社を営む、嚴島大明神と号ス、始の名ハ恩賀の島、後に市杵島の神号を用ひてまゝと呼、或ハ地景の美を以て称ス、當社後ハ深山前ハ蒼海、左ハ原野、右ハ松原、その野に水あり、御洗井と名く、蓋し當社ハ山上にあり、廻廊ハ平地にありて、海潮みつる時ハ廻廊をひたす、乾る時ハ干潟五十町ばかりなり、無双の絶景也、今通して宮島と号ス、○池の御前ハ同国安藝郡にありて、嚴島と同じ神体也、毎年六月十七日の夜にいつくしまの神輿船舞楽を奏し、此に渡る事を清會と云、平相国清盛、灵験をとくしてこれを建立ス、其後弘治二年陶晴賢滅亡の時、兵火にかゝりて回禄ス、ここに於て毛利大膳大夫元就再興ス、廻廊周百十八間ありと云、例祭六月十五日より十七日に至る、先ツ神前御池にて管絃の船を組む、舟三艘を舫ひて座を張渡し、幕を結ひ、竹にて樓を作り、花と灯籠を釣る、前後挑灯数多これを飾る、十七日御船濫申の刻件の舟を大鳥居の正面より乗出し、管絃を奏し、外宮に押渡り、酉刻より管絃并に供僧伽陀并舞楽畢て御船を嚴島へ漕戻し、長濱の沖にて奏楽并亥刻頃大鳥居のうちに漕入る、六月上旬か諸方の商人あつまり、十五日より群集スことなど町人とまくりくハ嚴島道芝記ニ出、

伊勢祭禮

十六日　十七日

【延喜神祭式】六月十六日度会宮を祭、十七日太神宮を祭る、其儀十五日黄昏以後、祢宜諸内人物忌を率

みな神の御雑物を陳列し、読ミて、亥時夕膳を供じ、丑時朝膳を供す、祢宜内人に歌舞を奏す云々十七日太神宮に祭る其儀一度会に同じ云々○外宮（十六日）内宮（十七日）これを行ハる、京師より御奉納の神宝を神主神殿へ捧るとき、官殿の御戸を開く、是を拝さんとて、諸人群参するに、十人の祢宜其外、廣前にて松明をとりて祝詞を捧く、今日出家円頂の者を許さるべく参詣なさしむよしなり、

泉 [尓雅]水の本を源といひ源と泉と云[釈名]泉ハいづる水也、いづるのるとみづのつを略せしなり

泉殿、瀧殿、○泉水の辺、滝の辺などに造れる殿舎をいふ、嵯峨の大覚寺栖霞寺などにも滝殿あり、神泉苑にも滝殿あり、[源氏松風巻]たきどのゝこゝろばへなどおもしろく

井戸替、さらし井、[漢谷]井、[礼伐][志]夏至井を浚へ水を改め、冬至に燧を鑽て火を改むとぞ、瘟疫を去べし、○さらし井ハ六月井を浚ることを云、[夫木]松が根に夕さらし井をむすびつゝおもはぬ外の秋をしる哉　定家

藺苅 此草、備後国に多し、刈て席とす、委くハ四月、藺花の条にあるをみるべし、

白麻苅 [和漢三才圖会]苘麻 日向薩摩に多くあり、

九州の土の産、其葉微し胡麻葉に似たり、大く鋸歯あり、しかるに本草綱目に桐葉に似たりといふハいまだ精ならざるか、○三餘齋曰、予遠州の種を得てこれを種るに一年ハ其葉胡麻の葉、或ハ棣棠花の葉のごとし、花黄にして其実苺に似ざる、又翌年その子を種れバ則生じて葉桐の葉の如し、黄花をひらく、状ち櫨の花の如し、実ハ牛磨形の如し、是雄雌にあらざるハ本草及び和三の説ともに誤とすべし

櫟の花 時珍云、二種あり、一種ハ實を結ず、其名を棫といふ、一種ハ実を結ぶ其名を栩といふ、其実を橡ともいふ其葉櫧の葉の如くして文理あり、皆針に勾る、四五月花を開く、栗の花の如し黄色[大和本草]今按するに櫟の木ハ櫧に似て同類異物あり、其木の高さ二三丈実を櫧に似たり、

ろ

六月

六月會 或ハ傳教会とも講会ともいふ、六月四日これを行なふ、[公事根源]これハ傳教大師の忌日也、勅使登山の儀あり、○山家説云、六月会ハ弘仁十四年始て行はる、建暦三年に勅して、御斎会に准ぜらるべしと、宣命使あり、○釈最澄、姓ハ三津氏、近江滋賀郡の人なり、神護景雲元年に生まる、弘

仁十三年六月四日寂す、年五十六、貞観八年八月、勅して傳教大師と謚す、此会ハ、叡山の谷々に論義を、会場一院て年番あり、十一月天台会も同事也

は

四月

鼻高祭 八日【大和名所記】毎年四月八日、南都興福寺中門にして仏生会をおこなふ、伶人舞楽あり、其舞の中陵王の舞を奏するに其面の鼻高きをもて、俗に此法会を呼ぶ、鼻高祭と云也

花御堂 ふ部、佛生会の条に注ス、

花摘 か部、戒祖堂開帳の条に注ス、

花供 高野の花供也、こ部にて見べし、

梅天【杜甫詩】南京西浦道、四月熟黄梅、湛々として長江去、冥々細雨来、【厳維詩】梅天一雨清【潜確類書】唐人成都を以て南京とす、則蜀中也、梅雨乃ち四月に在也、是四月の梅雨と云、又熟梅天、黄梅天ともいふ也、

葉柳【本草】春ノ初朶莢を生ず、即ち黄蕊花を開く、春晩に至く、葉長成す、云々

葉櫻 キ广呂一派にてハ、葉櫻を春とす、蕉門諸流にハ四月とせて、首夏の新緑を賞するなり、

まつ見草 卯花の異名、【蔵玉】まつみぐさまだきぬまに時鳥立田の山の里に鳴けるを、

花柚【大和本草】一種花柚といふものあり、其実小にして多くなる、酒にうかべ羹に加ふ、故に名づく、味大柚におとれども又賞すべし、

白丁花【和漢三才図会】花白く微しく丁香の氣あり、故に俗にこれと名づく、小樹、高さ二三尺、枝茎勁く、葉ハ狗黄楊に似たり、四月小白花をむらがり、大サ三分ばかり、一種千葉のものあり、枝茎を折てすこしく挿之よく活し叢生す、墻籬際限の為に人家檐滴の下に多く是を植ゆべし

廿日草 牡丹と云、【白氏文集】牡丹芳、花開花落二十日、一城之人皆如狂【詞花集】咲しより散はつるまでみしほどに花のもとにて廿日へにけり　忠通公

花王 ○【欧陽脩花釈名】銭魯公嘗て曰、人牡丹を謂て花王とす、今姚黄ハ真に其王たるべく、魏紫ハ乃ち其后也、

花宰相 芍薬と云、【本草】群花品中、牡丹を以て第一とし、芍薬を第二とす、故に牡丹を謂て花王とし、芍薬を花相とす、云々

蓮の蕊【同上】蕊ハ、藕芽泥を穿て白蒻と成る、即ち蔤之、嫩弱之、竹の行鞭の如し、長さその丈余に至る、五六月嫩きを時に水に没して取之蔬と為して

くらかぶし、俗ニ藕綵菜と呼ぶ、【和名抄】蕅（和名波知須之波比）、

蓮の浮葉 荷葉清明の後初て水ニ貼す、是を浮葉と云、

飛蟻 【和漢三才圖会】蟻ハ羽ある蟻之、人家の古き松の柱の間ニ蟻生ズ、其蛾細ニ白く、墨栗子の如し、黒点ある処頭之、尋て黄赤ニ変じ翼を生ド、再び黒く変じて群飛す、奈何ともすることあたはず、相傳ふ、咒いの哥を書て其柱ニ粘るときハ蟻ことごとく除去るといふ、試ニ験き、其哥詠人の詠あることをしるべし、「ありとハ山ニ住べきものなるを里へ出るこそおのがあやまり」、

初松魚 【東医宝鑑】松魚、性平かにて、味甘く毒なし、肉肥、色赤くして鮮明なること、松の節のごとし、故ニ松魚と名づく、東北江海の中ニ生ず、【大和本草】相州鎌倉或ハ小田原の辺ニてこれを釣て江府ニ送る、その早く出るものを初鰹と称し、賞味す、○烏帽子魚、鰹を云、其部ニてみるべし、

【兼三夏物】

麨 【和漢三才圖会】麦を炒、磨て細末ニし、飛羅て冷水ニ浸しこれを喫る、砂糖ニ和して愈食之、○俗ニ麦こがしと云、

早鮓 是又一夜鮓と云、ちかごろハ此製、魚貝の数種を細く截て醞醸す、故ニ柿鮓とも云、其熟することすみやかし、依て早鮓、一夜鮓とも云、

もろく鮓 【毛吹草】羽州秋田のもろく鮓、是鰶ニ似る魚之、

蝿 【本草】夏出て冬蟄ス、暖を喜び寒を悪む、其蛆を胎く、蛆と生ズ、灰中ニ入て蛹化して蝿となる、蚕蛹の蛾ニ化するが如し、水ニ溺て死し、灰を得て活く、

蝿虎 【同上】小蟢蛛之、専ら蝿を捕て喰之、是を蝿虎といふ、

方目鳥 【和漢三才圖会】鷭（正字未詳、按ニ）大さ鳩の如し、黒色、短き尾、尖なる嘴、本紅ニ末黄之、脚長くして正青し、常ニ田沢ニ鳴、夏月鷭を以て上饌とす、味美之、又大鷭ハ形ち鷭ニ似て大之、形色少し異之、【尓雅集註】鳩ハ即ち護田鳥なり、人をとる時ハ鳴く、主の宮を守るニ似ることあり、故ニ名之、

茗草 【蘓頌曰】根叢生を作す、竄毎ニ三十茎を豊ニ、赤きも黄なるも、七月黄花をひらく、○陶弘景曰、茎苗を取て掃帚とす、

水馬 け部、競渡の条ニ注す、

梅雨 さ部、五月雨の条ニ注す、

半夏生 【本草】半夏、一名守田、礼月令曰、五月半夏生、蓋當夏之半、故名、守田、【月令廣

義」半夏ハ薬草之、夏の半ニ居て生ず、

○五月中より十一日を半夏生と云、

反舌無声

「月令」ふくろふ、「礼記疏」ニ反舌を蝦蟇とす、

博多百合

「和漢三才図会」花黄白色ニて、背ニ赤き斑の文理あり、云々

花菖蒲

白菖の属之、其葉水菖蒲ニ似て、色淡青、水陸ニ宜し、共ニ叢生す、五月一莖を抽て、莖端ニ花を生ず、形状燕子花の如し、紫淡紅白ホの数色あり、最も愛観すべし、水菖蒲ニ似て花をひらく故ニ花菖蒲と云

紫羅欄花

「本草」白菖二種あり、一種ハ池沢ニ生じ、根大ニして肥白く、節疎ハなるものを白菖と云、俗ニ是を泥菖蒲と云、一種ハ溪澗ニ生ズ、根瘦赤節稍密なるものハ溪蓀之、俗是を水菖蒲と云、「和漢三才図会」白菖ハ、葉花皆燕子花ニ似て、瘦小く、其花紫色、又白花あるあり、淡紅なるもありと云、

花がつみ

咲との

古来浅論多し、但し「八雲御抄」「童蒙抄」其外「顕注密勘」ホの諸书ニ、菰のこととせるニ姑くよるべし、又田字草のことゝと云説もあれど、物の絵様ニ四出の花をかけるを、かつみぐさと云、是ハ田字草のことをいふなるべし、

初蟬

虫部蟬の条ニて可見

羽抜鳥、羽抜鴨

凡諸鳥、五月羽毛脱落あるなり、禿頭のごとし、ことさらに羽抜鳥と云、

「新六」夏草の野沢がくれの羽ぬけ鳥あとしふをあらくあるらぬ身ぞ　為家

六月

博多祭　十五日

○博田櫛田の神社ハ、筑前国那珂郡ニあり、祭る所の神、中殿ハ櫛稲田姫命、或説ニ大若子命、勧請ハ天平宝字元年、右殿ハ祇園牛頭天皇、勧請ハ天慶五年、左殿ハ天照皇太神宮、勧請年月詳ならず、件の三神相殿之、正月八日正大般若を修す、六月十五日祇園会、十一月二ノ卯日新嘗会、今六月十五日祭礼を行ふ、（古ハ六月十六日十七日）永享四年六月十五日始て祭之、作り山六基、大サ京師祇園会の山ニ四倍と云、右山次第ニ上張りニ組上ケて、階上凡百人を居らしむべし、一基を引もの凡千人ぞ、又木偶人ニ鎧を着せて、階上ニ立て、其甲冑ニ皆姓名と書あらハすが故ニ、領主の家臣我おとらじと美を尽して着用の鎧を出すこと、此祭礼のならハしとす、神輿三基、供奉の行装又厳なりと云云

橋立祭　廿五日

「風土記」丹後国与佐郡艮の方ニ速石里あり、里中ニ長き大崎あり、長サ二千二百二十九丈、廣サ九丈二尺、是を天

橋立と名づく、云々又ハ久志濱、又ハ久志之渡と名づく、【拾芥抄】智恩寺ハ是切戸文殊安置の道場なり、天竜六斎灯明を供ス、【紀事追加】六月廿五日、丹後切戸の文殊会、同橋立祭ニ云々、文殊会橋立祭同事也、○天橋山智恩寺ハ、延喜四年甲子勅して山号寺号をたまひ、荘田を賜ふ、そのゝち四百余年をへて、嘉暦年中、嵩山禅師住持ス、是禅刹の始也、夫より三百余年、住侶詳ならず、寛永年中、国主京極高廣、別源禅師を請じて住持せしむ、是より洛の妙心寺に属す、寺領五十石余、文殊堂ハ巽向也、明暦年中改造、堂内ニ延喜の勅額あり、云々、○橋立明神ハ、本社豊受太神を祭る、左ハ大河大明神、右ハ大竜王を祭 ○伊祢浦名所也、伊祢ハ惣名なり、九日出より亀島まで入江の裏向也、云々丹後鰤と云ハ此所にてとる、鯨なりとなん、○天橋立ハ、与佐の海中にある長洲也、長サ三十六町、土人浮島と云ハ誤なるべし、松樹並木のやうに連なり、碧海中央六里松と作りて、詩人六里松と称ス、社の近処樹の茂りたる所を濃松といひ、まばらなる所を淡松と称ス、云々俗に三保ハ捐ぢしく、橋立ハ一枚をろみとのへりさることも

なりとや、二町ばかりの舟渡あり、是を九世渡といふ、世に切渡の文殊といふも是也、云々内外濱、子日の崎、萬代の濱なといふも、此橋立の別名なりとぞ、○竜灯松ハ、洞が磯の辺にあり、松揚蓋のごとし、

半夏草

【蘓頌図経】半夏、二月苗を生ズ一茎、くきの端に三ッ葉あり、浅緑色、頗る竹の葉ニ似たり、○此との和産と相同じ、花ハ夏のをはり秋に及ぶころにたらず、

蓮花

【介雅】荷ハ芙蕖也、其茎ハ茄、其葉ハ荷、其の花ハ菡萏、其実ハ蓮、其根ハ藕、其中ハ菂、菂の中ハ薏也、注ニ曰、芙渠ハ總名也、別名芙蓉、菡萏ハ蓮花也、○【愛蓮説】蓮ハ花之君子者也、○池見艸、露堪草、水堪草なと、の異名也、

蓮実

貞徳曰、蓮ハ花ニ実と具してある故に、蓮の実も夏也、蓮の実飛も秋なり、

よゝく草

あの部、麻の葉の条ニ在ス、

に

【四月】

日光祭

十七日

○十六日例幣使野州日光山へ参向、拝礼の儀あり、申の刻神輿三基、御宮を出し奉て、新宮の拝殿に迁幸なし奉ると宵宮と云、三仏堂の前に於て、例年の舞を奏ス、翌十七日巳刻に榊と御旅所に渡し奉る、次に御祭礼供奉の行装あり、新

月になれバ神山のあふひの葉がくれをとづれもなし、神山ハ賀茂の神山をいへり

貞好草 和漢三才図会 芍薬の一名也、花の容婥約なる故に和俗、貞好草と名づく、

垣見草 卯花の異名、蔵玉 時鳥をとなふかきねなりしにかきみぐさ花咲にけり山里の宿、

要の花 和漢三才図会 扇骨木、高サ二三丈、葉ハ海石榴の葉に似て狭く小し、細なる鋸歯あり、面滑らかなり、四月小白花をひらく、細子を結び簇をなす、八九月赤く熟す、其木最も堅く扇骨とするに堪えれバ故に名づく、

柳の花 注、秋の加部なくなるで、猿蓑集 洗濯や衣にとまる柳の花 薄之

杜若 かほよ花 かほ花 和漢三才図会 燕子花、其葉白菖に似て大ゝし、色淡く、其花実ともに白菖に似て肥大なり、紫色を正とす、近ごろ浅紅なるもの白色なるものを出すことあり、変種也、五月を盛とす、又四時に花を結ぶものあり、参州八ツ橋の産名を得たり、○良き花 蔵玉 まつくさの多き中にもかきつばた花折袖までを紫なる、○貞花 仙覚万葉抄 かほ花ハ杜若也、貞鳥が啼とき咲バかほ花と云 万葉ニ貞花とよめるハかきつばたなりとも定めがたけれど、姑く仙覚の説にまかせて載之○かきつばたに

若の字を用ゆるの実ハ誤也、杜若ハヤブミヤウガ也、燕子花と書るべし、又和名抄ニハ劇草とかきつばたと訓せり、

風車の花 花彙 纏枝牡丹 蔓艸、葉茎鉄線の類也、花ハ瓣にして單葉蒼碧色、其形風車に似たり、又白色あり、三四月花をひらく、

かんこ鳥 和漢三才図会 加豆古宇鳥、正字未詳、疑らくハ是郭公なるべし、状ハ杜鵑及び虫食鳥に似て、微赤色を帯び、腹白くして黒斑あるのミ、脚の指も亦二ツ前二ツ後也、偽て杜鵑として賣之、仲夏の後声あり、秋後声をとゞむ、其声大にして円亮、加豆古宇と云がごとし、毎ニ山林にをりて人家に近づかず○真渕翁ハ俗ニ云かんこ鳥ハ喚子鳥の字音にて唱へ誤まるものなりといはれたり、

蠶蛹 孟夏 月令 月、蠶事畢后妃献繭 和漢三才図会 繭を作らんとするとき、葭簾を用て棚とす、てきに放つに桑を食ずして、身白色ニ透明なるものを撰取て、櫃の中に投ず、先ヅ稍あるひハ枯菁草を用て、縦ざまに内れて、蚕の寓居とし、数千の蚕おのおのまゆを作て蟄る也○原蚕 周礼註 云、原ハ再也○一名晩蚕、又ハ二番蚕也、春部あるをみるべし、

宮より御旅所へ至るの間、凡十五町ばかり、兵士鳥兜鉾を持、職士赤面の大鉾ハ、猿田彦命と表ス、獅子頭、田楽法師、神楽男八乙女、二綱馬上素襖裳袷社家馬上束帯、御神馬、御弓、御鉄炮、甲冑童子、御翳大鼓鉦、鼓猿公、宮仕、神人、伶人奏楽木有之、鷹匠御祭礼奉行諸武家駕輿丁素襖、御本社神輿、白張百人素襖廾人、山王（一説ニ日光権現とも云）の神輿、白張百人、社祢廾人、麻多羅神神輿、白張百人、社祢下廾人、行者山伏群行ス、御旅所ニ於て献供の間、東遊奏楽あり、終りて神輿還幸、御本社ニかへり奉る、日光三社とハ、新宮大己貴尊、滝尾田心姫命、本宮味耜高彦根命、外ニ家光権現、こまた下照姫あり、三社の祭礼ハ三月三日あり、

煮酒

【東医宝鑑】煮酒ハ味ひ殊ニ佳く夏月のむニ宜しきこ是本邦の煮酒ニ似たる名目を挙るし、本邦ニてハ夏日酒の氣味を失はざる為ニ煮酒の法を用ふ、京師ニてハ是を酒煮と称し、此日酒肆、親き蹤をとぶらふす、價をもしバ悉ニ酒とのましむ、是を酒煮の祝といふとぞ、

兼三夏物

煮冷

ひ部、冷汁の条ニ注ス

煮取

【和漢三才図会】鰹節を造る時、其液の滞るものを取て、これを收む、黒紫色、味甘美○煮取らく寒でもお僧愚かし　嵐雪

五月

入梅

さ部、五月雨の条ニ注す、

忍冬花

金銀花○弘景曰、此草藤生ス、冬しこ凌て凋まず、故ニ忍冬と名づく○時珍曰、木ニ附て蔓延す、莖微し紫色く、節ニ對て葉を生ず、葉薜荔ニ似て青く、濇毛あり、三四月花をひらく、長サ寸ばかり、一蔕ニ両花、二瓣一ツハ大、一ツハ小、半辺の状の如し、長蕊、花初てひらくときハ蕊瓣ともニ白色、二三日をふれバ色黄ニ変ず、新旧相まじりて相映ず、故ニ金銀花と呼ぶ、気甚だ芬芳し【和名抄】忍冬（和名須比可豆良）

鳰の浮巣

【大和本草】鳰、字彙云、好テ入ニ水ニ食フ、似テ鳧ニ而小、鸊鷉もかいつぶりとあるべし、俗ニ鳰の字を用ふ、万葉以下の古哥ニ、鳰鳥とよめる是也、水上ニ浮巣を掛て風ニ随てたゞよふ、【無名抄】祐盛法師曰、鳰の浮巣をよめるこそ、かの浮巣そ、ゆゝしあるべきことにあらバ、海の潮ハみちくることのあまりハそまをとりて、鳰の巣をくふえ草のくきを中ニこめく、係も枯穂とぞ、くろげてめぐりにひかれハ、潮ミちてぞ上りあらハ、汐ひきバおちくだりてくゞる也、【幻住菴記】今年湖水の波ニたゞよふ、鳰の浮巣のながれとゞまるべき、芦の一もと

の蘆芽のをしくいふ　貞享式　鴫とらひ鷺とのてハ、いまてきろ水鳥の用あらバ巣ともいひて八夏と決すべし、鳰の浮巣といへバ古式ニ雑と定せることにて、水中の芦ゆ巣をかけて搦めバ、水の増減ゆ浮き沈みて、四季ともに其まゝ捨おく故ゆ道理をつけて雑とハあれど、鳥の古巣ハかならずさるものなれバ、其巣とかくる時ハ夏ならで、浮巣ハ決して夏と定むべきものなり、巣を用ることハ句作みきるべし

六月

蒜根

本草　葫蒜、夏月根と食、ことに旅途ゆ携ふる時ハ、冷風瘴雨加ふることなし、○和俗土用ニ入る日、蒜及小豆と食するハ瘟疫を辟んが為也

ほ

四月

佛の産湯　ふ部、仏生会の条ニ出

厚朴の花

本草　厚朴、其木質朴にして皮厚し、故ゆ名づく、和漢三才図会　按ゆ、厚朴ハ、葉大なるものハ尺ゆ近し、枇杷の葉ゆ似て刻遠なし、色浅緑、冬凋て春嫩葉を生じ、夏花をひらく、形牡丹花のごとく、色浅紫、大サ一尺むう、随て実を結ぶ、冬青子ゆ似たり、熟するときハ殻自ら裂て裏赤く、中の子黒し、老木の皮ふかく鱗の皺あり、剥て薬用ニ入、

牡丹

事物紀原　隋煬帝の世ニ始て牡丹と傳ふ、唐人も亦木芍薬といふ、開元の時、宮中及び民間競て尚之、今品極て多し、貞享式　牡丹、杜若、この二名ハ和漢の違ひありて、詩ニハ牡丹を春とし、哥ニハ杜若を春とす、中古ゆ俳諧の加減より二名を夏ゆ用ひられて、初夏ニハ花のさかり故なるべし、○木芍薬、花の王、ふかみ草、廿日草、富貴艸、よろひ草、夜白艸、名取草、以上牡丹の異名なり、おのおの頭字の部ゆところに出せるとみるべし、○年浪草ニハ八雲御抄を引て、山橘と牡丹の異名とせるハ八雲の誤と傳へたるものなり、万葉ゆよめる山橘ハ藪柑子のこと、又先代旧事紀と引て、豊橘を牡丹のこととするもいぶかし、此先代旧事紀ハ偽書なれバ専ら取用ひがたし、此二の名、牡丹ゆ用ふべからず、

寶鐸花

本艸　鬼臼の一種なり、葉数層をなす、大蓖麻ゆ似て、面青く背紫なり、細毛ある、葉下ゆ茎を付て、一花をひらく、状鈴鐸のごとく、倒ニなりさかる、青白色ニて黄蘂中空し、黄なる実を結ぶ、風吹けバ動かず、風なけれバ自ら揺くと云〻」和産のこの、形状相似て異也、つくばね　この草、園史艸史ニ載ス、俗ニ狐の挑灯といふもの是なり、茎の高さ一尺バかり、葉ハ野車ゆ似て、やや細し、白花ひらく、内ニ青さ

彩竪に三條ばかりあり、花無咲てかさとの宝鐸に似たり、江東原野に多し、又く

杜鵑 和漢三才図会

鵑の形ハ雀鷂にるゐして、色灰黒腹白し、鷹の鬚あり、翅も羽も白き斑あり、口中赤く、頭に小冠毛あり、脛掌蒼色、其前の指二ッ、連膜あり、後の趾二ッ、諸鳥に異なり、季春鳴声はきんかけたかと云がごとし、夏に至ては最多し、初秋に至て声やむ、冬月ハ深山に蟄すと云、○杜鵑の一名、和漢ともにさはなく多し、杜宇、子規、鶗鴂、郭公、霍公鳥、姉帰、○蜀魂、不如帰、冥途鳥、四手の田長、沓手鳥、倶支羅、謝豹、橘鳥、時の鳥、恋し鳥、三月過鳥、綢鳥、童子鳥、賤鳥、勧農鳥、以上各頭字の部にわかち入て注す、○杜鵑ハ鶯の巣の中にて生育せらるゝと、古へよりいへり、万葉 鶯之生卵乃中尓霍公鳥独所生而已父尓似而者不鳴己母尓似而者不鳴（下略）、又 續世継物語にもと このことをそへてあり、其時頼政哥、うぐひすのこのこなるほとゝぎすいづれの音かまさるらんとよまれし、今もたまく鶯の巣のうちに生ずるを見る事あるよしいへり、

兼三夏物 子子 和 漢

三才図会 俗に云棒ふりむし、溝泥の中、温熱相感じて小蟲を生ず、長さ二三分、灰黒色、微し科斗の形に似て、常に一曲一直して、棒を振る状のごとし、

蛍

月令 腐草化為蛍 和漢三才図会 蛍大抵（大サ三四分）黒色にして、両額に赤点あり、臭気あり、其尻銀色の如、夜光を出す、紙に裹めども亦光り外に徹る、麦稍と用て揉砕けバ銀砂のごとし、○窓の蛍 蒙求 晋の車胤家貧しくして常に油を得ず、夏月にハ練の嚢に數十の蛍火を盛て書を照らし、夜を以て日に継ぐと云ことより窓の蛍とハ云て、○近世哥学家の説に俗にほたるびと云ハ漢字に蛍火と書けるを、そのまゝよみくだせる言にて、本邦古くほたるびといひしことあらず、実に後世の俗言なるべし、但し和泉式部家集などにも、ほたるびとよみたる哥もあれど、今ハ漢語俗言ともに、そのまゝ用ゆる俳諧の上にハ、きらひなく用ふべきことにあらん 猿蓑集 蛍火や吹とばされて鳰の闇」

五月 蒲人

金門記 午日、菖蒲を刻て、又或ハ葫蘆諸物をつくりて、笄に戴く、以て邪を辟くといふ

火串

ね部、躬狩の条に注す、

六月 乾瓜

和漢三才図会 新瓜を用て縦に八ッに切劈

麪を去り、塩に搓し、暑熱の石上に晒乾し、六七日にして能く乾たるを磁器に収め、用るときは鹹汁を洗ひ去り、切片ぎ酒に浸して食ふ、

乾飯

引飯【同上】糒ハ乾飯之糯を用て飯に煮て晒乾し、粗く磨り、頭末を去り、中斗のものを取る、夏月冷水に浸し、饌之、奥州仙臺道明寺に作る処最も佳し、○常に道明寺と云

へ 兼

【三夏物】

蛇 蛇の種類最多し、委くハ本草にみえたり、【多識】

【萹】金蛇（古加祢倍美）、銀蛇（志呂加祢倍美）、水蛇（美豆倍美）、蝮蛇（文知、波美）○此外書つくしがたし、

【五月】

蛇衣脱

【本草】蛇皮、蛇殻、竜子衣、等の名あり　別録云五月十五日にこれを取てよし、【蘓頌圖経】南中木石の上及び人家墻屋に多くこれあり、蛇蛻時なし、但し不浄を着れバ即ち蛻く、或ハ大飽してまた亦脱ス、

紅藍花

末摘花【同上】紅藍、其花紅色、葉ハ藍に似たり、故に藍の名あり、人家の場圃に種る処、冬月、熟地に子を布く、春に至て苗を生ズ、夏花あり、花の下に捄彙を出して刺多し、花捄上に出づ、園人これを采る、采りやむれバ復出づ、尽るに至て止む、捄中に実を結ぶ、白顆小豆の大サの如し、その花を曝し乾して、真紅を染、又胭脂を作よ、【和訓義解】此花、初め末より開次第に本に咲し、咲に随く摘とるゆゑに末摘花といふ、

【六月】

糸瓜の花 秋部に注ス、

へ と

【四月】

土塔會

十五日○摂州東生郡四天王寺南大門の下土塔塚の前に塔の宮あり、祭る神牛頭天王也、古へハ毎年四月十五日大祭礼を行ふ、今他領となりしより大祭礼絶たり、されども今に於て、天王寺の僧堂司等人催等出仕、神事を行ふ次第四ケ法用、仁王経、法則、舞等ありて是を土塔会と云、

常磐木の落葉

四時凋ざる諸木の、新葉生じて後古葉の落るを云、年浪草、多くハ松のことを常磐木と哥によめり、松の落葉ハ秋とす、夏ニハ松の外の冬木をも云と覚へ、泥ありとて松其外四時不凋の木をとりて季とすへし、○

清滝や波にちり込青松葉　芭蕉

常夏 なでしこ部、撫子の条に注す、

時の鳥

杜鵑を云、時鳥と云ふ字のまゝに訓るなるへし、【経房卿家歌合】

名にたてる時の鳥とやちぎりけん卯月をまちて初音鳴らん　俊成

【三夏物】

通鴨

【大和本草】日光山中禅寺の湖に真鴨に似て甚小し、黒鳧に種ハ淡黒也、常に居て、北へ帰らず、○凡水鳥、秋冬に渡るものハ春月かへらず古巣に帰る、その中に稀に池中に常居するものゝたぐひ、芦葦の間に巣を営みて雛を生あり

こゝすくと通し鴨と云、

五月

桃印符

【續漢書】桃印ハ本漢の制、以て悪氣を止む、今の世端午ニ綵繒篆符を以て相問遺ありき以て戸帳の間ニ置く、【本草】風俗通云、東陽度朔山ニ太桃あり、十里ニ蟠屈ス、其北ニ鬼門あり、二神是を守り、以て凶鬼を禦ぐ、

螳螂生

【月令】小暑至螳螂生ル

虎が雨

【紀事】毎年五月廿八日多く雨ふる、俗ニ又大磯の虎娘子、曽我祐成ニ相別る涙変じて雨となる、故ニ今の雨ハ虎御前の涙之とも云○虎ハ祐成討死の後尼となり、所の翁を案内として井手の屋形のあとより、祐成の最後の跡をとひけれども数ふしづみて、「露とのミ消えし跡を来てみれバ尾花がすゑに秋かぜぞふく、此哥曽我物語ニ見ゆ、

照射

猟ノ部照狩の条ニ出ス、

六月

土用

【月令】中央土其ノ日ハ戊己、注ニ土ハ四時ニ寄旺するニ、各十八日、共ニ七十二日、此を除くときハ木火金水もまた各七十二日、土四時ニおいてあらざるところなし、故ニ定る位なし、専気なくして、辰戌丑未の末ニ寄旺ス、未の月ハ火金の間ニあたる、又一歳の中ニ居故中央土一令を此ニ掲ぐ以て五行の序となす、

土用干

むノ部、虫干の条ニ出ス、

虎尾草

【大和本草】虎尾艸ハ葉の如くして長く尖り又徐長卿ニ似て茎の長さ二尺余、夏秋白花をむらがりて穂となす、形ち獣の尾の如し、花紅白の二種あり、此外の中華ニ所説なし、

時計草

かつらニ似て細き蔓出竹木ニとうつきてのぼる、葉切込ありてすこぶる葉のごとし、花形てつせん風車ニ似たり、朝四ッ時ごろより花開き暮六時萎む、その次の蕾又明日ひらく、花ハ一日なれども相続て盛久し、花ひらくときの様子傀儡を操るが如く、回るゝべりハ尉火蘂なり、上下へかつる蘂丈なり、其さま時計の機の如し、○享保年長崎より初て来る

東陵瓜

【続蒙求】邵平ハ故秦の東陵侯之、秦亡びて布衣となり、家貧くして瓜を長安城の東ニ種、瓜五色あり甚美し、世ニ是を東陵瓜と云、○又支那の瓜ニ東門青門などの名あり、これ邵平が故事による、

黐突

【和漢三才圖会】黐膠ハ鳥を黐所以のものなり、其樹数種あり、深山ニありて、葉大ニして子を結ぶざゞらとの黐とてつよし、子と結ぶその黐として少なく、其色もつとも、木葉女貞ニ似て薄く光沢あり、四時凋ず、

とらへても、只二三ヶ落葉す、四五月細き白花を開き、子を結ぶ、正円うして熟すれバ紅色、攅り生る、其木の皮を剥て水ニ浸し爛らして、是を流水ニ濾て皮滓を去れバ薪筋の如くして、甚稠粘ニ入用て鳥雀を粘す、是を黐と云、

心太 和名抄 大凝菜、（和名古留毛波、俗ニ用心太二字云古）古呂布止○ 本艸 瓊枝 本朝式 凝海藻 閣書

石花菜ハ海石上ニ生ズ性寒、夏月ニこれを煮て凍となす、

ち

四月

地主祭

九日 庚富記 文安四年四月九日庚午、清水地主権現祭之、神輿午刻還向あり、其後獅子舞あり、田楽等の舞了る、○ 雍州府志 地主古ハ旅所白山通五条の北ニあり今石地蔵の存る所也、祭日暫し神輿を経書堂の前ニ居ゆ是旅所の義を表するなり、清水縁起 祭る神田村将軍の霊也、弘仁三年四月延鎮奏して清水寺の鎮守となす、

苣 田圃家園ニ多く栽、三四月薹を起し、茎肥、中空く

薹 して脆し、これを折れバ白汁あり、葉毎ニ茎を抱へ相重りて又生ず、四五月黄花をひらく、初て綻ぶる野菊のごとし、一花子をむすぶこと鶴蝨の子のごとし、云と

茶挽草 和漢三才図会 雀麦 茶挽草田野ニおのづから生ズ、苗葉小麦ニ似て弱小也、穂細く小児穂粒を爪の上ニ載れバ旋回するを茶磨を挽がごとし、依て名とす、

五月

重五 月令廣義 五月五日故ニ重五とも云、

粽 菰粽、角黍、錐粽、茭粽、秤鎚粽、九子粽、芦粽、筵粽、飴粽、飾粽、字彙 粽糉同、一名角黍、風土記 端午ニかざりちまき粽、鶩を烹筒糉を進る、一名角黍、菰の葉を以て粘米粟棗と裹み灰を以て煮て熟せしむ、蓋し陰陽包裹して未ダ散ぜざるの象なり、月令廣義 九子粽ハ角黍之、唐の時歳節端午ニ、粽の名甚多し、形制も一ならず、角粽、錐粽、茭粽、筒粽、秤鎚粽（或ハ秤錘粽ニつくる）或ハ百索粽、九子粽あり、続斉諧記 屈原五月五日汨羅ニ投ず、楚人これを哀ミ、此日ニ至るごとニ竹の筒を以て米を貯へ、水ニ投じて祭之、漢の建武中、長沙の欧回白昼ニ一人を見る、自ら三閭大夫と称し、回ニ謂て曰、祭らるゝこと甚よし、但し蛟竜ニ竊らるゝことを苦しむ、今もし恵あらバ楝の葉を以て其上を塞ぎ、五綵の糸を以てこれを縛るべし、この二物、蛟

竜の長ろ、所々と、今の人粽とつくり、綵糸及び楝の葉と帯ぶ、蓋この遺風也。本章 古人菰芦の葉を以て、黍米をつゝみ、煮て尖角となす、椶櫚の葉の心の形の如し、故に椶ともいひ角黍とも云、近世多く糯米を用ふ、今俗五月五日節物とする相おくる也、或云、屈原を祭る為にこれを作りて、江に投ずといふ

本朝食鑑 飴粽ハ、糯米を用ひて、蒸熟し、搗て餅と為、稲艸につゝみ、外を稲艸を以て縛て、甑の中に蒸熟し、とり出して、稲艸を剥さるときハ、黄白の色にして、飴の色の如し、故に名づく、味美也、微し香ありて、粽の類、市人道喜と云者、巧に之を造る、故に道喜粽と云、今京師の市上、専ら此粽を以て、贈遺の物となす。○飾粽、かざり粽ハ、天福本伊勢物語に、かざり粽と云て、注に、五月五日、粽をいろ〳〵の糸にて結ひたると云、拾遺集十八の詞書にかざりちまきとらんとて、今も大内にハ五色の糸にて飾れる粽をまゐらし、○今按に、伊勢物語、かざりちまきとある本ハ全く、かざり粽の写誤とつくりなるとのく、此段ハ、大和物語にも出て、かざり粽とあき、又伊勢物語大かたの本には、かざり粽とよまバ、此ちまき粽と云名目ハ削りて去べきなり、塩嚢抄 粽の形ハ蛇に似せて巻く、是を服して毒虫を殺すことを表す

長命縷

續命縷、辟兵繒、五綵絲、朱索、條達 風俗通 五月五日綵縷を以て臂に繋ぐ、人鬼及び兵を辟け、人をして瘟を病ざらしむ、一名長命縷、一名辟兵繒、一名五色縷、一名朱索、初学記 北人端午に雜綵を以て、合歓索と結び手の臂に纒ふ、一名條達、又條脱と云、雜物を織組て相贈遺る、及び日月星辰鳥獣の形、文繍金縷帖画を至尊に献ず、○是本邦の薬玉に同じく、部薬玉の条通りみるべし、

竹酔日

九部、竹植る日の条に出す、

六月

竹生島祭

十五日 神社

啓蒙 竹生島の神社ハ、宇賀御魂神、聖武天皇天平三年辛未、竹生島の神現形ス、神社考 竹生島ハ江州の湖中にあり、其巖石水精の珠多し、本朝五奇異の其一也、傳き、孝霊天皇四年、江州の地湧て湖水始て湛ふ、駿州富士山忽に出、景行天皇十年、湖中に竹生島初て涌出ス、昔行基菩薩、此島に来るとき、神女現形ス、行基をしめて寺を建て、辯才天の像を置、紀事 例祭六月十四日十五日、是を法華会と云、湖上に舟を浮べ、音楽を奏ス、神輿の船湖上に浮ぶ、毎年正月十日、社僧の中にて頭人を撰む、

○社僧説曰、此祭ハ江州浅井郡の中ふて、豪富の人を撰て、頭人を定む旧記ニ云、神亀三丙寅年、天照皇太神宮、祭主廣見ふ神勅ありて、岩倉山太神宮寺と云額を送りたまふ、札所観音と宝厳寺と云、同年六月十五日、聖武天皇、橘諸兄、房前大臣、両勅使と以て、蓮花会を修せしめたまふよりこのかた今ふ至て祭祀絶ず、毎歳頭人両人を定め、神事を司らしむ、浅井郡揔氏神なる故、四民共ふ差定ス、往古ハ、近江国中へ差定せしむに、按るふ、この島、叡山ふ属ス山門由緒あるの灵場なれバ、近江一国ふ預ること疑べからしバ、此祭ハ先ッ六月朔日ニ尊天を、頭人の家ふ神幸し奉る、（天女の新像）是を假屋ニ安置し、十四日迎と御旅と称ス、此日島ふ於て舞楽あり、児四人舞之、十五日新造の天女の尊像と、神輿ニ近し、還幸を催し、頭人供奉なして、神輿を、早崎の一の華表へ立、供物を参詣の人ふ施しあたふ夫より島へ渡御、神輿船を島船と云、金翅鳥を粧ふ故ふ名く、笛太鼓ふて囃し、大船二艘を舫ひて、大竹ふ五色の幣をたて、幕を張、神輿船を飾り、頭人夫婦供奉ス、管絃船、警固船ホ、大船十艘漕列ねて島渡す、是を法華会と云、神事の法会、多く蓮花を用ふ故ニ名づくと云、又三月三日、心経会を修ス、俗ニ是を島繋と云、別ニ記す、

竹生島妙覚院登翁記

茅輪、菅貫

神社考 素盞烏尊、児童たりし時、牛頭天王と号ス、又武荅天神と云、或時、南海の女子を通ひ、日の暮ふ会ぬ宿を路の傍ふ借る、二人あり、兄を蘇民将来といひ弟を巨旦将来と云、兄ハ貧しく弟ハ富り、神宿を巨旦ふ乞ふ聴ず、宿を蘇民ふ借る、蘇民これを許す、粟箕を坐として、粟飯を献ず、其後八年ふして、神其八子を将て、蘇民が家ふ来りそその徳を報ぜんと欲し、蘇民ふ教て茅の輪を作らしむ、其夜天下疫病大ふ行り、人民死るもの其数をしらず、唯蘇民が家のミ免るゝことを得たり、是ふ於て、武荅天神告て曰、我ハ是速須佐雄能神之、今より已後、疫をし起らバ必蘇民将来が子孫なりといひて、茅の輪をつけしめて、其災を脱るべし、

御湯殿記 晦日、夜ふのへて輪ふへてまゐて、チガヤふて調る、輪へへやうのこと麻の葉を長サ一尺斗ふ二三本紙ふてつゝミ、持て、左の足より入、右の足より出る、以上三度也、此時の哥、（和泉式部）おもふこととおなつきぬるて麻の葉をきりふさうてをちなくつるれ、輪のうちくやう、輪一ッをまゐらせて（とまいらする）、今ハ中をワラふてまとうく、上を杉原ふて包、（ヒキサキふして）くるゝ、七月朔日の朝、荒神河原

挂川へたてまつる、蔵人所小舎人山科家紀氏調進○菅貫を茅輪も同物也、加茂神事次第ニも、次入菅貫之輪云々、菅茅ホを以て製しつるものなり、○名越祓の条ゟ併見るべし、

竹夫人 竹奴 青奴 和漢 抱篭 三才図会 抱篭、俗ニ竹几と云、夏月の夜これを抱て涼を取 劉熙釈名 竹几、又竹夫人と云、山谷詩 趙子充ニ示ス竹夫人詩、蓋涼寝竹器、憩臂休膝、似非夫人之職、予為ニ曰青奴 雑談抄 和俗竹を以て篭を作る二囲ミて、長サ五六尺、短きものの三四尺囲も又小きもののみし、昼夜臥寝の時、身ニ抱て涼をとる、名づけて抱篭と称す、

り

四月

龍頭太 い部、稲荷祭の条ニ出、

龍華会 ふ部、仏生会の条ニ出、

五月

両社祭 廿三日○江州下坂本ニ社あり、下坂本ゟ唐崎ニ至るの路傍ニ両社あり、南ハ若宮権現、北ハ酒井大明神、例祭五月廿三日、神輿二基遊行す、土人産土神とす、山門悦蔵坊代々両社の事ニ預る、両社修造のことハ因縁あるを以て、藝州の国主より営せらるとぞ、

六月

林檎 和漢三才図会 其実穴窪溝ニ、縄の痕の如し、徐く熟して半青半紅、味ひ淡く甘し微酸く脆く義あるもの、俗ニ云、頻婆果なり、

ぬ

兼三夏物

蓴 志部、蒓菜の条ニ出ス、

五月

鴝鵒の舌を去 零凌記 鸜鵒ハ人多く養之、五月五日其舌の尖りを去れバ語をよくす、邑の清越し、鸚鵡ととふも過ることあるなり、○時珍曰其舌人の舌の如し、剪剔すれバ人言を作ス、

る

を

四月

大神祭 上卯 神社啓蒙 大神社、大和国城上郡ニ在、祭る所一座、大己貴命 公事根源 先丑日ニ使立つ、大原野の如し、此祭ハ冬ハ寅日使立つ、其故ハ夏ハ卯日の暁、冬ハ夕ニ祭る故也、大神とハ大三輪の神也、大物主神の御事也、三輪とい本縁ハ、この大物主神、活玉依姫といふ女のもとへ、しのびニかよひたまひせのみくそ経、志らぬ人ニあやしみて、その女懐妊ニ及びて、父母あやしびこのことをとひしに、女ありのまゝにこたへて、神人の来ませしむ時、糸のをだまきをくりて針を付て、衣の裾ニ付けしむ、その糸をとめて行けれバ、ここもとにありしゆゑ、三輪山とぞいへる、

大津祭 上亥○四ノ宮神社ハ、江州大津の四の宮にあり、

【神社啓蒙】小日枝、大日枝、氣比、小禅師、右四座同社に坐す、故に四宮と云。○社説云祭る所五座、中ハ彦火々出見尊（小禅師）、左ハ地主神、大国主神（大日枝）、右ハ塩土老翁（日吉神）、国常立尊（小日枝）、氣比神（仲哀）をもつて五社の中、彦火々出見尊を以て本社とす、故に四の宮と云。○此祭も日吉祭之、日吉祭の榊伐とありて、三月中に近江一国の中より何方なくも切出スと、其榊と、飯室道の廣芝と云所の、相生の松に立掛て置き、四月朔日の頃、日吉大宮の拝殿に移す、同三日大津四宮より濱成礒成と云との、（是ハ大宮鎮座の時、粟津子居といふ人ありて、大宮の神あがりて宿りの所にて、今の山王の社地播殿のことを告奉りし人也、粟津の神と崇む、故に今に其宅を仮に称しか、榊迄の魁首よりて大宮へ粟の飯と供しことあるゆへ、舟にて唐崎迄大宮の供奉ス、）今日も衣冠にて、笠鉾とさゝせ、日吉の大宮へ来り、拝殿の榊と取て帰る、其体、石の鳥居までハ無言にて、ものびやかなる体也、鳥居を越ゆれバ、取浄る形勢にて、大鼓を打、囃子をはやして、八柳に至る、（俗に七本柳といふ所）此所より舟にて大津へ着岸し、四宮の拝殿に移す、此日を坂本山王祭まで、此処の神事也、申ノ日山王祭にまた坂本へ榊を帰し渡スと、（其次第山王祭の条にしるす）

老鶯

【枕草紙】夏秋のまでも老ごゑに鳴て、云々【十論為辨抄】（支考著）あるとき故翁のものがたりに、此ほど白氏文集をみて、老鶯といひ、病蚕といへる、此詞のおもしろければ、鶯や竹の子藪に老を啼、さみだれや蚕わづらふ桑の畑、かく此二句とつくりて侍りしが、鶯を筍藪といひて、老若の余情をいつくしく、とりなして侍るよし、【貞享式】老鶯、この名ハ全く新撰也、あつれども老鶯といふハ、ときにより漢家の詩に出て、或ハ狂鶯とも乱鶯ともいふ、まさに暮春の物なれバ、例に今式の加減より、残鶯ハ勿論にて、老鶯も夏の名となさバ、鶯に老の感情ありて、風雅ハ例のさびしみといへん、此名ハ異議なかるべし

大矢数

や部、矢数の条にみるべし、

躍草

【和漢三才図会】高さ尺バかり、茎微赤色也、葉小葵に似て、両々對生ス、三四月葉のまたに小花をひらく、白色也、微赤きを帯、人の笠を着て躍るに似たり、故に俗人躍花とす、又續断を以て踊草とす、

【五月】

大原志

（廿日）【神社啓蒙】大原神社、丹後国桑田郡に在、祭る神一座、伊弉並尊、【社家記】春秋両度の祭典にハ、遠近の国郡群をなすも、其祭儀饗を事とせず、禮姿糧を以て礼として、謙道を天下に示すものか、【紀事追加】世俗、参詣の地向に山をこえ、をべくサスと云ふよせり、是ハ丹後国大原の社へ詣づるを、昔おほはらざしと云、蚕飼を守護し給ふとて、蚕飼するもの別て

崇敬すと云、三月廿三日ハ春さしとて参詣し、此時、社内の小石を申請て持帰て、飼屋の棚におくときハ、鼠の害なしとて、この石を猫と称す、九月廿三日ハ秋さしといひて、参詣の時、右の石をかへし納むと云○此祭ハ醴を醸して神に供じ、客に饗すと、又店家の商物とする故世俗甘酒祭と云しとぞ、

鬼百合 時珍曰、巻丹、その茎葉山丹に似て稍長大く、紅花黄を帯て、六瓣四に垂上ニ黒斑の点あり、その子先結て、枝葉の間にあるもの、是巻丹也、【多識篇】巻丹、今按ニ於尓由里

六月

大祓 【公事根源】大はらへと云ハ百官こぞって朱雀門にあつまりて、祓をし侍るに、六月十二月二たびなり、天武天皇の御時かちまる、解除ハ觸穢などの時も神事など行ふときハ臨時なると常なるとあまたあり、この大祓ハ百官一同にあつまりて、祓をさるゝ、又下ハ家ゝに輪をこゆることあり、○是六月晦日、朱雀門の前、耳敏川にてあることなり、これハ百官の祓也、節折荒和の祓ハ天子御身の御祓也、いづれも六月十二月両度晦日におこなふ、

大山祭 六月廿八日 江戸及近国の僧俗、相州大山石尊大権現へ参詣す、これを初山と云、又七月盆中に登山するを盆山と云、志願あるものハ大小の木太刀

と携行て、これを納む、その木太刀に必大願成就の四字を書てこれを納太刀と云、

温風 【月令】季夏之月、温風始至【文選】朱夏振炎氣、溽暑扇温風、○朱氏曰、温風ハ温厚の極り、涼風ハ厳凝の始也、○小暑温風至六月節

鴛鴨涼し 水鳥の类をすべて冬多し、故に和哥及び連俳にても冬季とす、されども鴛鴨の类、涼しと云ときハ夏季とす、

慈姑 【和漢三才圖会】その苗を、俗にこれをおもだかと云、其根をくはゐと名づく、単葉の小白花をひらく、○時珍曰、慈姑一名燕尾艸と云、葉ハ燕の尾の如く、前尖りて後に岐あると云、

沖膾

セゴシ膾 【貞享式】此名ハ俗習し、或ハ海辺の別荘、或ハ船遊の時ニ魚のあたらしきと称すれバ、決して極暑の名目にてこれを例の賞玩と云べからず、○青藍曰、沖にて漁りたる魚を直に膾に和して食ふを沖膾と云、○セゴシとハ、鰺などの大きさならぬを骨のまゝ小く切るを、南海にてせごしなますといへるハ是なるべし、

わ

四月

綿抜 更衣ニ布子の綿を抜去て、袷とするをいふ、

和哥祭 十七日○紀刕和哥山にて、東照宮の御祭也、一名雑賀祭と云、

元和七年紀伊頼宣卿の勧請し給ふ所にて、山鉾其外相撲流鏑馬なとあり又城下の士人太刀を佩さゝらを摺て、躍踊となす。これを雑賀踊といふ、今日神事に用の食ものハ蒟蒻を剃刀の如く切りたる一方ハ常の如く味噌を用ひ、一方へハ大豆の粉を付たるを、家ごとこれを製す、

和清天

【白氏文集】四月、天気和、且清、緑槐陰合、沙堤平、又同詩ニ、孟夏清和ノ月、東都同散官。○和清清和いづれにても、

若葉の花

【貞享式】古式に木の若葉ハ夏となし、草の若葉ハ春となし、青葉ハすべて雑となせるなれども、あるを或抄にハ、花と若葉の二所に、若葉に花を結びてハ春とも又夏ともいへる、何故に決せぬにや、今按ずるに、月花ハ風雅ニ一巻の飾なれバ、誇るものハ加減して四季を自由に配るべきなれバ、若葉に花を結びてハ決して夏と定むべし、

若葉

新樹

【和哥題林抄】新樹ハ四方の梢青みわたりて、木々の色もこれ薄きかたにみえ、しげき山李もいとくらくしげりて、月も漏らず、村雨も音ばかりして、露も落る也などよむべし、

若葉の楓

【徒然草】卯月ばかりの若かへでと云、【和名抄】雞冠木（加倍天乃木）弁色立成曰、鶏頭木、（加比留提乃木）今案ニ木の名之、【和訓義解】其葉岐ありて蝦の手に似たる故かへでと略すなり、

わくら葉

病葉と云、夏山に、紅葉の如く赤らみ又ハ黄白色なるも朽るをもいふなり、

綿蒔

【和漢三才図会】相傳ふ往昔蚕綿の外ハ穀木をもつて衣服とす、是を木綿といふ、中古ニ草綿始まること、本朝桓武の朝に即ち類聚国史にいはく、中華ハ来の才中華に先だつこと九二百年ばかりといふ、此その種を下すこと、早晩あり早きものハ八十八夜以後、麦苗の際において蒔きを撒く、晩きものハ四月麦を苅て株の傍と攪てまくもあり、大底枝葉花、黄蜀葵に似たり、（花ハ六月の部にくはしくみゆ）

五月

早瓜供

【延喜内膳式】五月五日、山科の園、早瓜一捧と進る、若実のしるしハ花根と献ず、

若苗

たノ部、田植の条にてよむべし、

若竹

たノ部、今年竹の条にてよむべし、

忘草

萱艸と云くノ部にてみるべし、

和布苅

【和漢三才図会】石蓴海藻、和名迩木米、俗ニ和布の字を用、今云和加米、麁布に對してやはらかなると弱布といふ、【本草】南海に生ず、石に附て生ず、紫苔に似たり、色青し、搗るに今云和布之といふ○海人鎌にて以

つるくさとなる。

六月

綿花

和漢三才図会 四月種を下す、茎弱く蔓の如し、高さ四五尺、葉に三尖あり、楓の葉の如し、秋に入て花を開く、葵の花の如くして小し、紅紫のものあり、実を結ぶ。○此ものゝ種を下すに早晩あり、花も又同じ、夏の末に花開くものあり、大底黄蜀葵に似たり、浅黄色なり。（四月綿まくの条見べし）

月

堅田祭

上巳日 ○或説に祭の日上の巳。祭る神詳ならず。淡海志云、堅田むらは柳田の庄下と云、又聞が濱とも云、此を今堅田と云、出来島にて此の地伊豆の三島の風景に似たる故、伊豆権現を勧請すといへれバ伊豆権現の祭なるべし、今土人もまことをしるものなし、今土人本居神とするは天文六酉年九月廿五日、江州観音山の城より、衣川に勧請せし天神の社是也、四月子の日祭あれども、今上ノ巳日に祭る所も、神田明神は堅田の城主一代江戸にて誕生す故に神田明神を此所に勧請すといふ。

戒壇堂開帳

八日

花摘 ○江州比叡山にあり、帝王編年記 弘仁十三年六月、参議左大弁藤家業、戒壇堂を建つべきよしの宣旨を帯て登山す、傳教喜悦にたへず、聞六月十一日勅ニして創めて戒壇を築、十四年四月十四日、修禅和尚始て受戒を行ふと云々

紀事 四月八日諸人参詣す、女人も常に叡山に登ることをえず、ゆゑに今日許して、東坂本の花摘の社に詣しむ、これを花摘といふ、花堂を作りて小釈迦の銅像を安置す。○此社は、傳教大師の御母堂妙徳婦人を祭るとなり、婦人存生の時、大師御對面の為此処まで登山したまふ、今日女人の参詣をゆるすは、此遺意よりてなり。

賀茂祭

葵祭、御形日、葵桂、諸鬘、

公事根源 中ノ酉日（又酉三アレバ下ノ酉日）

未日、先づ上卿陣に着て、六府をめして警固のよしを仰す、當日、使は近衛の中少将つとむ、昔夢のつげありしより人々葵桂の鬘をかくる、賀茂松尾の社司、前の日まつるべき所々へてまつる、欽明天皇の御宇より、此祭はじまる、下鴨の御祖、上賀茂の別雷二の神祭にて、御祖とは玉依姫と申す、賀茂の建角身命の女なり、ある時、せみの小川のほとりにあそびたまふに、川上より丹塗の矢一すぢながれ下る、玉依姫この矢をとりて我家の屋根にさしはさみおきしに、程なくはらみて男子をうむ、しかれども父とさだむるものあらざれバ、或とき酒をかもして、今の児に盃をとらせ、汝が父なるをとおもへバ、児その盃

てまくと蒔とる、

六月

綿花

【和漢三才図会】四月種を下ス茎弱く蔓の如し、高さゝとの四五尺、葉ニ三尖あり、楓の葉の如し、秋ニ入て花を開く、葵の花の如くしく小し、紅紫のもの有、実を結ぶ○此もの、種を下すに早晩あり、花も又同じ、夏の末に花開くものも有、大底黄蜀葵に似て浅黄色也、（四月綿まくの条見べし）

か

四月

堅田祭

（上巳日）○或説ニ祭の日上の巳、祭る神詳ならず、淡海志ニ云、堅田むかしハ柳田の庄ト云、又関が浜とも云、此を今堅田と云、出来島にてこの地伊豆の三島の風景に似たる故、伊豆権現を勧請すとあれバ伊豆権現の祭なるべし、今土人もかくとしるものなし、今土人本居神とまつるハ天文六酉年九月廿五日、江州観音山の城より、衣川に勧請せし天神の社是也、四月子の日祭あれども、今上ノ巳日に祭る所也、神田明神ハ堅田の城主一代江戸にて誕生ス、故に神田明神を此所に勧請すとかや、

戒壇堂開帳

八日

花摘 ○江州比叡山にあり、【帝王編年記】弘仁十三年六月、参議左大弁藤家業、戒壇堂を建てらるべきよしの帯て登山す、傳教喜悦にたえず、閏六月十一日昧ニ

勅詔を下して、創めて戒壇を築、十四年四月十四日、修禅和尚義真、始て受戒を行ふ、云々【紀事】四月八日諸人参詣ス、女人も常に叡山ニ登ることをえず、しかるに今日許して、東坂本の花摘の社に詣しむ、これを花摘と云、花堂を作りて小釈迦の銅像を安置ス、○此社ハ、傳教大師の御母堂、妙徳婦人を祭るとかや、婦人存生の時、大師御對面の為此処まで登山したまふ、今日女人の参詣をゆるすハ、此遺意よりてなり、

賀茂祭

葵祭、御形日、

葵桂、諸鬘、

【公事根源】（中ノ酉日、又酉三アレバ下ノ酉日）未白、先ヅ上卿陣に着て、六府をめして警固のよしを仰す、当日、使ハ近衛の中少将つとむ、昔葵のつげありしより、人々葵桂の鬘をかくるも、賀茂松尾の社司、前の日しるべき所ゝへたてまつる、欽明天皇の御宇より、此祭ハはじまる、下鴨の御祖、上賀茂の別雷二の神祭也、その御祖とハ玉依姫と申す、賀茂の建角身命の女也、ある時せみの小川のほとりにあそびたまふに、川上より丹塗の矢一すぢながれ下る、玉依姫この矢をとりて、我家の屋根にさしはさむ、それよりして程なくはらみて、男子をうむ、しかれども父と申すものしれざりき、或とき酒をかもして、今の児に盃をとらせて、汝が父にさゝせよとありしかバ、児、その盃

とバ虚空にあげられ、家の屋根をふきやぶりて、我ハ天神の御子なりといひて、天上へとゞろしくぞのぼりける、則別雷の命是也、いまの丹塗の矢ハ、松尾明神と後にあらはれ給ふとかや、【紀事】上賀茂中酉ノ日、葵祭、貴船もまた修之、酉の前午ノ日、西賀茂黄衣のをとこの、榊を伐り、松に並ぶ、御生所の假宮、并斎宮の幄の屋、及び大宮假宮を構ふ、黄衣五十人ばかり結番とあり、未ノ日假宮迁宮、申ノ日古へハ関白詣あり、當日音楽あり、翌日社司葵鬘并桂枝を、禁裡仙洞及び高貴の家に献ず、則御簾に懸く、賀茂地人悉く門戸に掛く、志るしくさハ夏天霹靂の災避、祭の日、官家の人おのく葵桂を衣領にかくるの、賀茂の地ハ各これを頭髪に挿む、今日葵鬘桂枝、これを諸鬘と称ス、葵ハ静原より取来り、桂ハ松尾より伐来る、凡葵ハ當社の神艸なり、桂ハ日吉神木也と云 匸御生とハ、王依姫の別雷命を産み日と云、併し、実ハ申ノ日生れ玉ひ、酉ノ日ハ神の生れましを祝奉る儀也とも云、御形祭御影祭と、同祭也と云人あり、別の祭也、御影祭ハ三日以前、午ノ日にあり、御影社ハ、洛北高野川の東、御蔭山に社あり、即ち下鴨の末社也、【康富記】嘉吉三年四月廿一日丙午、鴨御蔭山祭也と云、して是酉ノ日にあらず、午の日也、別祭とあるべし、【河海抄】賀茂祭の前日垂跡の石上に於て神事を、御形と号ス、今本宮の北一町ばかりに在て御旅所也、道の西に岡あり、是を御生所の館と云、祭の日仮殿をこの所に建つ

神祭

忌さす、榊取、
榊さす

是加茂祭と云也、○或説に云、おし出して祭とばかり云ハ加茂祭のこと也、加茂によりて無名の祭と夏とす、故に祭に加茂連哥に付句に嫌あり【貞享式】さることや四季にわたるものハ祭と鷹の類なれどもハつまでハ其季の名目とすべし、四季の差別とあせりなりさまで、祭の一字にても御祭といへバ秋なり、御祭といへバ冬にあたれども、諸社の臨時の如き名目あることまぎらはしきやうもなりなん、おかれかし、祭の用ゆるや、貴賤ゆかりなり、寒暑なるなり、礼なつかしく、和に遊び、節供節日の式なりとも、俳諧にハ多用なきハ、是らハ一世の衆議に及ばず、其時其句の季に定めて、決して四季に用ひず、中略、祭といひ鷹と云類ハ一句にまかせてすることゝハ夏と冬との名目なく、今式ともに其通りなり、○忌さす【萩枝折】卯月の忌さすとハ、賀茂の神事なるに、いみ竹さしこめて、春の帰るを免るゝ心にあらず、神事にこもる人身をきよめ、松竹などにしめなはりて、門をとぢてこもりゐるなるべし、○榊取【後拾遺】榊とる卯

月ゐるまニハ神山のあふちの葉がくれをとつれもなし、（神山ハ賀茂の神山をいふなり）

貞好草 芍薬の一名之〔和漢三才図会〕花の容婥約なる故ニ、和俗貞好草と名づく、

垣見草 卯花の異名、〔蔵玉〕時鳥をとふ〳〵なるしかをとくさき花咲ニみる山里の宿、

要の花 〔和漢三才図会〕扇骨木、高サ二三丈、葉ハ海石榴の葉ニ似て狭く小く、細なる鋸歯あり、面滑らかニして、四月小白花を開く、細子を結び房をなす、八九月赤く熟す、其木最も堅く扇骨とするニ堪ゆる故ニ名づく、

柳の花 注、秋の加部なくして、〔猿蓑集〕洗濯や衣ニもミ込 柳の花　凢兆

杜若 かほよ花　かほ花〔和漢三才図会〕燕子花、其葉白菖ニ似てく大く、色淡く、其花実ともニ白菖ニ似て肥大なり、紫色を正とす、近ごろ浅紅なるとの白色なるものを出す、ミな変種也、五月を盛とす、又四時ニ花を開くもあり、参河八ッ橋の産名を得たり、○かほよ花〔蔵玉〕あつくさの多き中ニもかきつばた花わ袖すそを紫なる、○貞花〔仙覚万葉抄〕かほ花ハ杜若之、貞鳥が啼とき咲バ貞花と云、万葉ニ貞花とよめるハ、何ならむとくわしく定めがたけれど、姑く仙覚の説ニまかせて、載之○かきつばたニ杜若の字を用ゆれども実ハ誤也、杜若ハヤブミヤウガ也、燕子花と書べし、又和名抄ニハ劇草とかきつばたと訓ず、

風車の花 〔花彙〕纏枝牡丹　蔓艸葉茎鉄線の類也、花ハ瓣みじかく単葉蒼碧色、其形風車ニ似たり、又白色あるも、三四月花をひらく、

かんこ鳥 〔和漢三才図会〕加豆古宇鳥、正字未詳、疑らくハ是郭公なるべし、状ハ杜鵑及び虫食鳥ニ似て、微赤色を帯び、腹白くして黒斑あるものハ、脚の指も亦二ツ前二ツ後也、偽て杜鵑となして賣之、仲夏の後声あり、秋後声をとゞむ、其声大ニして円亮、加豆古宇と云がごとし、毎ニ山林ニありて、人家ニ近づかず、○真淵翁ハ俗ニ云かんこ鳥ハ、喚子鳥の字音を唱へ誤まるものならんといはれたり、

蠶蛹 〔月令〕孟夏月、蠶事畢、后妃献繭、〔和漢三才図会〕繭を作らんとする時、蔟簾を用て棚とす、てまきに放つニ、葉を食ずして、身白色ニ透明なるものを擇取て、樍の中ニ投ず、先ヅ稍あるひハ枯菁草を用て、縦ざまニ内て、蚕の寓居とし、数千の蚕おの〳〵まゆを作て蟄る也、○原蚕〔周礼註〕云、原ハ再也、○一名晩蚕、二番蚕也、春部あはせ見るべし、

○蚕簿、え、部ニ注せり、

蟳子

［蘊須函径］蟹類ニ、今人以て食品とす、佳味なりき、［和漢三才図会］擁劔蟹ハ江海ニ生ズ、大なるもの味美し、塩水を以て煮熟する時ハ純赤色ニ変ズ、甲を脱して白肉を取り食ふ、其黄なるもの最甘美也、山州和州渓澗ニ有之、十月丑日毎ニ必群出ス、土人其日を候ひ多く捕ふ、亦一異也、［大和本草］蝦蛑、嶺表録云、前両脚大ニして、人の指の如し、長尺余、上ニ芒刺あり鋸くして手と砍觸べらす、［和名抄］擁劔、和名加散米、［多識篇］蝤蛑、加佐美

［兼三夏物］

翡翠

時珍曰、大さ燕の如く、喙尖りて長し、足紅ニして短し、背の色翠色、碧を帯ぶ、翅も黒色、青を揚らり、女人の首物を飾るべし、［和漢三才図会］鴗、俗云（川世比）形小く、池川ニ在て魚を捕る、翡翠、俗云（山世比）形大く山渓ニ在て魚を捕、世比とハ、蚊微の假名相通ずるなり、其穴ニ巣つくるや、横ニ入こと一尺ばかり、其中ニ雛十六、［庖厨本艸］鴗、和名曽比、○此鳥魚を害する故ニ、魚天狗、水狗、魚虎、魚師、おの名あるべし、

蟹鯷

［多識篇］蝑蟹、加仁比志ま、［和漢三才図会］蝑ハ塩蔵のものなり、［三代実録］元慶三年正月三日癸酉、摂津国蟹胥、陸奥国鹿腊以て贄として御膳ニ奉ることをやめしむ、

蚊

蚊柱

［事文類聚後集］秦ニハ之を蜹といひ、楚ニハ之を蚊といふ、或云、蚊ハ文也、人の肌膚ニ文あるの義也、○時珍曰、木の葉及び爛灰の中ニ生じ、子を水中ニ産て孑孑虫となる、仍て変じて蚊となる、［五元集］

蚊柱ニ夢の浮橋かゝるなり　其角

蚊遣火

又蚊火といふ、［月令廣義］蚊　鼈の骨と煙ニ焼けバ蚊たちまち死す、次ニ鰻鱺の骨、次ニ水中諸魚の骨を煙ニ焼けバ蚊を祛ぐべし、又浮萍、羌活と同く焼く、○抑も追はらふと遣といふ、鬼やらひも同じ、やらひやらふなどいふ、事やるを活用したる詞也、されバ蚊やらふともいふべし、

蝸牛

［紀事］此月より五月ニ至て、霖雨あるときハ、蝸牛多く出て、或ハ床ニ登りて、又壁ニ黏く、高く登るときハ其涎随て盡れバ随て落ツ、其貝ニありて、人を見るときハ、蝸縮ス、児童聚りて出出虫ことゝ云、出ざるときハ釜を打破らむといふ、此虫の貝を俗ニ釜と称ス、［夫木］

牛の子ニふまるゝな庭べの蝸牛角あれバとて身をなたのみそ　寂蓮

［五元集］

文七ニふまるゝ庭のかたつぶり　其角

○文七ハ髻結師なるか、

○蚕簿、え部ニ注せり、

蟳子

【蘓頌図経】蟹類ニ今人以て食品とす、佳味也、【和漢三才図会】擁劔蟹ハ江海ニ生ズ、大なるもの味美也、塩水を以て煮熟する時ハ純赤色に変ズ、甲を脱して白肉を取り食ふ、其黄なるもの最甘美也、山州和州渓澗に有之、十月丑日毎ニ必群出ズ、土人其日を候ひ多く捕ふ、亦一異也、【大和本草】蝦蛄【山嶺表録】云、前ノ両脚大にして、人の指の如し、長尺余、上ニ芒刺あり銛くして手を砍、觸べからず、【和名抄】擁劔、和名加散米【多識篇】蝤蛑、加佐美

兼三夏物

翡翠

時珍曰、大さ燕の如く、喙尖りて長し、足紅にして短し、背の色翠色碧を帯ぶ、翅も黒色青を揚り、女人の首物と飾るべし、【和漢三才図会】鴗、俗云川世比、形小く、池川に在て魚を捕る、翡翠、俗云山世比、形大く、山渓に在て魚を捕、世比とハ、蚊微の假名相通ずるゆへ、其穴に巣つくるや、横ニ入こと一尺ばかり、其中ニ雛生ス、【庖厨本艸】鴗、和名曽比、〇此鳥、魚を害する故ニ、鴗天狗、水狗、魚虎、魚師、抔名あるべし、

蟹鯷

【多識篇】蝑蟹、加仁比志ほ【和漢三才図会】蝑ハ塩蔵のもの也、【三代実録】元慶三年正月二日癸酉、摂津国蟹胥、陸奥国鹿脯以て贄として御膳ニ奉ることをやめしむ、

蚊

蚊柱【事文類聚】【後集】秦ニハ之を蚋といひ、楚ニハ之を蚊と云、或云、蚊ハ文也、人の肌膚ニ文するの義也、〇時珍曰、木の葉及び爛灰の中ニ生じ、子を水中ニ産ミ、孑孑虫となる、仍て変じて蚊となる、【五元集】蚊柱に夢の浮橋かゝる也　其角

蚊遣火

又蚊火とも云、【月令広義】蚊、鼈の骨を烟に焼けバ蚊たちまち死す、次に鰻鱺の骨、次ニ水中諸魚の骨を烟に焼けバ蚊を祛くべし、又浮萍羌活と同く焼く、〇物を追ふを遣と云、鬼やらひも同じ、やらひやらふなど云、又やると活用しける詞也、されバ蚊やらふともいふべし、

蝸牛

【紀事】五月より五月ニ至て霖雨あるとき、蝸牛多く出て、或ハ床に登りて、又壁に黏く、高く登るときハ其涎随て盡れバ随て落り、其貝にありて人を見るときハ蝸縮ス、児童聚りて出出虫、出ざるときハ釜を打破らむとよふ、此虫の貝を俗ニ釜と称ス、【夫木】牛の子にふまるゝな庭のかたつぶり角あるとて身をなたのみそ　寂蓮【五元集】文七にふまるな庭のかたつぶり　其角、〇文七ハ髻結師なる、

蝙蝠 時珍曰、蝙蝠ハ齊人呼て仙鼠とす。形チ鼠ニ似て、灰黒色、薄き肉翅あり、四足及び尾ニ連合ス。一ッのごとし。夏出て冬蟄ス。日ニ伏し夜ニ飛て、蚊蚋をくらひ自生育ス。〇又紙扇とかハぶりといふ、

蚊帳 又蚊や 幬とも [説文] 幬ハ單帳也

荊葱 [本朝食鑑] 冬葱春葱の二種あり、春葱ハ初生のとき針の如し、俗ニあさつきといふ。羮とせず生にて食ふべし、酢味噌ニ和するときハいつかくよし、

五月

賀茂の足揃 朔日 [紀事] 五月朔日旧例ニ依て京兆尹、馬一疋を出さる、其外武家、願ひある人も亦假て之をのらしむ。其騎者上賀茂の氏人若きものの廿人を擇びて、各禄をのふ。又端午小騎といふものの、壮年廿人をえらびて、各禄をのふ。凡馬貟廿疋、騎者ハ烏帽子浄衣を着す。社司各埒の外ニ坐ス。先一人毎ニ馬ニのり、馳騁してその遅速を考ふ。執筆是をしるさしむ。後馬の遅速同しからざれバ則二人をして更ニ乗らしむる。故ニ足揃といふ。いはゆる荒手結也。馬場ニ本来樹あり。その内ニ於て勝負を決せしむ。撿見のもの鐘を撃て、執筆これを記る。この樹を勝負の木といふ。馬場の本、勝負の木の南ニ櫻あり、是と出馬の木といふ。又其次ニ一株あり、是を三鞭木と称す。騎人これニ於て互ニ声を揚げ鞭を挙ぐ。見物の良賤群集して、埒の外ニ並居る、

艾虎、艾人 蒲人 天師を畫 [荊楚歳時記] 艾虎ハ、艾を以て虎の形とつて、或ハ綵を剪て小虎とす。以て艾の葉ニ帖て、内人爭て是を相戴く。〇[同上]五月五日人みな百草を蹋て、艾を採り、人を作て戸上に懸て以て毒気を禳ふ。〇蒲人[金門記]午日菖蒲を刻て人或ハ葫蘆諸物をつくり、笄ニ戴て以て邪を辟く、〇画天師[歳時雜記]端午ニ都人、天師を画て以て賣る。又泥望天師を作る。艾を以て鬚とし、蒜を以て拳とし、門上ニ置て邪を辟く、

飾冑 幟 [和漢三才圖會] 五月五日、家毎ニ幟及び甲冑ホの兵器を立、俗ニ呼て冑人形といふ。其刀菖蒲を以て是を飾る。仍て菖蒲刀と号ること、荊楚歳時記ニいふ艾をとり人をつくり、門上にかけて毒気を禳ふと、是冑人形と趣相似たり。相傳ふ、光仁天皇天應元年、蒙古の賊来る。早良親王をしてこれを討しむ。親王、藤杜の社ニ禱て出陣しのふ時ニ五月五日、忽ち神風吹て、敵船を覆し、立どころニ皆敗走ス。戦ひ了して勝をえて、此因縁を以て今ニ至て

蝙蝠

時珍曰、蝙蝠、齊人呼て仙鼠とす、形ハ鼠に似て、灰黒色、薄き肉翅ありて、四足及び尾に連合す一ッのごとし、夏出て冬蟄す、日に伏し夜に飛て、蚊蚋をくらひ自生育す、○又紙扇とかはほりといふ、

蚊帳

又蚊幬と云 説文 幬ハ單帳也

荊葱

本朝食鑑 冬葱春葱の二種あり、春葱ハ初生をとりて針の如し、俗にあさつきとも云、美ならず生にて食ふべし、酢味噌に和するときハいとよし、

五月

賀茂の足揃

紀事 五月朔日旧例に依て、京兆尹、馬一疋を出さる、其騎者ハ其外武家、願ひある人も亦假てこれをのらしむ、其騎者上賀茂の氏人歩きことの廿人を撰びて、各禄をあたふ、又端午小騎といふもの、壮年廿人をえらびて、各禄をあたふ、凡馬數廿疋、騎者ハ烏帽子浄衣を着す、社司各埒の外に坐す、先一人毎に馬にのり、馳騁てその遅速を考ふ、執筆をして是をしるさしむ、後馬の遅速同じけれバ則二人をして乗らしむる故に足揃といふ、いはゆる荒手結、馬場に本来樹あり、この内に於て勝負を決せしむ、検見のその鐘を撃て、執筆これを記す、この樹を勝負の木といふ、馬場の本、勝負の木の南に櫻あり、これを出馬の木と云、又其次に一株あり、是を三鞭木と称す、騎人こゝに於て互に声を揚げ鞭を挙ぐ、見物の良賤群集して、埒の外に並居る、

艾虎 艾人

蒲人

天師を畫

荊楚歳時記 艾虎ハ、艾を以て虎の形をつくりて、或ハ綵を剪て小虎とす、以て艾の葉に帖て、内人争て是を相戴く、○同上 五月五日、人みな百草を蹋て、艾を採り、人を作て、戸上に懸て以て毒気を攘ふ、○蒲人 金門記 午日菖蒲を刻て人或ハ葫蘆諸物をつくり、笄に戴く、以て邪を辟く、○画天師 歳時雑記 端午に都人、天師を画て以て賣る、又泥望天師を作る、艾を以て髭鬚とし、蒜を以て拳とし、門上に置て邪を辟く、

飾冑

幟

和漢三才圖会 五月五日、家毎に幟及び甲冑木の兵器を立、俗呼て冑人形と云、其刀菖蒲を以て是を飾る、仍て菖蒲刀と号して、荊楚歳時記に艾をとりて人をつくり、門上にかけて毒気を攘ふと、是冑人形と趣相似たり、相傳ふ、光仁天皇天應元年蒙古の賊来る、早良親王をして是を討しむ、親王藤杜の社に祷て出陣しのふ時に五月五日、忽ち神風吹て敵船を覆し、立どころに皆敗走す、戦ずして勝をうる、此因縁を以て今に至て

五月五日の祭ニハ兵器を用ひ、民家も又ちかり、藤森社ハ山州紀伊郡ニ舎人親王の祠ありて、弓矢政所と称ス、是ぞ蓋其ころ蒙古の襲来ありしを、国史ニ見えざれバ、○藤森社祭の条見合すべし、

擲餅

【歳事拾遺】五月五日、米の粉とき練てまるめ、中ニ餡を入て、合すること編笠の形の如し、擲の葉を以てつゝミ、蒸してこれを擲餅とス、畿内ニハさのミ用ひぬなり、あり、

賀茂競馬

五日【詞林采葉】或記云、祭礼の日ニ馬ニ乗るハ志貴島の宮、欽明天皇の御宇、天下世挙りて風吹雨零時ニ卜部伊吉若日子命ニ勅して卜ハしむ、乃チ卜ひて奏すらく、賀茂の神の祟なりと、仍て四月吉日をえらび、馬ニ鈴をつけ、人猪影を蒙りて駈馳て以て祭祀をなし、能禱祀せしむ、因て五穀成就天下豊年也、乗馬ここニ始まる、【注進略記】五月五日の競馬ハ七十二代堀川院寛治七年、五穀成就天下泰平のため、はじめて十番廿疋の馬料を寄らる、例年是を行しめ給、【紀事】この日、音楽あり、午の時競馬あり、近衛院康治年中始て行なる、志らざれバ其始ハ臨時の執行也、後世五月五日式日となりしにや、古へ諸社毎ニ多く競馬あり、今漸く絶て存する処のその稀也、当社競馬の料ある故ニ、今ニ至て断絶せず、今日乗る処の兵人廿人、各冠の纓を巻き、緌を付け、左の方ハ赤袍を着し、右の方ハ黒袍を着ス、各南の一の鳥居の外ニ於て馬ニ乗り、馬場の末より馬場本ニ至て、先ッ左右一番をえらひ左右一疋毎ニ馳す、是を空走といふ、その後各ならべ馳て、遅速を争ひ勝負を決す、古へいはゆる真手結あり、【文昌雅録】軍中、端午を以て馬を走すことを踏掬といふ、

帷子

【和漢三才図会】通俗、夏月必用の衣ハ帷子と名づく、端午よりこれを着るニ、浅黄色を用ふ、七夕八朔ニハ白帷子を用ふ、近代士庶人の通例也、按、和名抄、帷和名加太比良、

鹿子百合

【花律】白花紫点あり、其花横ニ向て開く、紫点あるゆゑに、鹿子百合と名づく、

河原撫子、唐撫子

な部、瞿麦の条ニ注す、

萍蓬

【大和本草】葉ハ芋ニ似て厚く光あり、茎つよく水上ニうちのびたる、葉も花も水面よりうく、根大也、夏月黄花をひらき、秋の末迄ニ一茎一花をひらく、賞するに堪たり、

酢漿草花

【蘊頌畧経】酸漿草、嫩き時小児喜て食之、○時珍曰、一名

酸母此三葉酸く其味ハ醋のごとし苗高さ一二寸叢生して地に布く極く繁衍やすし一枝三葉両片晩に至りて自ら合帖ること一の如し四月小黄花をひらき小角を結ぶ長サ二三分内ニ細子あり冬も亦凋まず、

蚊幬釣草

［和漢三才図会］葉穂ともに續莎草に異なることなし但し根細き鬚のごとくなる子なし引バ抜やすし其茎三稜なり小児中間より裂て引擴げ以て蚊帳を釣に比して戯とす蓋これ香附子艸の雄なり、

輕鳧の子、鴨の子

［本朝食鑑］車鴨、輕鴨、芦鴨、この三ツハ四五月に至りてもなほさらず或ハ秋去り冬来ルもあり或ハ夏秋さらずして巣をなすもありといへども野水田溝に栖て或ハ孕ミ或ハ孕ざるもあり○凢鴨の子初生其毛黄白色卵を出でて水上に浮ぶ［藻塩草］かるの子ハ鴨のかひごをいふ［御全］古哥にかるのこともかりの子ともよめるハ雁なるハあらず鴨の子のことなり

鹿の子

［紀事］毎年五月の時節南都春日山に麑鹿の子漸く成長す、よわきものハ力足らず鹿子市にある若狂犬ある時ハ噛てやゝともすれバ死に至る、この故にこの節、與福寺の下僧又町奉行の小吏相随ひ市中を徑廻り若頭犬あれバすみやかにとらへてその脚の筋を断て其犬をして横行せしめず、

六月

掛鯛おろす

朔日○春部の掛鯛の条に注ス

嘉定喰、嘉定銭、かつう、○十六日

［世諺問答］六月十六日嘉祥ハ仁明天皇二年六月十六日豊後国より白亀を献ズ以て吉兆として祝之是よりこのかた嘉祥の儀あり、このこと更に本説なし只彼銭の銘に嘉定通宝とありけれバ勝といふ名詮を貴翫するなりし○［長明四季物語］仁明帝嘉祥のころ御代の栄ることを祈らせ給ひ賀茂の上の社に奉て禊をせしめ給ひて六月十日より六日あまり吉日とて御占の人に考申上なさしめ其日行せ給ひ年号を嘉祥と改元ありけると社司の日記に見えたり○一説に嘉定喰といふことハ室町殿の大樹のとき六月納涼の遊びに揚弓を射て賭として負たるかたより嘉定通宝の銭十六銅を出して何にても喰物を買ひ勝たるものにとらせしとぞ、故に嘉定食と号せるよし此銭ハ宋の寧宗の年号にて十七年あり其年毎に鋳させる銭元年より十六年迄の印あるを撰て其

日のミて形しきの代ゟ定まりき、御湯殿記ニ女房詞ふうくかつうとかつうしまゐらする、かつうとまハ、嘉定通宝を中略してのこと也り、紀事今日公家武家同じく嘉定の祝義あり、所謂嘉定通宝十六枚を以て食物をかひてまゐると服されバ其家ニ福ありとて故ニ今ニ至りて其例ふあらふ又嘉通と、勝の和語相近し故ニ武家吉兆銭とす、此日五色の饅頭并ニ諸品と土器二枚ふ盛り、各白紙を以て裹之水引を以て結之群臣ふたまふの儀あり、是十六銭を以て求得るの遺意也諸家まで又此儀あり、或ハ孔方兄十六枚或ハ米一升六合、家臣ふあたへてを以て雑品諸物とかへてまゐると献ズ又土器ふ杉の葉をしきき其上ニ大饅頭三ツを盛り、杉原紙を以て是を包み凡物毎ニ十六の数を用ふ今夜諸家の中、十六歳の人、振袖を切て詰袖とし是を月見といふ、その故ハ土器ふもる処の大饅頭の真中ニ穴をうがち、其穴よりして月光をみる、是今宵袖をとむるの式也、

上難波御祓

摂州東生郡大坂高津の宮ニ在、此社ハ生玉の北ふあり、祭神比賣古曽の神、本名ハ下照姫命（大国主命女 天雅彦命妻）始て天の磐船ふのりて此地ふ降りたまふ、（高津地之）其船祠を、磐船大明神と号す、

仁徳帝、都とし給ふ近し、高津宮と号しの、當社神傳紛失ス、當社を仁徳天皇の宮とするハ非也、社司水津川ふ出て禊を修す、

賀茂六月能

晦日 紀事六月晦日の夜上賀茂の神事、音楽あり、祓を修ス、地下各茅の輪を脱出ス、又枯麻の條を以て、木偶人と作り是を川水ニ撤ス、今日六月の能、丹波矢田太夫是をつとむ、これを御手代会といふ、社司真乘瓜十ヶ酒錫一双、楽屋ニおくる、とき、始る是旧例也、この能一座役者七人かかるく其藝をつくむ故ニ世ニ七人猿楽といふ、神事次第六月廿九日小川廿八日御手代会、悪日仮幄を儲、夜遊神前におゐて乱舞、中古ゟ猿楽を田楽の風流あり、○今宵名越の神事をなりてい社司神人おのおのこれを祓除し、菅貫の輪に入るといふこと

唐崎祭

晦日 浪海志唐崎大明神ハ女別當（山王大宮初）願の地也、紀事相傳ふ、此神日吉の末社ふあらく、社家樹下生源寺の祖神也、一説ニ、是住吉明神ふりさて天智天皇の御宇六月祓を修せし処也、今日参詣、平日の千度ニあまさる、故ふ千日参と称す、祈願ある人ハ、木を以て小鳥居を作り、社えふ供ず、

形代

撫物

〔釈日本紀〕人形ハ所謂素盞烏尊の濫觴、手足の爪を抜其罪を贖ふ身の代の義也、〔神祇式〕大祓御贖物鐵人形二枚云〻、○形代ハ人形に撫物と云ハ人形を撫て吾身にそへて、かの所の災殃を移して流すもとの贖物ハ罪を贖ふものなるか、則人形のことし、

川社　本部、夏神楽の条ニ出、

雷鳴陣　〔西宮抄〕六月雷鳴陣、大声三度以上大将以下帯弓箭候御前、孫庇額間左右兵衛立南庭敷雷鳴御座、鳴盛時分陣遣右殿外衛督佐候殿上者帯弓箭薫中候解陣、

風薫　〔唐太宗詩〕薫風自南来、殿閣生微涼、〔呂氏春秋〕東南之風曰薫風、

掛香　薫衣香　〔礼記内則〕衿纓皆佩容臭、註、容臭ハ香物也、形容の飾を助為故ニ容臭と云、纓を以てこれを佩ぶ、後世の香嚢即ち其遺制也、〔源氏梅枝〕くのえかうのかうすぐれてなまめかしと云、又百歩香と云方もあるよし、〔花鳥余情〕百歩の方と云ハ凡香気の遠く聞ゆるをもて百歩と云べし、○薫衣香一名黒方、されど薫衣香もたきものゝ方より出さるもあるべし、俗に匂ひ袋と云其方数種あり、〔紀事〕五月禁裡より匂袋を諸家にたまふ、是夏日汗穢の臭気を除んが為也、〔雍州府志〕懸香ハ香剤各等抹して調合、各軽重多少の謂あり、これを滚合して絹袋中に盛り、袋の両角に緒を着て衣の領に繋、

川狩　〔紀事〕此月、賀茂川、高野川、八瀬川、嵯峨大井川、梅津、桂川、吉祥院村、鳥羽、淀川、宇治川、所々にて良賤川狩をなし、捍網或ハ扇網を以て執之、或ハ簗を設けて夜に入て炬を燃し、魚を驚して執之、是を夜振と云、或ハ鵜を放て執之、是を鵜川と云ふ、これも川狩なりと云〻、

射干　時珍曰、射干其葉叢生し、横に鋪くこと一面、鳥の翅及び扇の形の如し、鳥扇、烏翣等の名あり、〔尓雅翼〕射干春生ず、苗の高さ二三尺、葉蛮姜に似て狭く長し、横に張ること翅羽の形のごとし、葉中茎を抽て萱艸に似て強く硬し、六月花をひらく、黄紅色、瓣上に細文あり、秋実を結び房をなす、中子黒色也、根鬚多し、

干瓢剥　新干瓢　〔和漢三才図会〕乾瓢土用の中に実をとる、横に切つぎ、皮および瓤を去り、白肉を用て薄く剥、連ぬること一二丈、紙紐のごとし、架にかけて晒乾す、もし雨に逢ふときハ色を変じて佳ならず、

眼皮

同上 眼皮と剪羅と一類異種也、春苗を生ズ、ぶぶうる茎、青緑の葉、剪羅より厚くして、円かるべく末尖る、六七月花をひらく、剪羅花に似たり、刻歯浅く、其色肉赤色、俗説云、達磨大師九年面壁の時、眠らざらんことを欲し、自ら上下の瞼を剪りてすてしを、葬し地より此草を生ず、其花肉赤色也、以為らく瞼に似たりとす、因て眼皮と名く、

楮花 **紙漉草**

時珍曰、楮、もと柠に作る、其皮績ぎて紵とすべきの故也と云、按に許慎説文曰、楮穀ハ乃ち一種也、たゞ雌雄と弁ずるのミ、雄ハ皮斑ありて葉に椏あらし、三月花をひらく、柳花のごとし、実を結ばず、雌ハ皮白くして葉椏又あり、碎花をひらく、実を結ぶ、揚梅のごとし、南人皮を剥ぎ搗き煮て紙を作る、又緝練して布とす、堅くして朽ちずといへり、和漢三才図会 楮皮今多く紙に造る、布と織る、木綿と称することも云、〇楮ハ、時珍が説の如く、三月花あり、六月の説あるによりて、故ニ雑談抄ニ花とのミ出して楮とバかゝず、季とせずといへども、紙ハ常に漉く季としがたく、殊に夏漉ハ紙臭気ありて下品也、楮も種類あり、大和本艸に、山楮也、一名ガンヒ、又山カゴともいふ、其木も皮も櫻に似たり、葉ハそれぞれに似て小也、四月に葉を生じ、枝長さ高数尺に過ず、深山中ニ在

花ハむぐらの花に似て黄也、夏の末に咲く、その皮を剥て楮の如くに煮て紙を漉くと云々、以之夏とするか、

蒲の穂

和漢三才図会 香蒲の花の状、頗る餅に似たり、故に蒲鉾と云、又蝋燭に似たり、是香蒲の穂なり、

苧

和名抄 苧、和名加良無之、〇お部麻の条ニ委し

韓瓜

甜瓜に似て大きく、皮にまやうあらずして味劣る、通俗志に熟瓜と訓ず、

よ **四月**

浴仏

ふ部、仏生会の条ニ出ヅ、

吉田祭 中ノ子

廿一社註式 或人曰、六十六代一條院永延元年十一月廿五日中ノ申、今年始て祭礼、誓願ありて公家の御沙汰となる、江次第 四月中ノ子、十一月中ノ申、裏書云、吉田祭永延元年始之、山蔭中納言一家これを祭るべきとし、〇吉田乃春日ハ、中納言山蔭卿の建立也、祭日、幣帛使内侍の使に立つ、倭舞あるとぞ、江次第ニ委し、

餘花

題林抄 余花ハ、春おくれて独咲ることをいふ、山深ミさまでも、夏の来ることもちりのこりおくれさき、青葉の中に咲るをめづらし

よろひ草

牡丹の一名也、名義未詳、

夜白

夜白艸の畧言にや、

草 〔開元遺事〕明皇沈香亭の前の牡丹一枝二头、朝ハ深碧、暮ハ深黄、夜ハ粉白なり、香艶各異なり。帝曰、これ花木の妖なりと。楊国忠おのれ百宝を以て欄をつくり、○天津入今やぶりて詠むらんよそのいろある花さうるも、閑院左大臣

芦原雀、葭剖 き部、ぎやうぎやうし の条にてみるべし、

〔五月〕**蓬葺**

〔歳時記〕端午に菖艾を刻み、小人子或ハ葫蘆のかたちとつくりてこれを帯ぶれバ邪を辟く。〔荊楚歳時記〕五月五日雞いまだ鳴ざる時、艾の人の形に似たるものを采て攬てこれを取収く、病に灸すれバ甚験あり。○是らの説より屋檐にさするを葺なるべし、

〔六月〕**吉野の蛙飛** 九日

當山の蓮花会ハ、吉野郡の内、蓮池と云処より毎年蓮花を蔵王権現へ奉る也。その花を管に植て轅をとりつけ、九日の早旦に神輿と帰ぐして、山中を持あるく。つゞきて在家のその子供ハ母衣を負る物を渡す。夜に入て當山の僧徒蔵王堂の前にて行法あり、其刻下づりのそのに蛙の形を作らせ、堂の後に入おく。その形再ニ蝦蟇のごとし、行法をとりてかの僧四人捨扇にて先の蛙をまねけバ、堂後より飛出て、四人の僧の膝をとゝめぐり飛ぶ。是を強く祈て責るに、次第にせめられて、堂内と逃まどふ。終に祈り殺す。其後戸板にのせて堂外へ舁出し、湯水をかくれバ蘇生すと云、

節折 晦日 〔公事根源〕卜部竹の節を庭中席の上におく。節折の余婦、竹をとりて参りて、御たけよりえらめて、次この寸法をとう、果く官主まゐりてすがをせて、御祓をつとむるにあらたく、わざをくへとて二度まで、二度まてつ禄をのまふことまに主上の御たけの寸法をとりて、其程にをりあてがふべきよきとう、節折の節ハ竹のよしにて、和名抄両節間（俗云、よせ）○是即ち荒和拔の御贖物なり、

た

〔四月〕**多賀祭** 二ノ午

〔社説〕江州犬上郡、多賀の大社ハ伊弉諾尊、本地ハ無量寿仏、鎮座年歴詳ならず、例祭四月二ノ午日、祭祀當日、神輿本宮より艮の方一里ばかりに栗栖村の大官所（御旅所）へ渡御、供奉行装鉾十二本、神馬三疋、祢宜四人、神子二人、随身六人、神主三人馬上、其外氏子村々より種々の造花を出す、凡六十本ばかり、遂物ハ年々思々趣向をこらして定らず、神輿三基渡御、坤の方、寳基堂の社まで、大社の御使と

て殿一人健児一人参向行列先途拂十二人ありこれ六人黄の直垂三十人調度懸六人神事の警固ハ彦根の城主より、物頭二人これを出さるゝ　雑談抄　此ところの頭人を定るハ正月三日よりて、氏子の中豪富のものを撰て、夜に入て神慮をうかゞひて定む、其頭にあたる家ニ神官榊を立る、其頭人神供米幾許ことを捧ぐ、祭の日四位ニ准じて、衣冠を着し社参へ参詣、一族一門風流を尽してこれをもちふ、

當麻祭（俗ニ冬祭とも云）上ノ申○大和国葛下郡當麻都比古社二座、麿子王子命、比賣命、

龍田祭　ひ部　廣瀬

公事根源　大和国ニ侍る社也、年日使あり、祭の条ニみるべし、

鷹の塒入

和漢三才圖会　四月羽毛を易んとするときハ韋緡を解去て、鳥屋の内ニ放つ、餌食意ニ任す日を逐て脱落て、又新毛を生じて、七月中旬舊のごとし○片鳥屋（初年）両片鴘（三歳）

鷹鳥百首抄　四月八日鷹を鳥屋へ入て、毛をかへさするなりと此時羽虫の茶を飼て、さて又餌をも飼ふ、是をとまれ飼と云、或ハ鳥屋踏、鳥屋ごもり、鳥屋鷹、毛をかる鷹、などゝ云、夏ハ又ひむろ山、とやの板など、皆此時のうちなり、夏なるべし　同三百首抄　鳥屋へ入るとて、動気の茶と羽虫の茶ニ飼ふ、此茶ハ榎木の股ニたまる水とどうけの茶ニ用る、其水取て置べきやうなくハ、紙ニひたして置て、後ニ用の時、しぼりて用ゆ、竹のよぐひニ溜る水も同じ事を小壷の水と云　○ひむろ山とハ、同抄ニ云、むし鳥屋とて、土にて塗かくしたるを、氷室山と云、其中へ樋をかけて、水を入るを下行水と云、○とや板　同抄ニ、鳥屋の内に水を流して、古き飼を洗ひながさんためなり、

盧橘

日本紀　垂仁帝九十年の春、田道間守ニ命じて、常世の国へつかハし、非時の香菓を求しむ、今橘と云是也、同九十九年の春、非時の香菓八竿八縵を得て還来る、　本草　樹の高さ丈余、其葉両頭ニ尖りて緑色光面、四月小花をひらく、色白く甚香ばし　古今　五月まつ花たちばなのかをかげバむかしの人の袖の香ぞする、○古へ賞せしところの橘、其種詳ならず、源氏物語、枕草子などニ、花も実もむかしニ具したるよしなり、去年の実の、今年花さく迄落ずして、黄熟したるとぞ、漢土にもなし、橘の種類につきて八説あるよくいへり、○さだかならざれバ、それとさだむべきよしなくて、只橘とのミ

といへども、句のえあしみなく夏なるべし、**玉巻葛** 【興】俤

猶春のた部、橘の条併セみるべし、

【抄】玉まく葛とハ、葛かづらの真玉のやうに巻まとはれバいふ也、

【萩枝折】葛の手を巻たるを、玉まく葛とよめり、あるハまく

玉巻芭蕉 時珍曰、蕉ハ葉を落さず、一葉舒るときハ一葉枯る、故にこれを蕉と云、○初夏中心に新葉を生じ、いまだ開ざる、是を巻葉と云、玉まく芭蕉と称するハ是なり、

筍 たかんな たかうな

時珍曰、筍、俗に笋に作るハ非なり、竹筍と笋と同性滑利、多食へバ人を浮せしむ、凡竹筍ハ淡竹を上とし、苦竹之に次ぐ【紀事】凡笋ハ、鹿猪甚好て食ふ故に夜々人をして追しむ【和名抄】笋 和名太加無奈【源氏横笛巻】たかうな

橘鳥

杜鵑をいふ【万葉】橘の林をうゑむほとゝぎす常に冬まですみわたるがね【古今】やどりせし花たちばなもかれなくになどほとゝぎす声たえぬらん　大江千里

【薫三夏物】

蓼

【和漢三才図会】按小青蓼、二三月に苗を生じ、四五月繁茂す、秋に至て穂をなす、播ば津泪毎に穂蓼を出ス、年中穂をなす亦一異也

蓼喰虫

【孔叢】有蓼虫賦言、是虫幼長斯蓼不以為辛○世俗に蓼食虫も好々とゐへるハ是より出たる諺なるべし、

【五月】

端午

五月五日端午の節、端ハ初也、午ハ古へ五字と通用す、去るによりて五月初の五日の謂也、【珊瑚鈎詩話】端五の号、重九に同じく、後世五ノ字を以て午となすハ誤なり、【風土記】仲夏の五日を端午と云、

竹植日

竹酔日【晋書】五月十三日を竹酔日となす、亦竹迷日と云、是日竹を栽まバ必活す、【竹譜】竹を種るにハ雄を以てす、根よりして上、一節発するものを雄とす、【歳日記】降らずとも竹植る日ハ簑と笠　翁【五元集】五月十三日　雨雲や竹も酔日の人あつめ　其角

田植、田植歌 早少女 早苗取

若苗、【紀事】凡五月の尾より六月の首に至て、苗種生長するを早苗、民間にて苗代と云ところを植んとして、先その苗を抜を早苗取と云、農民男女混雑して再び苗を挿む、是を田植と云、女子苗を種ることをさをとめと云、各音を揚て是を田哥と云、或ハ児童太鼓をうちてこれを勧む、凡苗を種るハ半夏生の前にあり、○若苗ハいまだ長ぜざるをいふ、○

玉苗ハ、王ハ称美詞也、小山田ニ今ぞ玉苗植てりくるとゝとめがさ千そぬまそでかつらのゝ 仲実

袂百合 【和漢三才圖会】花正白艶厚く大なるく上ニ向ふ或ハ横ふ垂る、最愛すべし、かと深山渓谷の間より出る者を得べし、縄ふ縋り下りてこれをとる一株袂ニ入るゝがさき縋て上る、故ふ袂百合と名づく、これを珍重す、

六月

鷹習と学ふ 【月令】季夏鷹乃学習、注学習ハ雛のおそく飛ぶことを習ふなり、

滝殿 い部、泉殿の条ニ出、

竹皮脱 【本艸集解】時珍曰、土中苞笋各時を以て出、旬日籜を落して竹となる、【和名抄】籜、和名筝乃宇波加波、篾 和名竹乃加波

田草取 【本朝食鑑】種て後二十日前後田の雑草を除き去以て其根を固くす、蓋し田草を除くこと再び除くの労あり、○夏より秋ニ至迄三度田間の莠を取是を一番艸、二番艸、三番艸といふなり、

簟 【説文】簟ハ竹席也、竹を以て席とす、云【和漢三才圖会】簟ハ竹筵也、暑ニ用て鋪之、

抱篭 ち部、竹夫人の条ニ出、

糺の納涼 み部、御手洗の条ニ出、

れ

四月

鷹爪 【和漢三才圖会】列珠の樹高さ丈ばかり梢ふ細気條を生ス、緑色畧皂莢の葉ニ似たり、其葉細く小し、四月黄花をひらく、状微緑豆の花ニ似て繁く莢を結ぶもの緑豆ニ似たり、【大和本艸】二種ありと云、一種木の属是を鷹爪と云、一種草の属を竜爪とも云、【閑昼】花浅黄色末鋭にして鷹の爪に似たるゆへに云し

そ

五月

蠶豆引 時珍曰、豆莢の状老蚕の如し、故ニ名づく、王禎が農書ニ謂く、其蚕時始て熟ス故ニ名づく、八月種を下す、苗葉を生ズ、食べし、方なる茎中空なり、葉の状匙の頭の如し、二月花をひらく、蛾の形のごとし、紫白色、角を結ぶ、連綴して大豆の如し、頗る蚕の形ニ似たり、【和漢三才圖会】其莢上ニ向ふ、故ニ空豆とも云、嫩き莢豆を取て食ふ、五月熟ス、○俗ニこの莢熟しくこれを取収ると引と云、

六月

相国寺懴法 十七日 【紀事】六月十七日、洛の相国寺閣におゐて懴法を修す、世ニ閣と懴法と云、松風の鈸、小狐の鐃、当寺の珍宝也、是古へ佐ニ木氏寄附する所也、○寺中ニ定家卿の墓あり、但禅宗也、

つ

四月

筑摩祭

近江国坂田郡、筑摩の庄筑摩社、祭祀ハ四月朔日、或ハ初午日云々。［神社啓蒙］祭所御食津神、文徳実録曰、仁寿二年三月甲戌、近江国筑摩神ニ従五位下を授く。按ニ筑摩の庄ハ大膳職の御厨の地也。故ニ當職祭所の神を以て此地ニ祠る。蓋シこの神ハ稲食を掌るに依て、里女婚をなすときハ、祭礼に必釜鍋を戴きて神に奉ず。不幸にして少壮の間ニ孀となるときハ、やむことをえずして改て嫁し、再び嫁する者ハ二枚を用ひ、三たび嫁するものハ三枚を用ひて、神幸の後に候するなり、中世業平の花詞ありしより、里婦笑靨を齎して数枚を重ぬ、艶態の故の為也、固ニ芦胡をのべるなり。［雑和集］俊頼曰、近江国つくまの明神と申神おはします、其神の御誓にて、女の男もちたる数にしたがひて、鍋をつくりて、その祭の日奉るなり、男あまたもちたる人ハ、見ぐるしがりて、少し奉などすれバ、物のあしくてやまひなどして、あしくれバ、枚のごとくしていまれバ、あやまりありとなむする。

燕の子

委くハ春部、燕の条にてみるべし。

王孫花

［名医別録］王孫ハ海西、川谷及び汝南の城郭の垣下ニ生ず。○毎膳曰、王孫、和名ニあるハ、往昔本朝にありける明らけし、今識ことのなし、惜哉、特に無毒の草なりて、瘵病の功最大也。○今本邦の里俗、王孫花と称するものハ、訛ともいふべし。

兼三夏物

津波須

［和漢三才図会］鯔の小なるもの五六寸のものを津波須と名づく、西国にてハ和加奈と号、九月尺許なるものを眼白と名く、十月二尺に近きものを鰍と名く、江東にて伊奈太と称す、仲冬ハ長三四尺なるものを鯔と名づくといふ。

鈎瓶鮓

［毛吹草］和州吉野のつるべ鮓ハ曲物に入、藤にて手を付る、其形鈎瓶の如し、故に呼也、一説此鮓ハ、鮎を取て鮓となし、この曲ものに入て、吉埜川の水中へ沈め置て熟する期なくして出すゆゑにいふとぞ。

月夜

［雍州府志］飯ずしの一名を月夜と云、六条家に製之。○異名を月夜と云ハ、其飯の精白なるによるや。

五月

黴雨、墜栗花穴

さ部、五月雨の条に注ス。

辻の花

貞徳曰、つじが花と云ことハ、赤き帷子のことなれバ、夏之。［犬追物秘傳抄］後土御門院寛正六年八月、将軍慈照

六月

院殿犬追物見物云々射手ハ装束ノ日記云、紅入ざる辻が花の白帷子云々とありけれバ紅染をも拘らざるか、

月次祭

十一日【公事根源】云、六月十二月、年ニ二度諸社へ御幣を奉らせ給ふことゝ、弘仁年中ニ始る、

津島祭

十四日十五日○牛久天王の祭之尾張国海部郡、門間の庄、藤波の里にあり、【社家傳書】

【記】欽明天皇元年、こまゝと崇め祭る、天王始め西海の對馬ニ降る、後ニ尾張の海部ニ移る、仍て其旧地の名を表して津島と号す、嵯峨天皇の御宇、其祠を立ッ、始の祠ハ、柏森にあり、後居森の地ニ移し、更ニ祠を今の地ニ移す、【神祭】

【記】當社夏祭ハ、この神島ニ鎮座の後、神民の夏日ニ堪ざると暗ニあはれみ給ひ、避暑の為とて、宵祭よりホ一二諭しちろくのひく、船の上の楽よりハ殊ニ畫楽一成の舞曲、妙音の笛声、別調を神製しるひしよふことの楽の一成と車楽舞、津島笛と喚初める、世ニ車楽の説ハ、堂尻大隅とうきのと十一黨の武士、計策を以て討取らるうて起るよしいへるども、社説ニまとを否して、前説を用ふ、六月二日試楽あり、八日ニ町毎の車屋ふて調楽し、十三日江口ニおいて暗の試楽あり、十四日の宵祭、十五日の朝祭、これを里俗打舞しといふ、車楽船上の挑灯、およそ三百六十箇ハ一歳の日数ニ象り、真柱の挑灯十二箇ハ月の数也、高揚四方の灯籠三十箇ハ一月の数也、宵祭を尤奇観として、又翌日味爽の祭もあり、この時市腋車を先とし、津島の車楽山車その前後搏揄して、五村前後を論ぜず、五村ハ米座、塘下、筏場今市場下構是也、社地前ニ大河あり、岐阻川のまみにて、其中数町ニ及ぶ大河ニ大船をうかべ、数千の挑灯を釣る、其影水ニ映じて恰も星の如し、

○**芦の神輿**、【社家注進記】毎年御葦の神事といへるあり、国中の疫疾変異あるをトすといふ、津島社記神祭式あるニ芦の御輿のこといへず、社説ニ御芦の神事あるも、毎年六月十五日の夜、神主これを行ふ、極て深秘とす、ありまでもその為る処をしるもなくて、六月祓の余風ニして、牛頭天王の修法ニあらずとある物ニあらるせども、旧記ニ云、神翁一人葦の葉ニ乗じて浮来て、その名をとゞめす名のる、後ニ馬津の居森の窟ニ栖としおのふ、これらの神縁ふありて、芦の神輿と称するなり、

露涼し

露ハ秋に多し、故ニ連俳通じて夏

つ

秋と云なれども夏も又ある故に花涼しと申して夏季とせり、下に垂て鐘と釣ものに似たり、又白花紫葉のものあり、葉も牡丹のごとし、

釣鐘草　〔はなひ草〕花紫色、

ね

四月

練供養　〔紀事〕十三日より十四日に至りて、大和国當麻寺にて法会を修す、十四日練供養とす、僕射拱佩の女、中将姫の忌日也、中将姫尼となりて、善心尼法如とす、〔練供養縁起〕この来迎引接の法事ハ、恵心僧都あらたにおこなふ、この僧都ハ和州の良福寺村の人也、薙染の後、永観中、叡山にてこの法会をもとめたまふ、其後當寺護念院、本ハ紫雲菴として法如尼草庵の旧跡也、寛弘元年の比、僧都并に寛印とともに此処に来り、本尊と廿五菩薩の假面とを彫て、同二年四月十四日、法如の往生の日を以て、迎接会を修しける、是則横川の花臺院よりうつせる処也、〇一説に四月十四日ハ恵心僧都はじめて法会を修したまひし日なりとも云、

兼三夏物

根芋　〔和漢三才図会〕蔵、和名伊毛加良、一云伊毛之、俗云須伊木〇俗に根芋と称するハずいきなり、

五月

合歓の花　〔神農経〕合歓ハ蠲忿、萱草ハ忘憂、〇蔵器ガ曰、其葉暮に至りて即ち合ふ故に合昏と云、〔和漢三才図会〕五月花さく、其花上半ハ白、下半ハ肉紅也、散垂して糸の如し、〔和名抄〕祢布里乃木、〔万葉〕にあがのきとねぶともよめ、又〔新六帖〕にかうかの花とよみたり、

躵狩　照射、火串、〔はなひ草〕これらを獣狩、

獣狩なり、夏季也、ともしハ鹿を射る也、闇なる夜山の木かげに篝を焼、或ハ小炬を串につけてさす、是を火串といふ、其に来る鹿、火影にめでて寄り来る、牝牡目さし合火をてらし見て、鹿の目のきらきらとみゆるを的にして射取る也、哥にハ合す鹿とよめり、又さつ男の猟ひともまたともしの待とハいへりで、ともを流る猟と云ふ、云々

六月

練雲雀　雲雀鷹

〇凡六月毛をかへて旧毛おちる也、俗呼で練雲雀と称ス、毛をかふるときハ、其飛ことも速ならず、故に鷹を放して是を捕ることを雲雀鷹と云、〇定家卿鷹三百首の内、河内女が手引の糸の猟り雲雀一よう鷹とあはせてたぐ〇或説に練雲雀とハ、音入雲雀の略語なりといふ

夏

四月

夏羽織（単、あるひハ羅お、あるさま近来の俗服也、）

中山祭

中酉日 神社啓蒙 京三条猪熊の辺ニ祭る神、豊石牖、奇石牖命、明徳記 今六角堂の南、猪熊の東ニ近座あり、石上寺とも云 兼邦百首抄 二条大宮岩神へ付させ玉ふ中山大明神とやハ是三井寺北の院ニおハしやす新羅明神（素盞烏尊）ハ 公事根源 永承五年六月十六日、神社と建立し、同六年十一月八日ニ従三位の神位を授せらる、後冷泉院天喜元年四月よりはじめて官幣を奉らる、云々 是四月の中の酉日なりや、三井寺ニおいても、五月五日新宮祭を修え、是新羅明神の祭なり、

夏木立、夏草

元帝纂要 夏草曰茂草、木曰樹林 茂林○いづれも、新緑おひしげりたるさまを哥ともよむ也、

名取草

牡丹の一名也、藻塩艸 昔、ある女この花を愛しく、多くうゑおきて、昼ハ終日あがめ、夜ハよもすがら風ニ損ふべきことをなげきたるによりて、男、他の心ありとて、離別しけるハ、などおきよう せりきまて、元のごとくすまひしかバ、仍てありて、蔵玉 わ人のいろしとや名取草花ゆゑさきをとがめすまかし、

生節

常陸国誌 土人塩水を用て茹乾し脯とす、味生なるも美也、俗ニ鰹節と云毒あり、○鰹節の、いまだなまなましくて枯ざるを云、○江戸ニてなまりぶしと云也、

茄子花

時珍曰、夏ニ花をひらく、五瓣相連り五稜縷の如し、黄蕊緑蔕其茄を包む、云々 秋ニ至て紫

兼三夏物

蚰蜒

説文 附蠃ハ背殻を負ふ蝸牛なるの、殻なきを蛞蝓と云、

夏月

明やすきさま、涼しきさまなど、余情ニよむべし、

夏の霜

朗詠 月照平砂夏夜霜 云々 この詩ニ、夏の月影を霜ニみたてゝ哥ともよめり、

夏雨

五月雨も夕立も、おしなべて夏の雨なれど、各一種の景物となれるれバ、たゞ夏の雨とよむときハ其つゞめをとりて、常の雨の趣ニ、夏季のあつしはあるべし、

夏夜

みじかきを、くるし さまざまよ

夏野

百草の茂りたるさま專要也、○井一あり 秣刈人とさそうの友あかし 翁

夏山

【郭熙書譜】夏山ハ蒼翠如滴とあるによりて、

夏虫

身をこがすを云、即火蛾のこと、また蛍とも、古哥に夏むし

夏野の鹿

【宗祇抄】夏野の鹿ハ、角生初るゆへ、短くして、一束ばかりなるといふ、

【万葉】夏野去小牡鹿之角乃束間毛妹之心手忘而念哉　柿本人麿

五月

永根

和哥にながきねとよめるハ、あやめのこと也、根の永きをことぶく、永承六年五月五日に、あやめの根合といふをありて、其式、哥合の儀のごとし、左の根、一丈一尺、右の根一丈二尺のよし、古今著聞集にみえたり、是ハ後冷泉院の御時也、又郁芳門院の根合など、ことに八雲御抄もみえたり、

苗

た部、田植の条に出ス

南天花

時珍曰五月小白花をひらく、【和漢三才図会】画譜に、蘭天竹と名く、其葉嫩にして、竹に似たり、子を生じ穂となす、紅なること丹砂の如し、久しく経るといへども脱ず、こと庭中に植れバ火災を避べし、甚験あり、近頃白子の南天燭を出す、以て珍しとす、凡此樹長じがたしといへども、山陽の地に大木あり、作州土州の山に、長さ二丈余、周り一尺二三寸なるものあり、杖に作る、俗に邯鄲の杖と云、【本艸綱目】南燭、また文燭と名づく、

瞿麦

常夏

【和名抄】瞿麦（和名奈天之古、一名止古奈豆）【草花譜】瞿麦、単午なるものを石竹と名づけ、千葉なるものを洛陽花と名づく、【藝頌】苗高サ一尺八寸、葉尖り小く青く、根ハ紫黒色、形ち細蔓菁の如し、花紅紫赤色、五月に至て開き、七月に実を結ぶ○大和撫子、唐撫子、川原撫子、鷺撫子、藤撫子、など種々あり【栄雅抄】花の姿ちひさやかにうつくしく、色こく咲けバ、をさなき愛子になぞらへて、撫子と云、又盛久しけれバ常夏とも名づく、唐撫子ハ色々の品あり、大和撫子ハ紅梅色也と云、鷺撫子ハ花の形によりて名とし、藤撫子ハ色によりての名なるべし、○石竹【和漢三才図会】瞿麦即ち石竹也、今以て二種とす、共に節の周囲に剃歯ありて切又あり、剪紅紗に似たるものを瞿麦とし、切又なきものを石竹とす、○からなでしこあるることハいざしらずなでしこのおくにおもふるいつしかれけ　後頼

夏菊

【本草】菊に、夏菊、秋菊、冬菊の分ちあり、【菊譜】引花史曰、四月に咲くものあり、張孝祥嘗て詩あり、五月に咲くものあり、陳子高嘗て詩あり、六月に咲く者、符離王常詞あり、秋冬に

実なきものを以て貴しとすべし、夏なきものを次とすと云々 **生胡桃** 〔博物志〕張騫西域に使して、かへるに胡桃の種を得たり、〔本草〕此果外ニ青皮肉ありて、こゝろを包む、其形ち桃の如し、胡桃ハすなはち其核也、樹の高サ丈許、春初て葉を生ズ、長四五寸、両々相對す、三月花を開く、栗の花の如し、実を結、 **茄子** 〔釈氏〕〔切韻〕茄一名紫瓜子、〔杜宝拾遺録〕隋煬帝、茄を改て崑崙紫瓜と云、〔多識篇〕水茄（今按奈加奈寸比）○谷茄、黄山谷曰、茄の老たるもの子堅し、谷の如し、穀子茄と名く、（谷ト穀ト音通ス）○白茄子、時珍曰、銀茄と名づく、と云々

六月

撫物 かの部、形代の条に出す、

名越祓 〔神祇令〕名越祓とハ、名ハ夏の累語にて、夏越の祓と言こゝろハ、不祥を解除、夏を越し、千秋に至らんとするの意あり、〔八雲御抄〕名越とハ、あらぶる邪神をなごむる故也、此説にもとづかバ、神を和す祓とも云べし、○荒和祓でよむ同じこと也、〔公事根源節折式〕晦日の夜、御贖物まゐる、あらよ（荒節）にごよ（和節）の御装束云々、此次第〔江次第〕にみへたり、よ部、節折の条見合すべし、○夏祓、名越祓とも云ハ惣名也、荒和の祓、節折ハ天子の御祓にて云々、大祓ハ百官の祓なり、を部、大祓の条にいへるがごとし、○御禊、大祓、形代、小嘵鳴神、茅の輪、麻楽、流祓、祓草などハ、おの〳〵頭字の部に分ち入るところなり、〔古今六帖〕みな月のなごしの祓する人ハ千とせの命のぶといふなり、読人不知

夏祓 **夕祓** 夏祓、夕祓とハ、其時節時刻をさしていふこと、祓除ハいつとあるもの故、夏祓と云て季を定め、夕祓も、夏の夕方涼風を得て修する体、和哥にも読入云々

夏神楽

川社 〔奥儀抄〕川社のことハさまぐにいへども皆ひがごとなり、是ハ夏神楽のことにて、神楽ハ冬にするを、おのづから俄なることありて、夏などする時ハ、さゝがに川のほとりにみてぐらにハ、河の瀬に榊一本を立て、まはりに篠竹を棚のやうにかきまはして神供を備ふ、是を川社と云○俊頼朝臣曰、河社のこと知人なし、おぼつかなきことなるべし、人のいふハ、水の上に社と祝ひて、夏ハ神楽するに〔川社〕河社なれば夏神楽のこと、昔より此道の先達たちおぼつかながりけること、只古きことのを見て心得ざりし、貫之集にも四、五首よまれたり、川社なのみのおもひやはすな衣のたなびけせばあぬかるらん、又云、天慶四年三月うちの御屏風のうた

夏かぐら、「行水の上にいはへる川やしろかはなみたかくあそぶなるかな、初の哥、新古今集神祇の部に八延喜の御時、屏風に夏かぐらのこゝろをよみ侍りけるとて入集す、時代ハちがひ侍れども古今の屏風の哥にて、夏神楽とせるハなかなかよき事なれバ、夏かぐらの絵神楽の絵の哥に川社とよめるこゝろなれバ、三哥に六月祓の時のさまを又右二首ともに六帖冬の部、神楽の哥に載らる、四季の因月の哥ども皆冬の部につけらる如く、類をもて神楽の部へ入れるも、冬の哥とするにハあらずなり、この六帖にハ此哥ハ河社夏祓ハやがて神楽の事也、忠見集にも、御屏風に六月河辺に神楽する所をよめる「うちかへすのしのるかあてて行水にてぐあそびの神楽にあそびしてこそあそびのするくへと、やがて夏神楽ととよめるハ、河社と八延喜式六月大祓祝詞によるに、天神地祇ころしろしをきこしめせとも、河の瀬におす瀬織津媛といふ神あらはるものと大海原にもち出てなむ、ちこの故に、河原にて祓をするハ、河をやがて河社とまうしも、やむすひ、川中にたてゝめぐる社のさまを引結ひ神供など備へて祝詞あげて後、別に神楽どもを奏するなりやと云と、匡房卿六月祓の哥に「川やしろ秋をあすとぞおもふべきや波のしめゆふ風の涼しさ、民部中将資成朝臣の家の哥合、俊成卿の哥「五月雨の雲まもなきを川社いかに衣をしのにほすらん、風雅集兵部卿成実「川やしろしのに波こす五月雨に衣ほすてふ日やあらんと、是らをおもふにいかゞなる云事ぞ、晦日にハすなはち私の家にても八、便りある日にするなるべし

夏痩

【万葉】石麿呂尓吾物申寸夏痩尓吉跡云物曽武奈伎取食

【続猿蓑】夏やせを彩ひのもちのむしろかな　如真

夏引の糸

【枝折萩】夏引の糸とハ麻をいふなり、同前

夏引の白糸八夏蚕の糸なりと云く

神馬藻

【下学集】神功皇后異国を攻給ふとき、船中馬秣なし、海中の藻を取て馬を飼ふ、故に神馬草と名く、神馬藻とかきてなのりそとハ神馬にハのることなかれの義、【つくばせ】濱藻とハ是なるべし、濱藻ハ是ホダハラあり、名乗菜といふときハ夏なり、ホダハラといふときハ正月の飾物なり、春に勿論也○今按に濱藻となのりそといふ事をのすとて日本紀允恭天皇の紀にみえたり、【重之集】ちハやぶるいづしの宮の神のこまゆめなのりそよたたくもごとせる是莫鳴菜とよめるなし、

菜瓜

【和漢三才図会】本草に菜瓜とハくるものハ越瓜也、菜瓜ハ越瓜に似て小く、背に微毛あり、六七月瓜を結ぶ、胡瓜に似て皮厚く、深青色、縦に白文有、

内ハ越瓜ニ似て、煮食によろしからず、糟及び糠ニ蔵む、硬く脆く美し、上品なり、一種、菜瓜ニ似て小く、鵞の卵の如きものあり、小瓜と名づく、糟につけて食ふ、

奈良漬製す

[同上]糟漬の法、六月土用の中ニ越瓜の青き物を採て、これを破り、蛤貝を以て瓤子を刮去り、舴艋の形とし、灰を盛ること一時バかりにして、水湿を去り灰を拭ひ去り塩を盛り、凡十（十二斤とす）酒糟三十斤を用て、瓜を包ミ蔵む、各相碑しめず、固く封ず、大抵七十五日にして成る、

納豆造る

[同上]納豆数種あり、大低鹹豉の法より出ヅ、以て酒肴とす、僧家これを重んず、

夏切茶

[紀事]六月の始、宇治の茶人新茶を新壷ニ盛りて常ニ茶を賣ところの良賎の家ニ贈る、是を夏切壷と云、凡壷の蓋紙ニ糊して堅くこれを張り、風湿をして、壷の内へ入しめず、茶用ることあるときハ小刀を以て、壷の蓋合縫の糊紙を截て茶を出す、これを壷の口を切と云、冬口を開くの壷、盛夏の間處々の山林清涼の地におく、故ニ夏中用る所の茶、先これを贈る、故ニこれを夏切茶と云、

夏ぶし

[千梅こくがせる]ニ誤て鰹の生節とす[雑談抄]ニ髪沸瘡とす、暑中ニ発する小児の頭瘡也、江戸の俗訛て夏ぼしと云

夏深し、夏の別、夏ニ後る、夏の限、夏過て、夏を追、夏の果、

何れも別義なし、

ら

五月

蘭湯ニ浴す

[大戴礼]五月五日蓄蘭為沐浴

[詞]浴蘭湯兮沐芳草[本草]蘭ハ乃ち沢蘭の香草也、今の匂蘭花にあらざるなり

む

四月

向日明神祭

[神社啓蒙]向日の神社ハ山城国乙訓郡、西岡の辺ニ在、[名勝志]當社の額正一位向日大明神と竪二行ニ書る、道風の筆也と云、西岡の民家の側ニ花表あり、[雍州府志]一説ニ日ニ向ふとの八月也、もるところ八月読命を祭ることの或ハ日向大明神なるべく、本朝人皇の祖神、神武天皇也といへり是ならぬこともしらず、○當社祭礼の以前、社人先ヅ岩倉山三重院へ行て垢離をなし、又祭日必神馬を此滝ニ引く、是出現の地なればなり、出現のことハ西岩倉金蔵寺縁起にくはしくみえたり、今これを略ス

結葉 【金葉集】応徳元年四月、三条内裏にて、庭樹結葉といふことをよませ給ひける、院御製、おしなへてこずゑ青葉になりぬれハ松のみどりもわかれざりけり、

麦秋 ○諸木の葉と葉と相交り結ぼゝれたるをいふなり、【礼月令】孟夏月麦秋至、註ニ、秋ハ百穀成熟の期也、此時ニ於ゐてハ夏といへども、麦においてハ秋也、故ニ麦秋と云、【蔡邕月令章句】穀ハ其初生を以て春とし、熟するを秋とす、故ニ孟夏を以て麦秋とす、

麦の秋風 【夫木】御園生ニ麦の秋風そよめきて山時鳥志のびなくなり、　俊頼

麦苅 【和漢三才図会】大小麦ともニ九十月種を下し、皆四月黄熟す、其刈ことハ立春より百二十日ニ至るを旬とす、故ニ諺ニ云、麦ハ百日の中ニ蒔べし、三日の中ニ苅べしと云、但し小麦ハ苅ることハ大麦より遅きこと十日ばかり、麦ハ五穀の貴とす、○二年草、年越草、ともニ麦の異名也、麦ハ年を隔て種る故ニ名づくる、

麦藁笛 【同上】小麦稈厚く硬し、小児用て笛を作りて、これを吹く、これを麦わら笛と云、【夫木】うなゐこがすさびにならす麦笛の声におどろく夏の日ぐらし、　西行

五月

六日菖蒲 京師屋檐ニ葺ところの菖蒲を取て、六日ニ菖蒲湯となす、是五日の夜の露を受る物を用ゆ、彼金門記ニのせたる神水の説なるゆへ、

室明神祭 十三日○播磨室の津ニ大社あり、祭る神上賀茂ニ同じ、例祭九月十三日、是ハ先洛の上賀茂の氏人両人播州ニ下向して、神事を司ることを云、其次第先ヅ辰剋装束束帯す、巳の剋の鐘を撞て、神主以下出仕す、即拝殿の座ニつく、御鑰を祝ニわたし、社家これを役す、次ニ神主祝（此祝賀茂の氏人なり）御戸を開く、氏子素襖烏帽子ニて唐戸の裏神前の左右ニつく、次ニ神饌神酒を供す、此間事長（ハ男巫ス）神子神楽を奏し、次ニ室津の遊女棹の哥を発す、次ニ神主祝詞を申す、是よりさきに出、貴船、太田、若宮、の社の御饌を献拝す、神主祝内陣ニ入て、御饌を撤す、内陣の御幣榊を出す、祝御戸を閉ぢ、神幸、先ヅ神船着岸の後、神主祝頭宮の拝殿の座につく、両社人御幣榊を捧て大床ニ候す、次ニ渡御あり、遊女十二人三日潔斎して、神事ニ出、内五人ハ男子の姿となり、髪を剃り男髷ニして金襴の社杯を着、笛二人、鼓二人、太鼓一人、残り七人ハ髪残一人天冠ニ戴きて、萌黄の水干を着し、七人ともニ幣を採る、これ棹哥の役なり、

六月

虫干、

虫拂 土用干 此月土用中、諸神社、諸仏寺、什宝の虫拂とす、和俗六月土用中、天日の晴たるに候て衣服并書画の類までを曝す、是を涼を取と云なるを土用干と云なるべし、書画衣服の蠹虫を殺棄するなりとぞ

う

四月

卯花衣 桃花御説 表白、裡青、柳に同じ、○四月これを着すること

梅宮祭 上ノ申 神社啓蒙 梅の宮は山城国葛野郡、王城をさること二里ばかりにあり、祭る神四座、相殿の神四座、酒解の神、大若子の神、小若子の神、酒解子の神○此祭今絶たり、土人わつかにこれを祭るのみ、祭の式江次第にみえたり、橘氏の祖廟なり、世俗妊娠の婦女、當社の砂をとりて帯襟に佩と云、是檀林皇后嘉智子の遺風也、

卯花 和漢三才図会 按に楊櫨数種あり、山空木、箱根卯木、唐空木、三ツ葉卯木などは山中に多く、人籬根に植るものは山空木にして中空なる故に空虚木と名く、高さ丈ばかり、皮白く、肌深青、空ありて、其葉円く長し、四月小白花をひらく、簇をなして愛すべし、俗に云卯花これ也○十姉妹、箱根空木と訓む、花蘂は八十姉妹、似て同じからずといへども京畿に多し是も卯花と云也○岩本空木、岩の傍に咲けるをいふにや、千載集 俳諧哥、うの花よりでるもくしかけ島のあそもさらさらそを岩とこえしか○異名、うつき草、垣見草、雪見草、おの〳〵頭の假字の部にうち入て注す、

卯花くたし 八雲御抄 うの花くたし四五月の雨也、万葉に春されば卯花くたし、云〻とよめり、

茨花 和漢三才図会 金櫻子、山林の間に叢生す、大小薔薇に似て刺あり、四月白花をひらく、夏秋実を結ぶ黄赤色、さながら小さき柘榴に似て長し、云〻

夏枯草 時珍曰、原野に多し、苗の高さ一二尺ばかり、其葉微尖、葉節に對して生ず、細齒あり、背白く、茎の端に穂を作す、長一二寸、穂の中に淡紫の小花をひらく、三四月花をひらき実を結ぶ、赤穂を作す、五月便ち枯、和漢三才図会 夏枯草、穂の形矢筒の靫のごとし、故に俗宇豆保草と云、和名宇流木是也、

鸎実 和名抄 鸎実（和名阿宇之智、一云、宇久比須乃岐乃美、今案所出未詳） 大和本草 吉利子樹、和名宇久比寸といふ、所々山林にあり、小木也、葉は山躑躅に似て

両〻相對ス朧月より諸木にさきだちて生ズ三月に小花さき四月に実熟す両〻相對して葉の茎より内にさき葉の茎の本より実の茎生ズ異物也鶯の始て鳴ころに此花さく故に名とせりとや京識にさく臼の木といふその実の形臼のごとく上に窪ミあるし、百菓の先がけ也、秋ハ紅葉して落ツ立花の下草になる也、

童子鳥

わらんべの異名［灌頂口傳］この鳥冬ハ深山の木のうつろに住、かしらの毛ミだれ落て小童の髪のやうにして、

［兼三夏物］**團扇**

［五雜組］大明以前搨扇あり、多く團扇を用ふ、［和漢三才図会］方扇（俗云唐宇知波）翳に似たる物を打べし故に宇知波と称す、［和漢文操］（支考著）團賛の序にうちはとハ云和訓ハいはゆる故とももろこしなるを俳諧の書にハ團の一字をもと用ひ来りと云

宇治丸

［毛吹草］城州宇治の鱣鮨是を宇治丸といふ

鵜飼、鵜舟、鵜縄、鵜遣、鵜匠

［和漢三才図会］鸕鷀、（和名之万豆止利）今云宇乃（止利）、按に和名抄云大なるを鸕鷀と云（日本紀私記志万豆止利）小なるを鵜鶘と云（俗云）○弘景曰此鳥卵を生ズ口ニ其雛を吐○岐阜長良の鵜飼六月避暑納涼の為に近国より来て見物ス所謂上川七艘下川七艘合て舟数十四艘長良の渡より小瀬の渡まで三里の間を上川といふ長良より川下三里を下川といふ上川の鮎を上品とす舟一艘に鵜十二羽鵜遣一人舳當一人也舟の舳先に鉄网を下し篝火を焚十二の鵜の縄を左の手の指の股にはさみ持て鵜の魚を追ふを見てさばひその縄もほぐさず次第をさげからし、その時連なる縄をよせたぐるとぬき出し持ちあげバをつまさる縄おのづから解て帯ることなし、さて鮎を十分に呑たる鵜ハ船をさふまがらとつかまへ右の手にてかゝへ魚を吐しめ、又水中へ追入るその手先のすゞやかにしてそらにつかふがごとくなれども次第を追ひて甚だ志つまるものなり、鵜縄長さ一丈二尺鵜の首に鈨を入て、腹中に入らざるやうに設る也月の入よりこ船をおろし、月夜の間ハつかはず、腰蓑を着ちひさき笠をつけ、凡三四月よりはじめて八月三十日を限とす、

［五月］**馬弓**

（左部騎射の条なるべし、）

宇治祭

八日○離宮乃

社ハ山城国宇治郡宇治の里にあり、祭る所三座、【宇治旧記濱千鳥】應神天皇、莵道稚郎子、仁徳天皇也、當社ハ宇治の北にありて、関白頼通公平等院建立の時、離宮を南に移し、平等院に向ハしめ、此寺の鎮守とす、【神社啓蒙】離宮ハ祭る所の神一座、藤原忠文也、按に忠文ハ宇治氏にして、母ハ息長氏の女なり、承平三年、秀郷、貞盛に、将門誅伐の功を以恩賞を行ハるるの日、小野宮左府忠文を拒く、賞列に入ず、故に忠文ふかく小野宮左府を恨ミ、遂に宇治川に没まて、其霊志ゆく祟をなして、百姓を驚す、是を以て祭て宇治の離宮と号す○両説互に異也、この神事そのかミめ頼通公に勅して、天下太平の御祈也、五月八日未の刻より九日巳の刻に至りて、これを平等院にて修す、太平の御神事とて云、青梅、菖の両種を以、神饌に備ふ、【雍州府志】祭の日、金銀の幣を奉る、供奉の人、金銀の幣あるを誤りてきんかうといふ、

鶉の巣 先板の諸抄に夏季とす、これに従ふべし、さるを年浪草にありて誤て春の部に載せたり、注ハ其所にあるべし、

鶯音を入 【月令】反舌無声、【蔵器本艸拾遺】百舌一名反舌、今の鶯也○【礼記疏】に反舌を蝦蟇とし、未ダ是非をしらず

羅 細布かくいめの細かき布、越後縮のるいにや○すべて薄織の絹布をいふと心得べし、

萍の花 【呉晋本草】水萍、一名廉、葉円く小にして、一茎一葉、根水底に入て、五月白花あり、○丸荇萍の類、其花水面に秀、或ハ白、或ハ黄、五六月盛也、

瓜の花 花黄也、胡瓜越瓜の類すべて、その瓜字の部にてみるべし、

梅漬る、梅干、梅剥 梅剥ハ皮肉ともに剥掛晒乾しろく、梅酸とするなるべし、

浮巣 みな部、水鳥の巣の条に注ス、

蠸 【尒雅注】蠸、一名守瓜、喜て瓜の葉を喰ふものゆゑ、【和名抄】守瓜（宇利波閉）○和にある者又同し、形其蛍に似て、黄色なる虫なり、

うつ蝉 せみの部、蝉の条に出ス、

鶯の附子 【貞享式】此式ハ例の當用也、今按るに鶯の子なり、春巣立て、夏飼ハ六月の間に毛を替て、冬至のころ鳴習ふゆゑに、鶯の子に鳴の字を結びて冬季とハあるべし、去らバ夏ハ聞習ふく、或ハ引鳥の親に附、或ハ笛を以て引音を教、稽古ハ夏の間なれバ、附子ハ決して夏となし、笛を結びても夏とするべし、

六月

打水

【五元集】おちこちや採も雀もぬるくれど　其角

ゐ

い部ニ併出す

の

【四月】

残花　【貞享式】此詞ニハ古今の論あり、去年でも残の字をもて其季より此季にわたら称バ残るといへる道理なし、花ハわたくしに春ニ決しかく、残るハ夏と定むべし云々

【兼三夏物】

蚤　【和漢三才図会】赤色肥たる梟小き首、六足ありて能跳る、夏日人家の湿熱の気より生ズ、おのづから牝牡あり、○さらしなる夢ハまをとこ蚤の痕　其角

幟　のぼりハ部飾胄の条ニ出ス

【六月】

凌霄花　時珍曰、紫葳一名凌霄、俗ニ赤艶なるとのひ、紫葳と云、此花赤艶故ニ名く、木ニ附て上り、高サ数丈、故ニ凌霄と云、年久しききことの藤大なるハ林の如し、春始て枝を生ズ、一枝数葉、尖り長くしてかく歯あり、深青色、夏より秋ニ至て花をひらく、一枝十余朶、大サ牽牛花の如し、頭ニ五瓣をむらく、赭黄色、細點あり、秋深く更ニ赤し、八月莢を結ぶ、豆の莢のごとし、長サ二三寸許、

お

をの部ニ併せ出す

く

【四月】

久世祭　中ノ巳　但シ巳二ツアレハ初巳　○山城国乙訓郡久世の神社、上久我の民屋二町ばかりにあり、菱妻明神と号【三代実録】貞観八年八月十四日丙戌、山城国正六位上久我万代継神授従五位下、

関白賀茂詣　中ノ申　【公事根源】初度ニハ八日、次とえらるゝこと此事あり、円融院天禄二年九月廿八日、摂政右大臣謙徳公が賀茂詣のこともあれど、是摂関の人の賀茂詣のはじめなるべきに、此事ハ必ズ賀茂祭のまへの日にあることゝ、主人ハ乗車なく、地下殿上の前駆あり、白妙の御幣、神宝の唐櫃やうの物とゞけさゝむ、琴持菅笠深沓とてそのとめしぐす、上達部軒とつゞきぬ、社頭なく神拝あり、葵桂を祢宜をもちてまゐるもバ、冠なく、東遊、求子、駿河舞あり、○菅笠擔、賀茂詣行列の中ニ、大きなる菅笠を擔ひて渡るを云、

國祭　山城国賀茂の祭也、【公事根源】三十代欽明天皇の御宇、四月に吉日をえらびてまつらしめ所見あり、又和銅に詔ありて国司にまじはりて検察ス、ところがらの国祭ハ賀茂の本祭あるべきにや、酉の日の祭ハ公家より使を立られ、走馬を献ぜらる、相かはるべきにや【岷江入楚】賀茂太神ハ山城国の地主神なれバ、中の申の日、国より奉る祭也、中の酉の日ハ内裡よりの祭也、昔物語にも多く書

くるハ中の酉の日也、

灌佛 ハ部仏生会の条ニ出

草茂る 〔元帝纂要〕夏草を茂草と云、〔字彙〕茂ハ艸の豊盛の貌、

草の王 〔大和本草〕葉ハ菊ニ似て大なり、一葉ことに五ツにわかれ其わかれたる内ニ岐あり、四月花をひらく、俗ニ草の王と云、

乳柑の花 〔和漢三才圖会〕葉橙ニ似て長し、ゑミ〇花もまた橙ニ似たり、

沓手鳥 〔新撰万葉〕郭公鳴立春之山辺庭沓直不輸人哉住濫〇くつてどりハ時鳥の異名也、此鳥前生ニ沓を作て賣ありし百舌鳥これを買て價をやらハず故ニ百舌鳥ハ此鳥の来るときハ木の下竹の中ニかくれて見えぬと也、是古き諺なり、

勧農鳥 杜鵑の一名なり、此鳥農業を催さんため四五月ニ来り、田をつくらざるをはやくつくれ、時すぎぬるぞこのゝずと鳴とぞ、故ニ名く、

倶伎羅 契沖の説ニ、くきらハ時鳥の梵語なりと云へり、〇こぞのなつなきふるしてける声なれどとあやめづらしく鳴くきらぶ　遍昭

蜘の子 時珍曰、按ニ王安石字説ニ云、一面の網を設け物觸て後これを誅ス、誅義とあるもの也、故ニ蜘蛛といふ〇壁銭螲蟷蠨蛸絡新婦の数品あり、皆初夏ニ子を生ず、恰も罌粟子の如し、〔藻塩草〕蜘の子ハ生れ出て風にふかれてちり〴〵にわかるゝよしいへり、〔新撰六帖〕おもやじ世にちらまほしのひてたる蜘の子のちり〴〵にこそまくるもかるらめ、衣笠内大臣、

五月

薬玉 五月の玉、〔天暦御記〕延喜十三年五月五日丙午、糸所より薬玉を供奉せしむること常の如し、去年の九月の茱萸を撤して薬玉を以て懸替御柱の前に著る例なりと、〔枕草紙〕五月五日ニハ縫殿より御薬玉とて、いろ〳〵の糸を組さげてまゐらせたれバ、御几帳奉るなる母屋の柱の左右ニ付たり云々、〔世諺問答〕諸病必五月ニおこる故ニまづ薬玉を五色の糸にて調へてむちかくかけれバ悪氣をさらふと申本文侍るにや、〔雲州消息〕今朝或処より薬玉一流を給ふ、作るに百草の花を以てし、貫くに五色の縷を以てす、草虫の形を摸して其花房に栖しむ、芳艶の美興あり感あり、古人の云續命縷と懸る時ハ人命を益す云々、いつの部長命縷の条かよハし見るべし、

薬日 薬草摘　薬狩　〔世諺問答〕
競駈　五月五日

と薬日といひておの日一切の薬草をとるなり、〔荊楚記〕是日雑薬を競ひ採、夏の小正ニ云、薬を蓄て以て毒氣を止除ス、〔宗祇抄〕きそひがりするとハ、四五月に薬狩とてある也

萱草花

忘草 時珍曰、萱本蘐に作る、蘐ハ忘なり、詩に憂思不能自遣故欲樹此草玩味以忘憂也、呉人これを療愁といふ、其葉蒲蒜の葉の如くにして柔弱なり、新旧相代つて四時青翠なり、五月茎を抽んて花をひらく、六出四垂朝に開暮に蔫む、秋深に至てすなはち盡く、其花紅黄紫の三色あり、李九華が延寿書ニ云、嫩苗を蔬として食へバ風を動し、人をして昏然と酔るがごとくあらしむ、因て忘憂と名く、此も又一説なり、〔清輔奥儀抄〕忘草 萱草をいふなり、兼名苑にハ忘憂艸とうけて、〔大和本草〕諸説を引て本邦の萱草にあらず、然とも五月茎を抽んで六出四垂といへるハ、花の形相似たるものなり、一種朝鮮萱草あり、葉冬も枯ずして其花紅黄色なり、時珍が説に似たり

雲見草

楝の異名〇古言ニ山遠き軒端にかゝる雲見草、雨とハならでそらぞくもれる、

栗の花

〔蘇頌圖經〕栗の木高さ二三丈、葉極めて櫟に類ず、四月花を開く、青黄色、條長ふして胡桃の花に似たり、

山梔子の花

時珍曰、卮ハ酒器なり、卮子これに象る故に名く、俗に梔に作る、佛書にハ其花を稱して薝蔔と云て、謝霊運ニハ之を林蘭といふ、葉兎の耳の如く厚くして深緑也、春栄秋瘁す、夏に入て花を開く、酒盃の如し、白き瓣黄の蕊

車百合

〔和漢三才図會〕葉畧濶く對生して車輪の如し、故に車百合といふ、其花瓣巻轉横に垂る、下野日光山和州大峯の產各異色あり、

黒百合

〔同上〕花に黒色のもの絶て希、惟紺色愛すべし、本奥州より出、

桑實

〔同上〕桑ハ蠶を養ふの地多くこれを栽、實のらざるものあり、俗に男桑といふ、其桑の椹ハ初青く白く漸く赤色黒く熟し味ひ甜く、其木堅實にして黄白の色、

水雞

〔同上〕鼃鳥和名久比奈、按るに大さ鳩の如くにして、頭背翅皆蒼黒の斑あり、淡黄赤色を帯、眼の上に白き條あり、觜蒼くして長く、頷胸の間白うして、黒白の斑あり、尾短く脚長く淡黄なり、夜鳴て旦に達、声人の戸を敲くが如し、蓋水辺ニ在り、晨を告く故に水雞と

名く、【本草】多く田沢の畔ふ居る夏至の後より夜鳴て秋後即やむ

黒鴨

【仙覚万葉抄】黒[illegible]一名かるといふを、鴨のたぐひあり、田舎の人ハ黒鴨といふ【和漢三才図會】軽鴨全躰黒色頸の後ふ青色を帯、光あり、眼の上ふ淡白の條あり、背黒くして喙端淡赤く白色ふして黒く縦の紋一條あり、脚掌ともふ赤し、

黒はえ　白はえ

梅雨中の空合といふべし、譬ばかきくもりして今を降やうなる空のうちふ、又あかるくなるけしきを黒はえといひ、又小雨ふりながら折々日のてりてなるけしきあるを白はえといひ、又夕ぐれに暮かかる空の一きわ晴てあかくなるを夕はえといふことなるべし

六月

鞍馬竹切　廿日

【親長卿記】文明三年六月廿日、今日鞍馬竹切也、夜に入て護法の儀あり云々今に至て今月今日これを修ス、【紀事】紀峯延鞍馬寺の主となる夏五月護摩を修ス日中大蛇北の峯より来る峯延毘沙門の咒を誦す蛇おのづから斬て段々となる、此寺の本願人藤原の伊勢人禁闕ふ奏して役夫五十人を遣し此蛇を静原山ふ弃、俗其地を呼んで大虫の峯といふ今ふ至まで毎年六月廿日、村民薬師堂ふあつまりて大竹を縛て立て又別ふ竹二本を堂の中間に縛て横たへ法師廿人餘白き袴を着し山刀を佩、庭上ふ出て一本の竹を近江と称し一本の竹を丹波と称し法師各十人左右ふわかれ同時ふ声を揚奔走して山刀を以てこれを截る、その遅速ふよりて両國の豊凶を占ふ速なるものを豊を得るといふ、かくして後その竹を以毘沙門堂の前ふ来りて又段々ふこれを截ること竹切といふ、是峯延蛇を斬の遺意なり、又夜ふ入て寺僧各毘沙門堂ふあつまり其側ふ僧達中間ふ一人を置各肝膽を凝してこれを祈る、件の一人忽ふ倒れ臥し、しばらくして蘇生す、是疫鬼を掃ふ法、僧達ハ寺僧の外下輩なるものといふ、【縁起】招提寺鑑禎和尚、宝亀中ふ居をこゝふトス、雌雄の大蛇あり、鑑禎持念て一蛇忽ち死す、禎一蛇ふ謂て曰此山水乏し、水を施すべしと、蛇誓ひて去、俄ふして清泉涌出ス、今の閼伽井是也【寺説】竹切の事、具ふハ蓮花會といふ、是中興開山峯延和尚、咒法を以て蛇を斬るの遺意ふして、峯延の遠忌會あり、夜の護法ハ開山鑑禎和尚の一蛇を救ひ護法神となせし遺意なりと云、

雲の峯

【杜詩】奇峯突兀

火雲昇ル【陶潜詩】夏雲多奇峯【夫木】六月ふありぬとくえて大空ふあやしき峯の雲のいろかな、衣笠内大臣、

薫衣香 ゝの部掛香の条にみるべし

葛水 【大和本草】葛の粉、夏月冷水ニ入ゝきたてゝ飲む、よく渇を解胃と傷らん功尤多し、

葛の花 蘓頌曰葛ハ春苗を生し藤を引蔓一二丈【和漢三才圖會】花豆の花ふ似て大きく、實かまゝ黄色豆の莢の如し、

海月取 【崔禹錫食經】海月ハ一名水母貌ち月の海中ふ在ゟ似たり故ふ名く、云ゝ【滑稽雑談】泥海ふ生む故ふ備前筑前ホより、多く此月取て擲の葉と多く割て、海月の肉と包み、塩と用ひず、只葉と以て淹藏さる也、

霍亂 【傷寒論集成正】珍云夫霍乱の病ハ夏月暑時、飲食過度の致も所、胃中撹乱上吐し下瀉さる者是也、霍と矐と古字通用、説文ニ云矐ハ肉羹也、大氏人の食の爲ふ傷らる所、肉食居多、故ニ特矐さし擧て一應食物と統る也、凡人其嗜欲さる所皆これと乱といふ、○青藍云、俳諧歳時記ふ、先板の諸抄香需散霍乱ホと六月の季に出さるといへども、あへて風流ふ益なきとむ、今こゝとのせずといへども、愚按さるふ先板の諸抄これを出せるハ、皆附句去嫌ひの用ふれむあり、【炭俵集】

（附句）息吹ゝへも霍乱の針、　其角

や

四月

山科祭 （上巳）○社ハ勧修寺の南の境内、往還路傍れ水の辺ふあるを祭る所、醍醐帝の外祖宮路氏夫婦の霊神ふして、勧修寺家の祖なり、寛平十年より祭はじまりて、官幣ありしが今絶て只神饌と供さるのミ、今土人宮路氏の社と八幡の社と合せて本居神として九月廿七日これを祭る、是と勧修寺祭といふ、今の世ふ山科祭といふハ、北山科諸羽明神祭なり、九月九日祭礼あり、神体ハ大己貴大王の二神ふして、本朝補翼の神也、

八瀬祭 （上子辰）○八王子天満宮両社の祭なり、天満宮の宮ハ愛宕郡矢脊の里ふあり、八王子の社ハ天満宮の巽二町ばかりの山腹ふあり、傳へいふ、菅家少年の時、比叡山法性坊の室ふ入さく學文をその往来休息の處ふ、後人社と建、土人祭の日大竹と切て、その枝ふ五色の扇挑灯ホと釣り提て、囃しながら持ありくなり、其唱哥俚語方言と以て、一興あつて、

矢沓一村九百軒ばかり、父老或ハ上ゐる人をのぞくの外ハ、又吾をさしてげらといふ、此俚諺も亦他ふ出ざるものゝ、

山崎日の使

三日 名勝志 八幡宮寺中讃岐ふ云日の使、四月三日、是一郷万代の勤役なり、晩陰ふ及て日の使あり、相列りて山崎山崎より辨備もし云ゝ

の孤村より来る、儀式京洛の大臣ゟ同じ、主人冠より紫藤とうけ、舞男の巾子ふ纓を挿む、彼ふ馬ふ騎ながら、二度神庭を廻ゝて、下馬せしめ、一面ふ御殿ふ相對し、再拝して衣の神と刷ろふ、神事記 日の使ハ八幡宮才一の神事也、治承三年まで猶勅使の義あり、同四年兵乱ふよりて退轉せ、荷賣尾座關戸の院勅裁と申下し、在地の神人これを勤む、かゝる間交野の土民、御先の役より弥陀寺と号、白杖を捧て鳥羽木津より出る者、年頭馬長あり、神巫舞人、次第司、藏人司先行をし、色掌人笛を吹、鼓をうつ、又細男といふ二ッの人形あり、これを武内高良の神といふとぞ、此祭も今絶たるふや、○明月記ふ建仁二年四月三日、山崎の民家悉く經営をし、毎年祭礼あり、その道ふ橋を渡せて、播磨大路より八幡ふ参るを見えたるは、往昔此祭ふ山崎より八幡の山下まで大河ふ橋を渡せとぞ、今の橋本其遺跡あり、此使を勤るを日の頭と称し、其人を日の長者と云、一郷の上首とせ、其裔を長者衆と云、究めて豪富の輩なるべし

山崎祭

八日 雍州府志 山城国離宮八幡の傍ふあり、祭る所大山祇の命也、延喜式 山城国酒解の神社一座、注ニ云亦山崎の神と号、同書 山城国と摂津国との境ふ疫神を祭ると云ゝ、此社ハ、山州名跡志 天神八王神の社、大山崎北の山ふありて、祭る所素盞烏の命の御子八王子、今土人本居神ともいふ、○俳諧歳時記 今日此使ふ童使といふことあり、今式ふ日の使の所ふ記ハ誤也、明月記ニ云建仁二年四月八日午剋、水無瀬殿ふ参上、未の剋出御、この辺の辻祭二社（天王社 酒解社）御前を渡さるゝ、その中一方顛する田楽ふの供奉副ふ土民ふ此事を営むと云、こゝをもて思ふへやふ、土人山崎の神と、武塔天神（牛頭天皇）とを合して祭るなれり、

矢數

洛東三十三間堂蓮華王院といふいわしへの得長寿院の辺ゝ同所の池の中杜若を観壯とせし、凡此所の矢數毎年四五月永日のうち、晴天を候ひておす、射人堂前ふ居て、今日の昏より翌日の暮ふ至て、通せし所の矢數他ふ超過れ

ると天下一とせ、

山苣の花

［和漢三才図會］賣子木今知佐の木といふ處々山中にあり高さ丈二三大徑一二尺皮黝青白色老るときハ浅褐色中心白く其葉梅嫌木の葉に似より長く尖りて二寸ばかり面青く背淡し冬凋ミ春生き三四月花をひらく砕にして小く白く單瓣あり野梅の花に似より朶稍長く垂る大朶を作さず但し毎二三攢生のミ實を結ぶ状小連子の如し初め青く後黒し堅くして肉白色、［滑稽雑談］此葉菜類の苣に似たれバ名くといへりと云く［新撰六帖］我ごとく人めまれなるらふおもふらし白雲ふかき山ちさの花、

藪椿

［蘇頌］［圖經］

女貞山海經ニ云、泰山ニ貞木多しといふ是なり其葉拘骨及冬青に似て冬を凌ぎて凋まず五月細花を開く青白色九月實なる［倭名抄］女貞（和名太豆乃木又比女都波木）［和漢三才圖會］女貞木の葉海石榴に似て鋸齒なし故ニ姫海石榴と名くと云く俗に是を藪椿といふ然るに野椿の藪に咲かくまして初夏の頃花あるなれどいふならんといへる［きくやせう］の説ハ、こゝろし

［兼三夏物］

魚簗

魚簗とむかりへで夏なす、上り簗を春とし下り簗

と秋として、さらぎども連句にて其季に連る時ハ上下の断りに及ぎ三季に用ふと貞享式にいへり、

［五月］

山田の御田扇

廿八日、是ハ伊勢山田太神宮の御田植あり、［今式］太神宮の宝前にて神事修行の扇あり是を御田扇といふ是を以て田を扇ぐ風情をなし虫を生ずる患なしといふ産婦も又この扇を求て相向ふ所の柱にかくれば極て産安しとぞ是虫の障なきといふなるべし○五月廿八日といへども日定らず下旬に日をえらみて是を行ふ當日禰宜數輩御子羅子これを勤む神田ハ高倉山とて俗に天の岩戸といふ所の東の麓豊宮崎にあり件の人々此所に至り御子羅子早苗を植るまねびをなして神人祓を修て太神宮の一の鳥居にて神楽唄をうたひ笛太鼓にて舞ふ長官ハ乗輿禰宜ハ騎馬御子羅子ハ擁樹にて高倉山をすぎて鳥居の所に至る素袍を着る者長さ六尺ばかりの大扇を捧て、参詣の婦人に戴かしむ又一説に丸山といふ所の土人六人女の形となり伊達染の帷子を着赤き襷をかけ烏帽子をいたゞき黒塗の棒をふり廻し扇にてあふぎまはる内宮外宮

とかふ同じ、ちゝもとゝも山田の名せふ高し、其扇を摸して奉詣の諸人ふ與ふ、内宮ハ七本骨、外宮ハ六本骨あり、稲を負さる馬の画、鯛を釣る人形の画、或ハ鶴亀ホと画きあるものあり、是を長官宅ふて其日の朝與るとし、

藥草摘くの部藥日の条ふ出、

大和撫子なの部撫子の条ふ註、

楊梅時珍曰楊梅その形楊子の如くして、味ハ梅ふ似たり、故ふ名く、實を結ふ楮の實の如し、五月熟して、紅白紫あり、紅ハ白に勝れり、紫ハ紅ふ勝る、や、顆大ふして核細かなりとし、

魚簗打石を堰木を障へて魚の往来を通るかの之、より簗の条ふ委し、

ま

四月 **松尾祭**（上酉）［神社啓蒙］

松尾の社ハ山城の国葛野郡ふあり、王都西南を去ること二里余、祭る所の神大山咋神、［廿二社註式］市杵島姫也云々［公事根源］乱世以来上ノ酉ノ日云々、祭式江次第ふ出たり、此祭日吉の神事の如く、葵かづらを掛、仁明帝承和四年始て祭るといふ、［紀事］神輿七基其内一社、毎年白木を以て新造をこしらへ是を武御輿といふ、祭日神幸畢て後、桂川の東ふ捨以呈日児童再び此神輿を舁ありして後これを砕き破る、その木片を取て厠ふ挿む、疫疾をさくるの咒なりといふ、武御輿民間ふ子ボレ比宮と称ふるところハ今日再ひ遊行も猶ゆはまでるが如し、神輿七基ハ月讀の社、櫟谷の社、三の宮ハ宗像の社、衣手の社、四大神、御旅所ハ七条朱雀西ニ在、

當宗祭（上ノ酉）

○河内国志紀郡當宗の社ハ仁和四年四月始て勧請之［公事根源］午の日使をりて杜本當宗ハ程近き故ふ一人の使両社の祭のくるめふ下向まて、宇多御門の御外祖父を當宗氏なるふよりて仁和五年四月十四日、祭りそめ行ける［姓氏録］當宗忌寸ハ後漢の獻帝より出四世の孫山陽公の後なりと云々、

松前渡南部津輕ふの商人産物交易の為ふ蝦夷松前へ渡るといふ、北海ハ冬春の間ハ寒氣強く、波涛荒かるらん故ふ四月ゟはじめて出岸し九月を限りて歸國す、依てわさゝを夏とし、止まるを秋とし、

天蓼［和漢三才圖會］藤天蓼、按るふ山中ふあり、今人家ふても之を植、其葉ハ蒼黒く、梢及び櫻桃の葉ふ似て皺あり、三四月小白花を開く、狀梅花ふ

似て小さし實を結ぶ但し雌雄あり人その嫩葉を取て醋味噌ふ合和てゑまこと食ふ猶常ふ茹べく食ふ

祭（かの部神祭の所ふ詳を）

五月　松本祭

朔日〔淡海志〕江州大津

松本村ふ神社あり人祭所の神ハ平野大明神也人皇十七代仁徳天皇の廟あり難波の平野と移し奉るといふ本宮ハ往昔六七丁南の山狐谷ふありしとか慶長中今の所ふ移をて神輿一基あり今の傍ふ精大明神と並祭る

豉蟲

〔まくりむし〕團く扁き黒き虫豆ゟとあり水上ニ浮旋して止まらず筑紫ふて カイモチカキ 江東の俗ゴマイリといふ抜るふ是獨楽まはしの訛言なり人脊純黒く腹ハ淡赤し関東ふて 水スマシ又サウトメといふ是之然るふ得て水をすましハ水馬之と思へる輩多し去ル句合ふ水馬の題ふて藻の花と休ミ野や水すましとあるあり是之件の取ちかへなくいふ

菰苅

〔蘓頌〕水中ふ生ず葉ハ蒲葦の華の如し刈て馬ふ秣せば肥春の末白茅を生ず筍の如し即菰菜也八月花を開く草の如し子を結ぶ粟ふ合して炊して食ふ

菽植

〔廣韻〕大豆ハ菽ゝ小豆ハ荅ゝ〔和漢三才圖会〕大豆ハ大抵夏至の十日以前種と下を諺ふ夏至の烏脚といふハ既ふ生出る形烏脚の如くなれバなり七月花をひらき九月莢を結び十月ごろを取む

六月　蠓

〔和漢三才圖会〕蠛蠓一名醯雞列子ふ朽壌の上ふ生ゞ雨ふ因て生じ陽を覩て死を爾雅注ふ飛て碓ひくごとき風ふく舂つくときハ雨ふるといふころハ風吹んとするときハ旋て飛て碓ひくが如し一ツハ上り一ツハ下て舂つくが如きときハ雨ふると云く形蠅ふ似て小く翅身皆灰色背窄く其大さ一分ふ過ず

甜瓜

時珍曰甜瓜の味諸瓜より甜し故ふ甛り甘甜の称を得たり〇王禎曰二三月種を下し五六月花ひらき六七月瓜熟す〇美濃國本巣郡真桑村より出る甜瓜の擢[illegible]ふ真桑瓜と名く

け

四月　罌粟の花

時珍曰一名象穀一名米囊一名御米其實の形罌子の如し其米粟の如し乃ち穀ふ象て供御とすべし故ふ諸名あり秋種冬生嫩苗蔬ふなして食ふ甚佳し葉白苣の如く三四月薹を抽で青苞を結ぶ花ひらくときハ

苞脱て花四瓣大さ猪盞の如し蕊は花中にありて黄紫これを裹む花開て三日即ち謝て蕊莖の頭にありて長さ一二寸大さ馬兜鈴の如し上に蓋あり下に蕚あつて宛然として酒器の如し中に白米のごとく極めて細し其花變態常にあらず白き者紅の者粉紅の者杏黄の者半紅の者半白の者故に麗春といひ賽牡丹といふ又錦被花といふ、

蕙

白及

【和漢三才図会】蕙蘭（紫蕙黄蕙、即紫蘭、）紫蘭叢莖と立て、葉を生ず秋蘭に似て潤く薄し色淡青にして紋理ありて三四月茎の端に白花をひらく香あし又黄紫の二種ありと云〇按ずるに和俗蕙と称るものは白及の類にて葉大小ありて山中に生るものは白花黄花あつて又盆に植て愛するものに黄蕙星蕙あり此根菱の如く稜あり蜀本艸曰白及の属にや白及三四月に薹を抽出て紫花を開く冬凋む根菱に似て三角あり白色角頭に芽を生ずと云和俗は紫蘭と称るものゝ根菱に似たるものにし黄蕙星蕙は蜀本草の説の如し、

【兼三夏物】

夏籠、夏行

安居

佛者四月十六日より七月十六日に至て九旬の間禁足安居

既にこれを結夏といひ既に終るを解夏といふ又七月十六日より千月十六日に至るを自恣といふ【釈氏要覧】南山鈔云偏に夏月約りにするは一には無事遊行は出世の業を修するを妨ぐ二には物の命を損ずを慈に違くこと實に深し三には所為既に非故に世の謗を招くと云【五雑俎】四月十五日より天下の僧尼禅刹に就て掛搭すことを結夏といひ又これを結制といふ蓋し長養の辰に方て外に出ては恐らくは草木虫蟻を傷らん故に九十日安居禁足あり七月十五日に至て始て盡く散し去これを解夏といふ西域記に十六日に作と是とされて結夏十六日を以て始とするは印度の法なり中国は月の晦を以て一月とす天竺は月の満るを以て一月とす則中国の十六日乃ち印度の朔日也〇安居【釈氏要覧】南山鈔に云形心静攝と安といひ要期こゝに任ずると居といふ云々

夏斷、夏書、夏經、夏花、

夏行は安居也安居は出家修行の暇を得て私に住せて、故に安居の間他の化益を専らに勤て三界萬霊に回向等するに一夏九旬とは十日を旬とし九十日あるが故に九旬

といふ在家を志ある輩ハ夏を修し九旬の間飲酒魚肉を断ことを夏断といふ、經文を讀誦するを夏經といふ、これを書写するを夏書といふ、先祖の聖霊有縁無縁の菩提の為にする也云云、

五月

削懸の甲 【蔓纈輪】けづりかけハ柳を以てこれを作る、元日祇園の削掛も標格として甲のかさしとして是邪気を祓ふ神咒なりとぞ云云の部飾甲の条を見合すべし、

競渡 鳧車 水馬 【月令廣義】楚傳ニ曰競渡ハ越王句践に起る。【歳時記】五月五日の競渡ハ屈原を拯んとするを以也、後世遂に戯とする、【荊楚歳時記】屈原この日を以て汨羅に死ス人舟を以てこれを拯ふ今の競渡ハこれ其遺俗也、南方競渡のとき、其舟を治めて軽利ならしむこれを飛鳧といふ又水車といふ州将父老士人悉く水に臨ミてこれを見る蓋越人舟を以て車とし檝を以て馬とす、故に鳧車水馬の名あり【和漢三才圖会】唐人来て長崎に寓居して此日に逢ときハ數艘の小舟に乗旗幟を立て先を争ひ排龍々々と喚きいふ速なるものを以て勝とす是競渡なり、蓋屈原の為に龍を逐ふの意なり、

梟羹 梟炙 【漢史】五月五日梟の羹を作て百官に賜ふ其悪鳥なる故に五月五日これを食ふ古ハ梟の羹梟の炙を重ねて蓋其族類を滅せんと欲也、

獸狩 ねの部鵔狩の条に出、

六月

解齋御粥 【江次才】六月十二月十一日後暁十二月中ノ卯後暁【公事根源】神今食の次のあしたげさいの御かゆまゐる、御座の大床子にて臺盤一脚をたてゝ供ス、あさきかはらけにかゆる、和布の御汁をそへ三口食て御箸をとゝむ云云 神今食はてゝ後齋あるハ中ころのことなり、解齋の御かゆなどを供して八神齋あるへうもなきとあり、

毛蟲 陳藏器曰毛虫繭を作る、形甕の如し故に小雀甕と名く、好て果樹の上にあり、大小とも小蠶の如し、身面背上五色の斑毛あり毒ありてよく人を刺螫、老んと欲るもの口中より白汁を吐凝聚て硬く正に小雀の卵の如し、其蟲甕を以て繭とし中にありて蛹を成も蠶の繭あるが如し夏月羽化し出て蛾となる、子を葉の間に放ち蠶子の如し、

削氷 【枕草紙】あてなるもの、けづりひの

ゐまつしに入ておさらしきかまゐまりに入る云〻

○氷室の水をけづりくだきたるをいふなりて、

【月】

佛生會 八日 （浴佛 灌佛 龍華会 花御堂 甘水 佛の産湯 五香水）

○凡諸寺院灌佛会を修す、諸品の花を以て小堂を飾る、是を花御堂といふ其内に小き釈迦の像を安置し甘草ホの香水を灌ぐ是を甘茶と云【事文類聚佛運統記】周の昭王二十四年甲寅四月八日中天竺国、浄飯王の妃摩耶氏太子悉達多を生云云【浴佛功德經】清浄慧菩薩、佛に白して言く世尊若佛在世及ひ滅渡未来世の中、諸の衆生云何ぞ佛を浴せん、佛言く我汝が為に浴佛の法を説ん、諸の供養の中、最殊勝とす、衆の香湯を為り浄器の中に置き、先方壇を作りて、妙牀座を敷き、上に佛を置き、諸の香湯を以て、次第にこれを浴し、香水を用ひ畢て復浄水を以て、其像を淋洗し、人各洗像の水を少しづゝ取て、自らの頭上に置く、初像上に水を淋ぐの時に、此偈を誦して云、我今諸の如来を灌浴ス浄智功徳荘厳五濁の衆生垢を離しめて願くハ如来の浄法身を證せん云云○龍華会【弥勒下生成仏経】時に菩提樹あつて、名て龍華といふ慈氏（弥勒翻して慈氏といふ）大悲尊下において正覚を成ト云云是ハ龍華樹といふ木の下にて弥勒始て正覚をさとり給ひ、此處に三度説法の会あり、是を龍華の三会といふなり、四月八日ハ釈迦降誕の日なれバ、釈尊を浴し奉り、当来弥勒に逢奉る結縁ともなれバ、四月八日とせくに龍華会といふなるべし、

深見草 牡丹の異名【和名】**富貴艸**【抄】和名布加美艸、【周茂叔愛蓮説】牡丹花富貴者也【書言故事】多く富貴の家、彫欄丹檻の中にあり故に花富貴なる者といふ、

不如歸 ほとゝぎすをいふ、【格物論】啼き苦むときハ、樹に懸りて、謝豹思歸楽とよぶ、その音不如歸と云、

蕗【崔禹錫食経】蕗葵に似て圓く廣く其莖啖ふべし、

【兼三夏】

【物】**風爐茶**【茶湯秘傳抄】四月朔日ハ更衣してこのころづ夏ちまへ入たる日之、三月まで囲爐裏の茶を服し爐をふさぎ、けふより風爐を立て茶を煎る、數寄屋の窻障子などを簾にかへ、よろづ涼しくなして、

客ともてなすと惣じて風爐の茶ハ朝茶湯多くし適ちハ晝となるもあり、風爐ハ奈良風爐を多く用ゆるなり

毛吹草 常の俗猶四月より九月まで用ふ

蚋

和漢三才図会 蚋子 蚋蠓子 俗ふいふ布止、夏月山谷中ふあり、蚊ふ似て小く、脚をまた黒色、晝多く出て人を螫腫痛むこと最烈し

蚊子木、蚊母草、蚊母鳥

五雜組 嶺南ふ蚊子木あり、葉冬青の如く、實枇杷の如し、熟するときハ蚊いづ、塞北ふ蚊母草あり、葉の中ふ血虫ありて化して蚊となる、江東ふ蚊母鳥あり、蚊を吐こと一二升と云

滑稽雜談 和俗蚊母鳥と呼ていふ鳥といふ今聞ふ都々都々と啼ものあり、

海蘿干

和漢三才図会 鹿角菜（和名豆乃末太）本草ふ東南の海中石崖の間ふ三四寸鐵線の如く、鹿角の狀の如し、紫黃色、土人采て曝し、貨海錯とし、水を以て洗ひ、醋ふ拌ませれハ、脹起して新しきものゝ如し、味極て滑かふ美也、若久しく浸してときハ化して膠の狀の如し、女人以て髮を梳るふ粘ありて乱れずと云々

五月

鳧車

けの部競渡の条ふ出、

粉團を射

天宝遺事 唐の宮中端午ごとふ粉團角黍を作りて金盤中ふ釘そて、纖妙愛すべし、乃ち小角弓を以て是を射る、粉團ふあたるものハ食ふことを得、蓋粉團滑膩ふして射がたし、都中盛ふ此戲とふも、

歳時雜書 端午ふ水團を造る、又白團と名く、或ハ五色の人獸花果の狀を雜へ、最精しきものハ滴粉團と名く、或ハ麝香を加ふ、又乾團水ふ入ざる者あり、

藤の森祭

五日 神社啓蒙 山城の國紀伊郡、深草山の南ふあり、祭る所舍人親王、〇延喜式ふ載る所の眞幡寸の神社二座是也、（別雷神 旗壽神）後ふ三所の皇子を合せ祭る、三所の皇子とハ早良親王、伊豫親王、井上親王又祭る所三座、舍人親王、早良親王、伊豫親王 紀事 是日神輿三基遊行、社家藤野井氏甲冑を着し馬ふ乘て供奉す、帰路おの〳〵稲荷の社樓門の西並ニ藤の杜の馬場ふ於て走馬をし祈願ある所の人あまたハならずとも又おの〳〵甲冑を着し馬ふ乘て馳騁すること前ふ同じ、一説ふ藤の杜ハ早良親王ニして、故ふ弓矢神と称ふ、今日供奉の人、甲冑を着すること是蒙古

征伐早良親王歸陣の捷ひ之、供奉甲冑を着なるて此神事に始る、

冨士垢離

紀事 五月廿五日より六月二日に至て、冨士の行人毎日河辺に出て、垢離をなし、冨士權現を遥拜す、是冨士參詣におなじといふ、その間男女行人をとらのゝ病を祈福を索む、行人そのもとにむる処の紙符を願主にさづく、又祈願の人みづから行人に交りて垢離を修す、酋長を先達と称す、其会する処を冨士小屋と称す、

藤撫子

なの部撫子の条に出、

六月

冨士詣

紀事 六月朔日より廿日に至りて、諸国の民人冨士山に攀登る、凡冨士山に登る四道あり、駿遠豆甲是なり、山に登るもの其方角によりて、その便に随ふ、その麓の領主多く人力の及ぶ所ハ坂路を修せしむ、四道の麓行人止宿の家あり、これを坊といふ、山伏先達たり、参詣の人々を饗導して登山せしむ、日午坊を出て、その夜明るに及で山上に至る、凡行程八九里、山腹三四の間大木森蔚として、これより上樹木なし、晝ハ登るに堪ず、故に半夜に入て登る、土人坂路中間の岩窟に小屋を構へ、これを篠小屋といふ、もし風烈しき時ハしばらく此室に入、屋上雪水を以て茶を煎じ、これを鬻ぐ、山上所々に吴地吴社あり、絶頂に池あり、周二里余、池の中常に烟あり、これ塩硝硫黄の氣なるなるべし、登るもの此池をめぐる、若風雨に逢ふときハ巡ることあたハず、攀躋を得ると冨士山上といふ、今略して山上といふ、又或ハ禅定といふ、後世菩提を祈るを以て、かくいふといへり、その人を行人或ハ道者といふ、はじめ登る処の坂路の外、別に沙石の道ありて、帰るときハこの坂より下る、行人脚底に草鞋を縦横にして穿つ、かくの如くせざるときハ足のいたみに堪ずとぞ、かくして沙石に乗じ下るを八九里の間二時ばかりにして麓に至る、近世山の腰を巡る者あり、これを横行道といふ、又横出山上と称す、その行程攀躋に比すれバ、道ハ倍にして且険岨堪難いふべからず、これを苦行といふ、凡山上七月以後既に雪ありて登ることかたし、故に諸方より来るもの、この六月を以て限とせり、○一説に冨士山ハ人皇七代孝霊天皇五年、淡海國の地折て湖となり、時に冨士山出現す、故に近江の國人冨士を以て吾國の土とせしことありて近江の人

垢離に及ばず、他邦より来るものも、近江の土砂を携へて、山上に登るとぞ。近江の人に准じて平安を得るといふ。縁記 延暦二十四年託して曰、我を浅間大神と号すべしと、平城天皇大銅元年社を立て是を祭る。本地大日如来云云 神社啓蒙 浅間の社は駿河國不盡郡にあり。一宮記 冨士權現と号す。大山祇女木花開耶姫なりと云云

腐草為螢

月令 季夏腐草為螢云云 註云、暑湿の氣を得るが故に変じて螢となると云云

舟遊

暑を避ん為に此遊びをなせり、江戸大坂の者、妓女及酒肉を携へ日午より舟を浮べ、暁に帰る。其興最甚し。

風蘭

潛確類書 一名桂蘭、名花譜曰、小にして蘭に似たり、枝幹短くして勁し。砂土を用ひず、竹の籃に盛て之を貯へ、露ある処に懸て朝夕水を洒ぐと云。此物山石の傍に生ず。取来て椶櫚の皮を以てこれを包み、これを樹下及び簷の下に掛く。風を好て茂盛す。故に風蘭と名く。花葉蘭に似て較横に垂る。五六月花を開く。微香あり。

振舞水

夏日市井の間に瓶をわざして、これに柄杓及び茶碗など添、往還炎暑に苦しむ人に施してこれを飲しむ、是を振舞水といふ。五元集 きぬ〴〵や宿を出れば振舞水の下向道　其角

之

四月

更衣

公事根源 けふハ衣がへなれば、宮中所々の御装束掃部寮あらため、御殿のかざりびら表生絹に胡粉にて繪をかく、壁代も撤せ御畳あどもあらためしきを敷まふ。御服ハ御直衣御そうしのあやの御ひとへ、御張袴、内藏寮より奉る。女房のきぬ、袷のきぬとも、衣がへのひとへから衣きぬし、裳ハ上﨟、薄裳小上﨟、薄色常の如し、

氷を供

延喜式 主水式云、凡御氷を供ずるハ、四月一日に起て九月三十日に盡云云 氷を貢ぐ處々、同書云、山城國葛野郡、徳岡の氷室、愛宕郡小野の氷室、栗栖野の氷室、土坂の氷室、堅木原の氷室、同郡石前の氷室、大和國山の辺の郡都介の氷室、河内国讃良郡讃良の氷室、近江國志賀郡部花の氷室、丹波国桑田郡池辺の氷室、此十ヶ所なり云云

江州八幡祭

中ノ卯

神社啓蒙 法華ヶ峯八幡宮ハ淡海国蒲生郡八幡村に祭る所の神、石清水に同じ、社説 一条院の御宇勧請

長徳二年放生会を行はる【寺説】慶長年中、関白秀次公、この法花ヶ峯に城郭を構ふる時、上の宮を移し下の宮に合せ祭る、其後

御當家御陣所となる、其時今の杉山に移さるゝ、別當願成就寺、往古聖徳太子開基の寺院、江州に四十八ヶ所あり、其四十八の終りに此寺を建給ふ、故に願成就寺の名あり、神社の傍にありし普門院といふ、成就寺兼帯之、いにしへ八坊舎五十五ヶ寺ありしが、織田信長の兵火にかゝりて悉く滅亡して、氏子もわづか十二ヶ村、外に新郷とて、舟木上田林の二ヶ村を加ふ、例祭四月中の卯、夜宮に躍あり、上の宮祭両日下の宮祭両日、その中間一日を御旅祭といふ、花表と楼門との間に於て凡十三囲の炬火を立、高さ六七間ばかり、七度半の使を合図に炬火に火を點じ、村々の祭太鼓にも、一二囲の炬火を點じ、三社の児三人を拝殿に座せしめ、この児をいさめの太鼓とて拝殿の辺にて拍子躍あり、エイくサヽヲキヤウと拍子【紀事】八幡祭の神輿五基、越智川を渡る、

五香水 ふの部佛生会の条に出、

高野花供 廿一日 【元亨釈書】弘仁年中紀州に遊びて勝地を相る、高野山に登りて金剛峯寺を創む（紀伊国伊都郡高野の峯において入定の所と名づく表性灵集に見えたり、）又曰【釈観賢】（醍醐寺の座主職）聖宝の上足なり、延喜二十一年、醍醐帝の夢中に弘法大師奏して曰、我衣弊まさに朽ぬる、願くは黍くせんと、こゝをによりて釈法の徒尤き者に勅して、紫衣一襲を野山に送る、観賢選に中りて山に入り、入定の扉を啓くに、雲霧隔るが如くにして儀容を看ず、観賢礼して曰、少年より道を修し梵行玷なし、況て遺法を奉じ、歳月を累ぬるにおいてをやと、黙許まさると、須臾にして真儀漸く見はる、霧斂りて月の彰るゝが如し、観賢頂礼して仰ぎ瞻るに鬢髪甚だ長ず、便ち剃り落して衣を換るに、諸衆さらに見るとあたはず、後世疑謗致さんとて観賢定議して石を重し固く封ず〇今高野山宝亀院の住持代々此事を預るゆゑ、さ色の御衣を奉る、是を花供と云、金堂にて学侶方の僧藥師会を行ひ、花を供ずるの日と、大師の御衣をとりかゆる日と、同日のゆゑなるべし、

駒牽 【公事根源】是ハ四月に侍るなり、八月も名ハ同じけれど心ハかはれり、天皇武德殿に幸ましまして王卿以下床子につく、左右の御監御馬の奏

と稱る、馬の頭庭に渡り御馬を引渡も、白馬の節会の如し、近衛兵衛の射手南にやてり、四府騎射の文を奏、左右の大将これを奏聞も、近衛少将以下番長以上六人東遊ひを奏も、右近衛納曽利狛犬を奏も、雅楽蘇芳菲駒形を奏す、この駒牽ハ来月の騎射の馬、射手人ホと御覧ぜらるゝなり、貞観の頃よりさためらるゝ小の月の時ハ二十七日、大の月の時ハ二十八日に行はるゝ云々

木下闇 茂林して暗きをいふ、万葉集、木の晩とよめり、木晩の暮闇有尓霍公鳥何処乎家登鳴渡良之

柑類の花 柚、金柑、蜜柑をさして其頭假字の部にて見るべし、

鮖 [和名抄]（鮖和名伊師布之）[崔禹錫食經]鮖魚性伏沈して石間に在ものゝ、[遊覧志]石首魚毎歳四月海洋より来る、数里を綿亘して其声雷の如し、海人竹筒を以て水底を探りて其声を聞、乃網を下し流を截てこれを取る云々

戀し鳥 ほとゝぎすの異名也、[拾遺]伊勢の御うた 奉つれるみ子のなくなりて、又の年ほとゝぎすを聞て、「しての山こえてきつらんほとゝぎす恋しき人のうへかた

らなん」此哥より恋し鳥と異名せしなるべし、

五月

五綵絲 ちの部長命縷の条に出、

今年竹 ‖若竹 時珍曰上中の包箨各時を以て出、旬日籜をおとして竹となると云々、是即チ‖今年竹若竹なり、六十年に一たひ花咲實を結ぶ、其竹則枯るゝを箹といひ、竹實を結ぶを篗といふ、小なるを篠といひ、大なるを簜といふなり、

莓の花 [本草綱目]地衣草 大明日華本艸曰 此乃陰濕の地日に晒さずして起る苔蘚也、○石蕊時珍曰其狀花蕊の如し、○玉柏[弘陶別録]石上に生ス、松の如し、高さ五六寸、花紫なり、○桑花[日華本艸]桑の樹の上に生する白鮮也、地銭花の如し、○本邦にも亦屋上庭園石上樹上に多く苔を生す、五月淋雨降時毎に繁茂して花の状の如きものを生ず、倭名これを苔の花といふ、

胡麻蒔 [和漢三才圖会]胡广三色ありとかに夏至半夏生の交ひに種を下し、六月花を開く、七月實熟して、最早晩の二種あり、

六月

氷餅祝 [毛吹草]勝尾寺の氷餅

滑稽雑談和俗今日一日に至て権曝雪水に製しさる粉餅或ハ勝尾或ハ冨士山ゟり出る氷餅ホを祝ひ食して、今日と呼て氷室の節句ともいへど禁裏堂上にハ承らず、

御躰の御卜 十日

江次第御躰の御卜、六月十二月十日、此日官奏あるをもて、弘仁式神祇官中臣卜部ホを率て六月十二月一日齋どもしめてトふ、九日トひ畢て十日これを奏す、公事根源神祇官の官人一日より本官にこもりて是をトふ、上卿をふまわりて内侍につきて奏聞もし、是ハ主上の玉躰に御つゝしみあらんことをうらなひ奏せらる義なり、白鳳四年にはしめておこなはる、

黄雀風 五雑組六月中の東南の風あるぞ是を黄雀風といふ、

極暑 梁元帝詩云季夏煩暑流金爍石、

香薷散 時珍曰香薷ハ夏月解表の薬、冬月の麻黄と用ゆるが如し、氣虚の者尤多く服すべからず、今ノ人香薷の元氣を傷ることをしらず、有病無病に拘らず概用て薬に代て謂らく、よく服して暑を避くと云云○五元集香薷散犬がねぶりて雲の峯、其角

香薷 宗奭曰圃と作りて香薷を種、暑月蔬菜とし、葉ハ茵蔯に似たり、花紫わして辺に連りて穂をなす、

心太 ところてんあり、との部見るべし、

江

四月

えびす薬、えびす草 芍薬の異名なり、御傘梶原性善が万安方ホとらるに、えびす薬と名付たりと云云（えびす草ハえびすくすりの誤なるべし）和名抄芍薬（和名衣美須久須利）

烏帽子魚 豆相の海辺、鰹先寄らんとするときに、一物流れ来る、大さ二尺ばかり、形烏帽子に似て、左右に紐の如き物ありて其色瑠璃紺にして光澤あり、是を鰹のゑぼうしといふ、漁者この物の漂流するを期として海上に櫓を構へ、鰹の寄るを見る、是を鰹見といふ、両三日すぎて果して大小鰹を獲ることぞ、烏帽子魚と名ることなりによれり、

蚕簿 和漢三才図会蚕笛和名衣比良、槌ハ蚕簿を架する柱なり、蚕簿ハ

兼名苑云蚕を養ふ器也、其上に施し蔟と作らしむる者也、**枝蛙** あの部雨蛙の条にみるべし、

五月 **豌豆** 和漢三才圖会 花辮蛾の如し、形外白く内に淡紫あり、中心黒色其實褐色（六月是を収め取る）

六月 **江戸浅間祭** 朔日○江戸浅間の社は浅草砂利場の後にありて是を浅草の富士と云、又駒込にも浅間の社あり、又本所六ツ目及高田の馬場又鉄炮洲にも同社あり祭る所いづれも駿河におなじ、今日麦藁にて龍蛇を作て、是を篠につけて鬻くもの多し、参詣の人是を買ひて土産とす、

江戸天王祭 相傳ふ元禄のはじめ大に流疫ありて官に請奉りて神田明神の社地に勧請ある處の、祇園三社の神輿を出して街に渡御し奉ること、より後、毎年、祇園会と修す、先大傳馬町御旅所、神輿一基五日出輿八日還輿、小舩町御旅所、神輿一基十日出輿十二日還輿、南傳馬町御旅所神輿一基七日出輿十四日還輿あり、いづれも神輿還幸の時その町々を渡御、社人裝束馬上にしく、供奉、鉾三本氏子是に随ふ、神輿渡御の町々は一日廃務也、或は門に竹を植る家あり是忌竹の意なるべし、其外浅草御蔵前、千住、品川、四ッ谷等にも此祭あり中にも品川の神輿は海汀を渡御す、天王祭とは牛頭天王の祭といふ義、祇園会といはずして、天王祭といふは江戸の俗の方言なり、

江戸山王祭 十五日

○神社江戸永田馬場にあり、祭る所近江日吉の神と同じ、別当勧理院僧正、神主樹下采女正、その外社家数多あり、公官より神領六百石を附せらる、當社いにしへは入間郡川越仙波といふ所にありしその地仙芸上人の住せし古跡なりしを、慈覚大師草創ありて、星野山無量寺と号し、天台の宗地として山王を勧請あるその後尊海僧正中興し、三千余院甍をならべたり、人皇百三代後花園院長禄三年、太田道灌江戸の城を築くの後文明年中、仙波村星野山の山王を勧請して江戸の城護神とまつる、その地今の紅葉山なりといふ、御當家御在城となりしときに、あらためて城西の貝塚に移さる、明暦回禄の後ふたゝび溜池の上にうつさる是今の社地なり、江戸第一の大社神殿巍々として、石の鳥居、五十三段の

石階松柏枝をつらねて上久し。祭礼六月十五日官祭也、（神田明神と隔年に行ふ）凡祭祀に預るの町ハ南ハ芝を限り西ハ糀町飯田町を限りて東ハ傳馬町濱町辺を限りて北ハ内神田を限りとす。神輿三基、祭礼の番組四十余番各花だし（山鉾の類也）一本練物など出して神輿渡御の町々ハ宵宮より桟敷を構へ幕を張、毛氈を鋪つらね、軒に多くの提灯を釣る。十五日の未明先榊渡る。太鼓是に添ふ。其次猿の造り物ある引山その次諫鼓に鶏の引山（とさる）其外の番組ハ例年の定めあり。此祭に糀町より朝鮮人来朝の形に出立ち布をそ造りし大きなる象の練物を出せ（近年引山の外これを止らる）神幸の道、本山を出て永田馬場より御堀端を歴て糀町御門に入上覧所を渡りて竹橋より神田橋鎌倉河岸を過（今ハ竹橋より常盤橋へ出る）本町壹町目へ出、本石町三町目小傳馬町大傳馬町旅籠町へ渡る。傘鉾大吹貫幟屋臺引山甲冑の法師に至り、氏子に預る處の諸侯より又警固の武士をいだし長柄鑓を立つらねて群行して茅場町薬師堂（山王別當の別院あり）の境内にて神饌を献じ畢りて八丁堀日本橋筋を中橋へかゝりて夫より本山へ還幸也。

炎天 極暑

の天といふ、

て　四月　手安天神祭　午ノ日

○江州野洲郡江辺の庄にあり、永原村北村三ヶ村の氏神也。鎮座年月詳ならず。明和年中まで七百余年に及といふ。又永保年中といふ。四百年以前延久五子年十一月十六日、永原越前守再建す。その後應永廿六亥年六月、永原越前守雅行修補す。又明應七年四月十四日同氏重秀改め造る。この重秀ハ越前守に任じ、廿八万石余領す。京極佐々木の同流にて、永原に住す。依て本居神として四月午の日祭礼、神輿二基渡御あり。例祭正月十一日より十三日まで連三の千句興行あり。巻頭ハ時の地頭の句を定例とす。此所北村季吟出生の地なり。又平清盛の妾妓王も此地に出生す。故に平家の奉行判物の大繪圖氏子三ヶ村に傳来すといふ。別當實光坊の説によるとぞ。祭式未詳。

繡毬花　和　漢

三才圖会　粉團木の高さ五七尺、葉ハ箱根楊櫨に似て團く皺文あり。四月花をひらく。初ハ淡青色、後正白なり。小さき花攅簇して團さ二三寸。一種小粉團といふあり。木の高さ四五尺、葉狹く長し。棣棠の葉に似て粉團に似て小く白し。大さ寸半

（むかりとまきぎく）

五月 **天中節**【提要抄】五月五日午の剋を天中の節とそ、

天師と畫 かの部艾虎の条にみるべし、

天南星【蘇頌圖經】天南星ハ処々の平澤にあつて三月苗を生ず、荷梗に似て、其莖高さ一尺以来、葉蒟蒻の如く、両岐相抱く、五月花を開く、蛇頭に似たり、黄色、七月實を結び、穂となりて石榴の子に似たり、紅色○時珍曰、一名虎掌、葉の形ちも亦似たるに因てなり、南星とハ根圓く白く、形ち老人星の如くなる故に南星と名く、と云云 和名抄 虎掌（和名於保保曽美）

鐵線花【和漢三才圖会】鐵線花、按るに苗宿根より生じて一挺に三葉、微に芍薬の秧に似て小く、莖細く靱甚勁し、故に鉄線といふ、俗称して蔓無く其葉架に倚て繁衍、四月花を開く、蕚の下に六葉あつて莖を抱く、亦一異なり、其花白色六の瓣平に開て、蕊圍く紫色最艶美、其蕊縦まバ天蠶糸を綟て總となすに似て其もとに子あり○千葉鐵線ハ外六の瓣むして白色、常の如し、内の瓣もまた白色千葉短く細く、随ひてひらく、青き蕊あり、外の瓣既に落ても内の蕊ひらく、

六月 **天満御祓** 廿五日○當社ハ摂津大坂西成郡天満にあり、祭る所の神、天満天神【摂陽群談】社家説に曰、天満宮の權輿ハ人皇六十二代村上天皇の御宇天暦年中二の地（いにしへハ天満山といへる大きなる松原也）に於て一夜に松茂生す、その梢に異光赫々たり、人これを怪みて帝都に告て奏聞を遂く、帝即日勅使を下したまふ時に神託ありて云、難波の梅をえらび、筑紫よりこゝに来る、驚き覚て、その由を奏しに依て菅霊を此地に鎮らる云云○例祭六月廿五日渡物車楽に水陸とわかに渡りて神輿恵の御旅所に出、往還川舟にて數万の提灯群集（遊船又多し）、

天貺節【書言故事】合要に云、宋の真宗祥府四年詔して六月六日を天貺の節とそ、

あ

四月 **袷**【文選秋興賦】御袷衣（李善註云袷衣無絮）○凡四月朔日を更衣とし、此日より袷を用ひ、端午に至て帷衫を用ふ、

網鳥 ほとゝぎすその異名也、【藻塩草】是ハ時鳥を網にて取て、明年の夏鳴せんと云心也云云

青簾 青葉の簾 翡翠の簾【藻塩草】青葉の笠とハ翡翠の笠とし、四月朔日新しき笠をとう

くるありと云ゝ一説ニ加茂の葵を、四月朔日翠簾ニ
かけらるゝ故青簾の笄といふ云ゝ一説ニ夏山の翠あるを
いふ云ゝ○青藍云元禄年間の句ニて客ハ誰乳母か所ニ
青簾紫ごしと云へるたぐひの作例あまた侍れバ天子の御簾
とのみいふといへる説ハあやまれり、

扇を賜、扇の拝 中の部孟夏旬と見る条ニ見るべし、

甘水 ふの部仏生会の条こゝろうべし

葵祭 葵蔓 かの部加茂祭の条下ニ見るべし、

雨蛙 枝蛙 【和漢三才図会】背青くして腹白し大なるものハ寸半に過ず、雨ふらんとするとき鳴故ニ雨蛙と名く【大和本草】土鳴雨蛙といふ最も小なり色青く木の枝ニすむと云ゝ是枝蛙なり、

青ざし 【枕草紙】五月五日のことをいへる条ニ青ざしといふものを人のもて来るを青きうすやうを艶なるすゞりのふたニ敷て、これませごしにさふらふとてまゐらせたれバと云ゝ季吟云青ざしハ青麦ニて調じたる菓子なり、

葵 草葵 夕千葵此二名亦蜀葵をいふ○

蜀葵 時珍曰

春の初め子を種冬月まておのづから苗を生ず、嫩なる時茹ふべし、五六尺ばかりして花さく、木槿に似て大きく、深紅浅紅紫黒白色単葉千葉の異なるあり、

兼三夏物

扇 かはほり 【五雑俎】大明以前摺扇なし、多く團扇を用ふ○扇車 扇引 扇すまひ 以上増山の井ニ出たり○うちわを【枕草紙】こぞのうへなりと云ゝ河海ニ云蝙蝠を見て扇を作りそめたるよし云ゝ依て夏の扇の名物とし

汗衫 【釈名】衫ハ袖の端あらずと云ゝ【昭潭志】云立山縣の里婦縷績ニ長せりよく竹を以て衫を為りて暑服ニ充つ、衫ハ小襦也○按ずるに和俗にいふ襦袢、管襦袢

汗巾 長サ一二尺の布の両はしを縫ひこれを用ふ、のぬぐひなるべし

暑 【山堂考索】陽事を用ふる時ハ則日進で比ふれ、登進て長し陽勝る故ニ湿とあり暑を好る、

編笠 【和漢三才図会】臺笠今莞を編てこれを作る、竹の骨を用ひず、呼て編笠といひ以て暑を禦ぐべし、

洗鱸 和俗夏月其肉を魚鮓ニ作り洗ひ浄め清酒小便しこれを食ふことを洗ひ鱠といふ、

青

鷺 和漢三才圖会 蒼鷺和名（美止鷺）言こゝろハ緑の下畧、蒼鷺、鷺ふ似て小く、色蒼黒し、以上和名抄 今蒼鷺と称る者ハ鷺ふ似て大く、頭翅皆蒼黒、項冠毛も亦同色、頭上胸ふ至て、黒毛斑々として、翅の端正黒、嘴の外黒く内黄、頭白く、脚緑なり、毎に水辺を歩して魚を食ふ、飛ぶときハ高く挙て遠く翔る、この肉最美也、夏月ふ之を賞、

安居 けの部夏籠の条ふ註す、

青山椒 和漢三才圖会 本草に秦椒蜀椒の二種ありて、秦椒ハ其葉對生光て刺あり、四月細花を生じ、五月實を結ぶ、生ハ青く熟すれバ紅なり、蜀椒ハ釘の如き刺あり、葉硬くして滑らか、四月實を結ぶ、花なく、但枝の間ふ生ずと云云、其實しまらず紅熟せざるものを青山椒といふ、

藜 時珍曰灰藋四月苗を生ず、蔬とす、藜ハ灰藋の紅心なるものにて莖葉稍大なり、嫩きときハ亦食ふべし、老るときハ莖杖ふなるべし○せうのせん藜の杖ふなる日まで、[illegible]

鮎 若鮎小鮎とよびて春なり、たゞ鮎とばかりいへバ夏なり、落鮎渋鮎とよびて秋季なり、

五月

菖蒲献 和漢三才圖会 仁徳天皇三十九年辛亥五月、始て詔して菖蒲を献ず、續日本紀 聖武天皇天平十九年五月、天皇南苑ふ御して騎射走馬を観たまふ、是日太上天皇詔して曰、昔ハ五日の節、常ふ菖蒲を用ひて縵となす、このごろ此事やみぬ、今よりして後菖蒲縵ざる者ハ宮中ふ入ることなかれと云云

菖蒲の輿 公事根源 六府あやめの輿を南殿の階の東西ふたつ、四日ハ朝餉の壺ふ是をたつ、主殿寮所々ふ菖蒲ふく、○菖蒲の御輿の料木ハ梅が畑より供奉人、今出川家ふ納む、即衛士ふ遣ス、衛士これを作る、其法根菖蒲を連ねて棟梁とし、細木をもて柱とし、廻ち小殿の形を作りて、檜の葉並ニ菖蒲と以殿宇を葺、衛士禁裏ふ献るとぞ、

菖蒲葺 時珍曰菖蒲ハ蒲の類の昌盛なるもの故ふ菖蒲と名く、和漢三才圖会 菖蒲屋の檐ふふくものゝ、或ハ此の日、菖蒲ふ浴し、或ハ石菖の根を以酒ふ漬しこれを飲バ邪氣を禳ふと云云

菖蒲人形 此人形ハ力士の形を模して作まるる多し、江戸ふて元禄のころまでハ市中を賣ありきしとぞ、炭俵集 端午の部

に「五月雨や傘に付る小人形」其角とあり、今ハ十軒店尾張町其外便りよき街にて是を賣る

菖蒲引

沼沢江池なとに下りたちて引心を哥によめり○はこそ草末もの露も五月雨にまさる水野のあやめひくあまり　資任

菖蒲の鬘

菖蒲を軾とする条下とるべし

菖蒲の案

[延喜式] 典薬寮式に云五月五日菖蒲生蒬黒木の案四脚苧六両黒葛四斤を進る省輔以下寮頭ともに執る人進み訖って即退出せ輔留りてこれを奏す云〻

菖蒲の枕

[續拾遺] あやめぐさひと夜ばかりの枕だにむすびもはてぬ夢のかよひぢ　前中納言雅具

[後水尾院當時年中行事] あやめの枕（[illegible]）一對をし入御枕をとよあり、うちハ極薦調進を御枕ハ勾當の内侍よりいだす、其様あやめとよもぎ五六すぢばかりに切て五すぢづゝにあとさきを紙ひねりにて結びて両方の小口にさしをさむ云〻

菖蒲湯

[同年中行事] 五月五日の条に云けふハさうぶの御湯まゐる、よべのさうぶの御枕一對をとらすゆふにつゝしてあぶら竈殿紙ひねりを引きて御湯に入る

[大戴礼] 五月五日蘭をたくへて沐浴すと云〻是菖蒲を以蘭の義に代るなり、

菖蒲の占

[三瀬草] 女兒の鐵にあやめを結び唱へていはく「けふと軒の[illegible]の糸」如此いひて一事を祈る、願ふ所成るものゝあやめハ蜘蛛あつて網を菖蒲のうへに曳く云云

菖蒲浴衣

京師の俗、端午に菖蒲浴衣同帷子を與ふることも必家々にありとぞ、官家にハ菖蒲重とて朝服あり、花田萠黄のごとし、根菖蒲といふハ表白裏紅、又襖衣といふハ表紫裏薄藤又菖蒲重紅梅を用ふることもあれど、五月五日着たる処の常の浴衣帷子を菖蒲浴衣菖蒲帷子といへることにて當季の色を用るに非ず、

菖蒲酒

[荊楚歳時記] 端午に菖蒲の山の澗中に生る一寸九節の者を以て或ハ鏤め或ハ屑として酒に泛め以瘟疫を辟く、[本草] 石菖蒲一切の悪を除く、端午の日菖蒲を切く、酒に漬てこれを飲む或ハ雄黄を少しばかり加ふ云〻

楝を佩 楝葉

[證類本草] 五月五日俗人楝の葉を取てこれを佩て悪氣を遂ふ○時

珍曰按ずるに羅願爾雅翼に云楝の葉を以て物を練べし故にこれを楝と名く其子小鈴の如し熟する時ハ黄色金鈴と名く形を象るなり[増山の井]今も片田舎にてハ端午にあふちの葉を軒にさす所侍り今せんだんの木といふもの是なり

有無日　廿五日[公事根源]これハ村上天皇の御国忌也宮中にあるなしの日とも申にや廃務日ニにらさせ給へども政おこなふ事も侍らねど又急事などあるまじ儀に政事ありさてありなしの日とハ申也

楝の花　燕頌々曰楝木の高さ丈餘葉密にして槐の如く長し三四月開花紅紫色芬香庭に満てり[花彙]石茱萸その樹高大数抱に及ぶ葉厚く光り夏月花著枝に満つ色淡紫観るに堪たり一朶数蕚数百群となる頗る芬芳あり長き實を結ぶ桃葉珊瑚の如し一穂数十顆枝の間に垂糸す生ハ青く熟すれバ黄色味甘し一種固き實の者ハ味苦し川楝子是なり日本古来罪人を梟首するに此木を用ふ故に他材に用ひず俗誤て旃檀とよぶ旃檀ハ檀香也又樗の字を用ふ[枕草紙]木のさまハにくげなれどあふちの花こそをかしけれかれ〳〵にさま異に咲くかならず五月五日にあふもをかし

紫陽花　四葩花[韻語陽秋]唐の招賢寺に山花あり色紫気香しく縟麗愛すべし人其名を知る者なし白楽天これを過て標をなして其名を紫陽といふ[和漢三才図会]其茎叢生して茎葉繡毬の葉に似て五月花をひらく云云　此花ハまろくてまりの花に似て淡碧色一名四葩の花[夫木]

あぢさゐのそれのよひらハおもられて
まこれのめのまさけだりハ　俊頼

朝菊　[花彙]花苦苣　荒本草に云人家園圃に好事の者多く栽苗冬を経て長生す高四五尺茎細く柔かにして蔓延する如し葉苦菜に似て光沢あり青色にして淡碧を帯ぶ初生茎の梢と枹葉毎に抽で葉を穿形の如し四五月葉の間に紫碧花を開き初て綻ろ時野菊のごとし朝にひらき夕に萎む

あざゝ　池沢の中に生ず葉も花も萍蓬草に似て別也あざゝハ茎河骨より長く水中に横くゞりてよもとく葉ハ水面にうかび水上に上らずて花の形色ハかうほねに似たり五六月水面に黄花を開く荇葉とあさゝと訓ものハ誤也

粟蒔　[和漢三才図会]中古粟とあらも近世粱ともいへど大抵粘るものを秫とし粘ら

ざるものと粟とも、穗大にして毛長く、粒粗きものと梁とし、穗小にして毛短く粒細きものと粟とも、苗ハともふ茅ふ似て、種類凡て數十、青赤黄白黒の諸色あり、早中晩あり、三月種るものを上時とし五月熟し、四月種るものを中時とし七月熟す、五月種るものを下時とし八月熟す、

青梅 嬉しさハ葉がくれ梅のひとつかな、杜国○梅とばかりいひても實のさかりハいひとれぞよし、

杏子 〔本草綱目〕杏ハ葉円くして尖あり、二月紅花をひらく、沙あるものを沙杏とも、黄にして酢を帯るものを梅杏とも、青くして黄を帯るものを奈杏とも、大さ梨の如く、黄にして橘の如きを金杏とも○和名からもゝ、俗あんずといふ、

荒布苅 〔和漢三才圖会〕本草綱目ふ海藻ふ似たりと、按ずるふ昆布ふ似て狭く、黒色長さ四五尺、縦の皺文あり、聚るふ叢て株あり、堅實ふして乾けバ小刀の欛とする、其葉煮食ふすよろし、

鰺 〔大和本草〕東南の海ふ生るもの形肥大ふり、夏秋肉多く味美あり、冬春美あらず、又室鰺島鰺あり味劣る、

六月

芦の神輿 つの部岸島祭の条下ミるべし、

熱田祭 神社尾張国年魚市郡、江嵜、松姤島千竈の郷ふあり、正殿五座、第一天照太神、第二素盞烏尊、第三日本武尊、第四宮簀媛命（日本武皇妃）第五建稲種命（宮簀媛の兄大宮司の祖神）右五座西より次て是とならぶ、○土用殿ハ神躰草薙の宝劔あり、又熱田七社といふハ大宮八劔宮高藏宮大福田宮日割宮氷上宮源大夫宮是也、此外摂社末社一百余座あり、當社ハ人皇十二代景行天皇の御宇鎮座し、其後天智の御時故有て皇都ふ移奉りしが十九年を經て、天武天皇朱鳥元年ふたゝび當國ふ還座ましまへり、其砌ハ例祭勅使下向有て官幣を奉られしあり、抑當社の神事、年中數度ありまづ正月十一日辰剋踏哥の神事、大福田の社より始て政所、大宮八劔又大福田ふて終る、此社ハ倉稲魂を祀る、故ふ五穀豊登を祈る神事あり、舞人十二人、高巾子一人留一人陪一人各櫻山吹を挿頭として同十四日ハ歩射の式、十五日ハ歩射の的、廿二日ハ両宮の歩射会、二月初巳午未の日祈年祭、○同月初未の日午剋、御田神社の供御此日烏喰の神事あり、俗ふ烏祭といふ、是ハ神事いまだはじまらざる前ふ、大宮祭文殿の前ふて祝座の長外ふ一人平餅をもて烏と呼ぶし、此餅と烏のくハざるうちハ神事と

はじめにどいふ○五月五日ハ神輿鎮皇楼門上へ神幸古實ハ[illegible]

○六月九日山鉾祭礼あり、熱田八ヶ村よりこれを行ふ（車二輌山一輌）○同月晦日夏越の祓あり、鈴の社前の川岸におゐてこれを修す、又

○七月七日ハ大宮の大掃除、十一月初寅、卯辰の日新嘗祭、十二月廿九日両宮外院煤掃ひ等あり、此外諸社の供御八月々數度これ有今要を拈て略記す、

愛宕の千日詣

廿四日

〔神社啓蒙〕丹波国桑田郡、水雄の北にある人祭る神二座伊弉諾尊、火産霊神云云〔神祇拾遺〕愛宕権現端の御前軻遇槌命、奥の御前伊舎那美尊〔紀事〕六月廿四日愛宕詣是を平日の千度に當るといふ、俗これを千日詣といふ、寺僧六坊にてこの日參詣の人に酒食を饗す、これを坊著といふ、火札を買て歸路樒の枝を求め粽を付、これを肩にして帰る、樒の枝ハ竈の上に挿むかくのごとくするときハ其家火災を免るといふ、凡六坊国毎に檀越あり、貴賎を擇まず毎年札を贈て贄を贈るこの使を勤るなれと中泉といふ、この山嵯峨の西にあり、延喜式に載る所丹波の桑田郡に属す今ハ山城の國なり、本殿祭るところ愛宕権現垂跡本地勝軍地藏菩薩、是則慶俊法師再考勧請せる所なりし、當社はじめハ城北の鷹ヶ峯にありしを光仁天皇元年今の地にうつす、

荒和祓

部夏

越の祓の条下るべし、

麻の葉流

祓草〔年中行事〕夏引の麻の大ぬさとうをへてかくのつるさのみときさらしも」大藏卿○麻の葉を切て幣とするゆゑに、ちらへまそる川に流るなり、祓草といふも麻のことし、麻の葉にてなでて

暑日

〔字彙釈文〕暑ハ煮なり、熱して物とする故に名く、と煮がごとし云云○暑き日を之ハ六月の季なり、暑を

ぞかりハ三夏を兼ぬ

青嵐

夏木立の梢の緑を吹なら、もとといふや一説六月土用中の空に一点の雲なく、青さえる天氣に東風のくるくるとしたるを青東風といふ、無類の天氣ハ是を青嵐といふ（ト云）

赤草

麁文曰赤草一名山酸漿高さ七八寸ぞかり一莖一葉臺吾の如くにして薄く小さし、夏日其莖葉真紅になる其苗山沢にあり、故に山酸漿と名く、立花を好める人夏日これを愛して花瓶に挿む、

青田

〔杜詩〕六月青稲多千畦碧泉乱と作まる意にて風景となるべし、

藍苅

〔和漢三才圖会〕四月苗を植て凡七十日ぞかり

にいまそ穂とあさくろ時、晴且ふ露の乗して抜採り、曝し乾も云　云按そる小抜採るあれ稀ふして、苅らる者鮮し

麻、同苅

擽麻【和漢三才図会】苧麻大麻ともふそへと
苧　剥て絲とらし通して苧と称する

麻と以て真苧とらて羽州最上の産を佳とし、奈良晒と織るものの是なり云　云【陸機草木疏】紵ハ宿根土中ふ在て、春ふ至て自生もし栽種ることと須ひそ荊揚の間歳ふ三たひ苅る諸国これを種て歳ふふたたひ苅る便其皮をと剥取、竹を以て其表を刮る、厚き所、おのづから脱し裏の筋の如きものを得て布と緝そ、○蘇頌曰苗の高さ七八尺葉楮の葉の如くして面青く背白く短毛あり夏秋の間細き穂青き花を着く○櫻麻、櫻花のさくころ栽る故の名とも又麻の花の櫻ふ似くる故ともいへり○麻苅と夏とし一番川と秋とそ、

青鬼灯　青しとおひて夏季とそ、くろしくハ秋の部ふ註そ、**青番椒**

青瓜　時珍ら青色瓜といへる是ら、江戸ふてこれを本田瓜といふ、丸漬瓜ふ似く長大なり、**阿古陀瓜**

阿古陀ハ宛も南瓜ふ似て今人好まそ此瓜京師ふ多し味美ならそ、其蔓長く葉蜀葵ニ似て花黄之、**麻**

地酒　【諸国名物記】豊後国の製之云云【和漢三才図会】南都浅茅酒云云【毛吹草】豊後国麻地草云云又朝生酒とも書、或ハ土ふうりとも云、酒方の書ニ云麻地酒ハ豊後国より出其造法糯米粳米等分ふ合製して冬ノ月寒ノ水と用て是と醸し、土中ふ埋め草茅の類と以て是と覆ふなり、冬春と経て夏月土用ふ至て則土中より是と出もて既ふ熟せりよりて土ふうりの名あり、夏月の飲とし賞翫そ、

洗飯　すの部水飯の条ニ出、

雩　【紀事】六月旱する時ハ民間請雨の法と修ス是ご雨乞とい乙民人鉦とうち太鼓と鳴らして踊躍或ハ笠と戴き蓑と着雨中の粧とて是と祝し諸神と祈るなり、

秋隣、秋近し、秋と待　いづれも別義なかし

さ

四月

下帯　【御湯殿記】五月五日より女房上下帷子といろ／＼ふ染て着し附帯あり是ハ洞中の御事ニて凡俗ニも此白帷子下帯と用ふ又四月よりも用ふ、

山王祭　申の日、但ニッあれバ

二の　近江国日枝の神社ハ滋賀郡坂本に有、祭神大己貴尊申、之所謂上の七社ハ大宮大国主命（十一面観音）二の宮麻多羅神及ひ金比羅神これ天台山青龍寺の鎮守に准そ（薬師如来）聖真子八幡大菩薩（阿弥陀）八王子灌頂大法王子、（千手観音）これを補陀落山と表す、客人の宮、白山明神の㚑尊、去来諾の大神之山王の行化を助け、北陸を出てこの山に来現ある故に客人の宮といふ（十一面）十禅子ハ地蔵の應化之、大師此山を開き、成就の後上定心院を創む、叡山東の堂にあり、十禅師を置きまつる、凡人をえらひ得て一人を欽く、安慮を得て数に満て、十禅師の才器を歓抃して忽然としてこゝにきて、故に社をその所に建て祭供することを十禅師といふ（普賢）中の七社、牛御子ハ大威徳、大行事ハ毘沙門、早尾ハ不動、氣比ハ聖観音、下の王子ハ虚空蔵王子の宮の珠聖女ハ如意輪なり、下の七社、小禅師ハ弥勒、龍樹悪王子ハ愛染、新行事ハ吉祥天、岩滝ハ弁天、山末ハ摩利支天劔の宮ハ不動、竈殿ハ大日、以上廿一社なり、〇三月十八日、山王祭の榊をその所に於て、伐取て、四月三日まで至りて西教寺の側の松の木に寄せかけて又山王の社前に置、夜に入て諸人ことごとく、大津の四の宮に立ツ、祭の日神幸の時大津より大宮の拝殿に返し入奉る〇申の日江州東坂本の山王祭にて、午の刻過て、田楽法師、獅子舞、比叡辻の人並に衆徒前駆して神輿を迎へ、七社の神輿山を下る時、前後をあらそひ競ひすゝみて舟にのせしむ、山門の僧徒桟敷を構へ翠簾をかけて是をみることを横桟鋪といふ、田楽法師など此前に於て藝をなす、この日京の山王町より供物を日吉の社に献ず、前日天台の當座主の御室に至てこれを加持し、翌日東坂本に至りて供す、又江州膳所の地人御供を献ず、祭の日縛船二艘湖上に浮め、音楽を奏して件の供物を献備す、是を御供船といふ、その船に乗るもの多くハ猿皮を着て猿の假面を被る、猿ハ元来日吉の使令なればなり、その中、六社の神輿へハ仮りに供するばかりにて後湖水に撤つ、大宮一社の神供ハ神輿の前に置、ゑこその後神輿船を陸地に寄せ神馬相むかへ得て輿中の神躰をまつりて本社に入るといふ、七社の空輿ハ坂本の地人ことごとく舁て神輿屋へ入る、今日山門に属する所の供人甚だ盛威をふるひ、神幸を警固す、俗諺に山王祭に擬るものあれバ寒の語ハ今日のことくとぞ、これ人を害するに及ぶの語也、祭ての前夜いまだ八王子の神輿を祭らんと急

ふ山坂を下りて七社の神輿各本社七ヶ所の拝殿ふ居う、拗山王祭ハ七ヶ年詣てまうしてハ盡く見つくしうくしといへり。古老傳へていふ九二月中の申の日八王子三宮の両神輿を八王子の山上拝殿ふ舁まゐらせおき、四月未の日ふ至て件の二社を神輿ふ遷し奉ると、午の神事といふハ八王子拝殿ハ元来山崕ふ造りて出して階下遥ふ低し、神輿半ハ拝殿ふかゝり、半拝殿の欄干を越て外ふ出し、神輿の先の方の棒よ柱とをそ相図を待て柱を抜とれハ神輿さうしまふ落つその下ふ神輿舁數十人並居て中ふて請取直ちふ山坂を下る、誠ふ生死をこの一時ふ究む、これ八瀬の土人預りて役する所なりとそ。神輿落ちふ下し終りて両社を二の宮の拝殿ふ安置して二の宮の神輿を拝殿ふ遷し奉るをハ近年未の日の晩とする、十禅師の神輿も又同し、未の日二の宮十禅師四社の神輿を大政所ふうつし奉る、同時警固の式あり、大宮聖真子客人の宮ハ大宮の拝殿ふうつし奉ると云（此間ながけれバ略す）公人各白素絹紫の刺ぬき五條袈裟を以頭をつゝミ、太刀を佩、その余数十輩甲冑を着し、鎗長刀を持てその所を警固し、神前ゟ武器を立つらねて、終夜警固の勢ひをなして各下山す、此日京祇園の社より御供を捧け来りて酉の刻献備す、これを末の御供といふ、暮ふ及て宵宮落しといふことあり、大政所四社の神輿を石垣の際へ出し石壇の下より柱ふて、神輿の先の方の棒端を持せ置て、これも又合図を待て四社一同ふ落さんと設けおくなり、神事の役人その所々ふ来集りて、時刻ふ至れハ獅子舞大政所ふ来りて二の社三の宮と次第に舞て退く、次ふ田楽法師装束ふ菅笠を被りて藝を施し、神輿を拝をこの時公人頭取狂言さしをさてもめのう仕れといふ、田楽笠をぬぎ立烏帽子を着てらうひ舞ふ、この舞の扇を擧ると相図ふ神輿を落とし、四社の神輿保中ふてうけとり先をあらそひて走る、収納所の前、鼠の宮その前後ともふ相揃ひ是より次第の如く神輿を並へ大宮の拝殿へ遷幸七社合せ奉るゝ当日申の日山門の大衆桟敷へ入の義ありと云々公人甲冑ふて衆徒を警固も桟敷の前ふおいて獅子舞田楽あり、是ハ宵宮ふ勅使御参向当日まで御滞留勅使への饗應の遺意なりといふ、人皇七十一代後三條院延久四年四月廿三日始て祭の官幣を立らるゝのよし廿二社註式ふ出づ、或ハ六十四代圓融院貞元二年四月廿六日始て上卿弁外記史諸司を遣ハさるゝともいへり、〇凡神馬の催し、一二番の鐘

よ應じて參詣の輩石の鳥居へ来て集る三塔の公人人數とゝのへ未の剋ばかりに四の宮より榊を渡す礒成束帶濵成ハ官庫装束にて各馬上七度半の使至て榊を渡す之云（此間も長け　こゝまで畧に）社家春日祭といふ事あり社家の拍掌を待て大宮前の森を動すそと合圖として神輿各先をあらそひて舁出し前後の勝負石の鳥居までにあり云々神輿ハ飛ぶが如く八ッ柳といふ所にいたりて神輿を船に乗せ奉るも又先後をあらそふこの神輿船ハ湖辺七浦より毎年こゝに出る是より辛崎の社にて神供の義ありて七社神輿の駕輿丁例年潔斎精進して事に勤む今日の勝負への手柄を褒美して禄を賜ふ事あり谷々勝手よりこれを出す日次紀事に七社唐崎より神馬にて陸地還幸といふ誤なり　日吉鎮座記祭儀云卯月の祭礼ハ琴の御館大櫟木を以て神幸の祝詞を奏し唐崎にて先蹤の如く恒せう粢粟の御供料を奉る神輿を出し祭ることハ桓武天皇延暦十年と云云又御舟祭始ることハ延元年中供水以後の例と云云七社の神輿へ御供を献ることは各七膳献供の式畢て神輿舁ぎる輩ハ唐崎へ上て陸地を本社へ帰る西ハ高野矢谷修学寺佛

格寺田中山中の人東ハ大津志賀河野坂本苗鹿雄琴仰木乳母真野木の土人也神輿舟ハ若宮の濱へ着岸是より上ヶ濱といふ所の土人神輿を舁き炬火挑灯にて本社へ還御あり登酉の日廊の神事といふ者大坂より来て神楽を奏し終りて後神輿を納るなり

榊取

かの部神祭の条に注す

三枝祭

（吉日撰むよし　檜木抔にいれ）

〇大和國添上郡率川の阿波神社の祭也或説に率川と三枝を別社也率川の社の南に三枝御子の社あり諸神記に件の社ハ右大臣是公の建立なりと見えたりよりて南家の苗裔この祭を行ふ又一説に三枝の花を折て酒樽にかざる故に三枝の祭と云申とぞ顕昭の説に三枝ハゝらすあふきなり末廣なれバ祝ふとなると云々　公事根源　是公の建立と中口傳あれど今といへる書ハ淡海公の撰されて養老年中に奏覧せらる是公の大臣ハ淡海公の曾孫なりこのこと既に今にいはれし是公の再興ならん覚束なし

嵯峨祭

中の亥の日　丹波国桑田郡水雄の北白雲寺愛宕権現の祭なり　滑稽雑談　例祭神輿二基清涼寺にあつまて祭日の送り迎へも此地よりなせし寺ハ山の下にありといへども神地に属せし故に清凉寺の櫻川に額して

愛宕山といへる故なるか、この日一基の神輿に冠らせる金鳳ハ愛宕山より下る、此金鳳下るを期として神幸を催ス。一基ハ野山大明神と申て、野宮より迁幸と云　云いづれも土人本居神とも、この祭に土人嫁と妓女の如く艶をかざらせ、匂欄に於て舞しむ、近年引山或ハ傘鉾を出す、

櫻の實

【和漢三才圖会】清明の前後花をひらき實を結ぶ大小大豆のごとく、生ハ青く熟すれバ赤黒し仁あり、小兒好でこれを食ふ、味ひ甘美よく魚毒を解す、俗に此子を櫻坊といふ、

【五月】

さ月凡モくの部茱モの条に出、

五月の鏡

【異聞集】唐の天宝中揚州より、水心鏡を進る、背に盤龍あり、五月揚子江心に於てこれを鑄る、背龍頗る異なり、後旱せしこれを祈れバ則雨ふる、【捜神記】金錫の性ハ一なり、五月丙子日午時鑄るを陽燧とし、十一月壬子の日子時鑄るを陰燧とす、〇時珎高臺録を引て云ク、陽燧一名陽符、火を日にとる、陰燧一名陰符、水を月にとる、蓋銅を以てこれを造る、これを火水の鏡といふ【五雜俎】唐より以前こ多く揚州より鏡を貢す、五月五日を以揚子江心の水を取てこれを鑄る凡鏡ハ他になし水清洌なれバ則佳なるゆゑ、

左近の真手番の日

【公事根源】五月三日ハ左近の荒手番、四日ハ右近の真手番、五日ハ左近の真手番、六日ハ右近の真手番〳〵、むかしハ左右近の馬場にて騎射のことありしなり、射手などハ大将の中さぶらひをもちゐるなり、云云　此日随身褐の尻を折て着る故に、その日ひをりといふなり、荒手番も同しさまなれども、真手番正月なれバ、五月五日とひをりの日といふなり、ひをりハ引折の略なり【河海抄】左近の馬場ハ一条西洞院　右近の馬場ハ一条大宮在、

最勝講

【公事根源】先ハみて日をさだめらる、四ヶの大寺（東大 興福 延暦 園城）最勝古の明匠をえらびてさだむ、證義講師聴衆などあり、最勝王経を清涼殿にて講ぜらる【元亨釈書】永延皇帝一条寛弘六年六月十九名徳を宮中に延て、最勝王経を講論せしむること五日、立て式とする、先代或ハ行ひ或ハ止む、今より後例とするといふ、

五月雨

梅雨　入梅　黴雨　蒙栗花穴

【和訓義解】さみだれハさつき雨降るの畧なり、〇梅雨【埤雅】四五月の中梅黄み落んとする時、水潤土溽して柱礎みな汗す、蒸鬱として

雨ふることを梅雨といふ故に三月雨ふることを迎梅といひ五月雨ふることを送梅といふ○入梅【四時纂要】閩人立夏の後庚日に逢ふを入梅とし芒種の後壬日に逢ふを出梅とし又雨ふるとき耕耨ふなるし○黴雨【紀事】立春後百三十五日大概黴雨とす諸物黴有る此節陸地處々に水ゝかわらぎ涌出る俗に津井穴といふ○墜栗花穴【紀事】摂州矢田郡丹生山田の庄原の村并天の祠のほとり毎年水のあふるゝを涌て期を愆ず是則中将姫の娘白瀑前と祭るものなり墜栗花左衛門といふものゝ世々に家すと云云

早苗、早少女 たの部田植の条下見るべし

榊の花

【和漢三才図会】坂樹（日本紀） 賢木（本朝式） 龍眼木（漢語） 和名佐加岐正字未詳 按ずるに本朝神社に用の木なり浮屠の木樒を用ゆるがごとし葉小さく色深青にして香なし四時凋まず小白花をひらき實を結ぶ生は青く熟せば紅なり日本紀に八百萬の神たち天の香久山の坂樹を取て天の窟戸の事を祈る以来神の縁木と云云

柘榴の花

【潛確類書】石榴種甚多し千葉深紅にして實を結ぶものを宝珠と名く單葉のものを火榴と名く甚だよく花をひらく千葉のものは一種白花をひらく白榴といふ黄花をひらく黄榴といふ【博物志】漢の張騫西域に使して塗林安石國の榴の種を得て帰る故に安石榴となづく

さるとりの花

【[illegible]】蘡薁 さるとりいばら 山野に多く生ず葉は樹に似て刺あり八九月紫の俗かめいばらといふ

五月躑躅

【花史】杜鵑又石巌花と名く此花杜鵑の鳴とき英をひらく故に名く【和漢三才図会】山躑躅 山石榴 杜鵑花 和名阿伊豆豆之今云さつき本草綱目に云處々山谷にあり高きものは四五尺低きものは一二尺春苗を生じ葉の色浅緑枝少ふして花繁し一枝数萼二月始めて花をひらき蓮華躑躅の如くわして石榴の花の如し紅紫五出千葉なるいろいろのあり按ずるに品類三百余種に至る四月はじめて開き五月を盛とす俗に五月と称す摂州須磨の一の谷より二の谷権現山に至て凡三四里なり遠州秋葉山の華乾川の両辺およそ三四里なり躑躅杜鵑花甚だ多し夏月には満山錦のごとし

鷺撫子 かよの部撫子の条見るべし

早

松茸【和漢三才圖会】松茸ハ八九月の交に盛なれバ世賞ところとなし、五月出るものと俗に早松茸と名く、其ハ味香美ず可ならぞ、

蠁子【和漢三才圖会】倭名抄ニ云蠁子（和名佐之）酒醋の上ニとぶ小虫あり、むらに醬醋腐肉の中に初め蛆と生じ羽化して小蠅となる、身黒く羽黄色大さ一分に過ず、虫眼鏡を以て之を視るに蠅と異なることなし、然る小蠅の子にあらずして一類二種、卵生化生異なるのみ

五月闇 李沆愁霖歌云、葉破苔黒來休滴、職光透長庭沙色、根穴無長龜一千、仅割断頑雲看晴碧【藏玉】さつきやみの晴間をみえぬ空よりや月こそ月こゝろほそしきらけん　顕昭

六月

西園寺殿妙音講 十六日【紀事】六月十六日十七日西園寺家妙音講を修せらる、今日種々の珍果と家の妙音天へ供ぜし、堂上並ニ楽人相集まりて管絃を催す、又西園寺家の外、琵琶を弾ずるの家又此式あり、近世故ありて十六日此を修す、【体源抄】妙音院相國師長公妙音天を四条の北室町の東に造らしめたまひ、毎月十八日妙音講を行はるゝ云〻○妙音天ハ弁才天之、

座頭の涼 十九日【紀事】六月十九日盲人納涼会あり是を涼といふ、在京の検校及勾当上首一人清聚菴に会して心経を転読す、頭人検校饗應を設け六派の中瞽者四人を撰みて平家を談ず、暑氣甚しく座席狭き故に検校の外勾当上首其以下並ニ遠方の人来会する事に及ばず、其外ハ粗二月十六日の式に同じ、

座摩の御祓 廿二日【社説】摂州西成郡の総社坐摩大神宮ハ人皇十五代神功皇后三韓より帰陣したまふ時、神武天皇の古例によりて御船難波の岸浮見石の辺に寄せて神璽安鎮の為斎したまふの地にして神功皇后十年庚子難波大江の岸田蓑の島に鎮座（浮見石ハ今の御旅所の鎮坐石是といふ）祭る所生井の神、福井の神、綱長井の神、右の三津井の神に竈の神、名波比祇の神、阿須波の神二座を加へて五座（[illegible]神名帳）例祭六月廿二日夏越の大祓あり、神輿御旅所に渡[illegible]の鎮座の旧跡、八軒屋の南石町にあり、今猶鎮座石（[illegible]）神功皇后の憩息石といふ、此辺をすべて渡辺大江の岸といふ、今の天神橋一名渡辺橋といふ、大江の岸にある故に名く、南ハ

城内に属せり、北ハ兎餓野、南北を田蓑の島といふ、此中へ江口の辺まで、當社の境内にして、末社あまたあり、天正年中闕江の側に遷しまつると云 延喜式 坐摩の社○祭礼當日氏子の市民種々の邌り物を出して、社司、西横川の川上に床を構へ、氏子の形代を流し禊を修す

小蝿声神 神代巻 然ども彼地多に蛍火光く神、及び蝿声邪神あり、復草木咸能言語あり、と云 奥儀抄 さばへなすといふことは、譬バ夏のさばへのちりてみだるゝやうにわろき神のあらぶるなり、ことゝをそらへ、あくじんとて六月をらへハまつるなり、

三伏 張陽書 夏至第三の庚を中伏とし、立秋の後、初の庚を末伏とし、是を三伏といふ、

さらし井 いの部井戸替の条下に出、

鯖鈎 時珍白青魚亦鯖に作る色を以て名くるなり、大なるものを鰺魚となづく 和漢三才圖会 能登の海上に四月多し、數万浪の為に漂ふ所を、鈎せず網せずして亦獲べし、

鷺草 和漢三才圖會 奥州處々に鷺草あり、春苗を生ず、麥の嫩苗の如し、高さ尺ばかり、六月莖を抽んで花を開く、正白色形鷺の如し、故に名く、連鷺草といへる一種あり、高さ五六寸葉略大く万年青の嫩葉に似て、花白色鷺千有餘群飛に似たりと云

櫻麻 あの部麻の条を見るべし、

豇豆 和漢三才圖会 十八豇豆長大なる者二尺に至るといふ者是なり、夏至の前に種を下して蔓長く籬に延其莢尺余なるその子凡十八ばかりなり、故に俗呼で十八豇豆といふ、六七月莢の嫩きものを煮て食ふ味甘美赤白の二種有り

き

四月

擬階の奏 七日 公事根源 四月七日なり、二月の列見の時の成選の短冊を二省よりもてまゐるを、大臣奏聞する儀あり、列見延引の時ハ是に延るなり、さてそれてぬれバ短冊をもとのごとくむすびいれてかへして退出さしたるとかや、頭書 擬階の奏擬ハ議也、誰々を加階させらるゝよしを議する奏なり、

桐の花 時珍白桐ハ花筒をなす、故に是を桐と名く、其葉甚大にして尖て長く角あり光り滑らかにして毳あり最生長し易し、花を先にし葉を後にす、三月花をひらく、牽牛子のごとし、白色花心微紅なり、其

木輕虚皮の色粗白し故に白桐と名く〇梧桐一名青如狼狸〇宗奭曰梧桐四月嫩葉に花を開く棗花の如し云云【大和本草】梧桐又青桐といふ古人詩歌に詠ぜしハ是なり世に白桐多く梧桐ハ稀也【和名抄】椅桐者三月花紫く琴瑟に作るに堪ふるもの是なり、

金柑の花 時珍曰其樹橘に似て甚ダ高大ならず、五月白花をひらく、

枳穀の花 時珍曰木橘の如くやして小く、高さ五七尺葉橙の如く刺多し、春白花を生ず、

鴨足草 一名ゆきの下、ゆの部に見るべし、

木芍薬 丼の異名之【賈耽花譜】天宝中禁中初めて木芍薬を重んず、四本を得たり、紅紫浅紅通白興慶池の東沈香亭に移し植と云云〇時珍曰牡丹ハ其花芍薬に似て宿幹木に似たり、

羊蹄花 【羊蹄根】時珍曰羊蹄ハ葉の長さ尺餘牛の舌の形に似たり、夏に入て薹を起し花を開く實を結ぶ夏至の節枯る、羊蹄ハ根を以て名るなり、根長蘆菔に似て莖赤し【和訓義解】俗志のね又きしくといふ、夏に至て小黄花をひらく、其根大黄に似たり〇和俗大黄といふ者是なり、莖花ともに黄赤の二種あり、

葭剖 其實枝あるものを振ひ動せバその音きしくといふ、

葦鳥 【葭剖】【蘆原雀】【蘆鶯】【和漢三才図会】蘆虎（兼名苑）蘆原雀 葭剖 蘆鶯（以上俗称）按ずるに状鵙の鶯に似て大さ雀の如し、青灰の斑あり長き尾田沢芦あし葦の中に在て好んで葦中の虫を食ふ其鳴声喧く云く [illegible] 故に此名あり

兼三夏物

切麥 ひの部冷麥の条に出す、

木布 【紀事】夏日奈良漂布ハ講布、高宮布、木布の類を賣る、云云麻布、葛布、藤布ホのいまだ漂さゞるを生布といふ木布とハ生布に同し、

五月

儀方を書 【五雑組】五月五日す[illegible]の紙に儀方の字を書ござを家の四方に粘つくるときハ其年蚊蝿を退く、

競騎 くの部薬日の条に出

騎射 【年中行事歌合】五月五日豊楽院にて昔ハ騎射と御覧じけるなり、是を馬弓といふ天子群臣みちよりあやめのからを冠にかけて節會の儀式ありしくに、続命縷くもひけるとかや、興あるとを思そえへれ、

祇園の神輿洗　晦日

紀事　五月晦日、祇園の社に詣て、各杉の葉を受て火災を拔ふを茅拔といふ、夜に入て、神輿洗あり、凡其式神輿三基所謂素盞烏命、大政所と号ス、西ハ稲田姫少将井と号ス、東ハ龍王女今御前と号ス、大政所今御前の神輿二基ハ神輿屋を出し、直に拜殿に入る、少将井の神輿一基ハ神輿屋より南門を出て石の鳥居より松林をすぎ祇園町より目病の地藏堂の前を過つて、鴨川の辺に臨みて、いふ〳〵河水に神輿を灌てこれを洗ふ、これを神輿洗ひといへ、今そこの義なしといへども旧きによりてこれを称まゐらして後再び祇園町より西楼門に入り、二基の神輿と共に拜殿に安置す、その供奉四条芝居の役者等の先に提灯を張、外面に各姓名をしるし、高く是を挙く、祇園の町々の家毎に高く提灯を張る、又六月十四日祭礼終りて後神輿三輿社頭に在ると同く十八日の夜二基の神輿ハ直に神輿屋に入るも少将井の神輿ハ今夜の式の如し、凡神輿三基黄衣の法師三人各常にこれを預りて主宰す、

金銀花

ふの部忍冬の条にみるべし、

胡瓜

時珍曰胡瓜張騫西域に使して種を得、故に胡瓜と名く、按ずるに拾遺録に云隋の大業四年諱を避て胡瓜を改て黄瓜とす、正月二月種を下し、三月苗を生ず、蔓を引て葉冬瓜の葉のごとし、四五月黄花をひらき瓜を結ぶ、

玉簪

和漢三才図会　此者葉圓く濶くして末橋の欄干の形に似たり、故に俗呼てぎぼうしといふ、五月花を開く　本草　時珍曰玉簪、一名白鶴仙共に花の象を以て名を命ず、人家栽て花草とす、二月苗を生して叢をなす、高さ尺ばかり、柔なる茎白菘の如し、其葉の大さ掌の如し、團くして尖あり、葉上の紋車前の葉の如し、青白色、頗嬌瑩六七月茎を抽んづ、茎の上に細葉あり、中に花朶十数枚を出す、長さ二三寸、本小に末大なり、いまだ開ざる時ハ白玉の搔頭簪の形の如し、開く時微綻び四出、中に黄なる蕋を吐き頗香し、

秬麨

和漢三才図会　按にいにしへハ餅として毎に食ふ、今ハ唯磨末として團子餅として賤民用ふ

六月

祇園會

七日、十四日

神社啓蒙　二十二社註式に、人皇六十四代円融院天禄元年六月十四日、御霊会と始め今歳よりこれを

行ふ紀事先七日の朝巳の刻大鉾六本各四条通りを東洞院の西に出づる是を渡るといふ六本の鉾各称号ありて其中長刀鉾鬮をとるに及ばず毎年魁首たり二の鉾四条通まで東の方の先になりて此鉾行ざる時は次の鉾過ることあたはず函谷鉾を第二とす洲濱鉾或は放下鉾と称すともに西の方の終りになれり故にこの三本鬮をとるに及ばずその間に鶏鉾 菊水鉾 月鉾 三本 船鉾一本並天神山 飛天神山 占出山 太子山 山伏山 孟宗山 琴破山 白楽天山 郭巨山 芦苅山 蟷螂山 笠鉾山二本 花盗人山 木賊山 岩戸山 舟鉾 以上十七本凡鉾一本後山三本連行きこの山は六角堂において取ところの鬮の次第のごとし相傳ふ長刀鉾の長刀は三条宗近が作なりと民間瘧を患ふるものこれをいたゞくときは病愈るといふ凡鉾毎に長さ十余丈余下に車輪二双を施し左右に大縄をつけて数十人是を引その年役に従ふ小児その上に乗り首に宝冠をいたゞき腰に羯鼓を繋ぎ躍りてともに左右侍立の小童團扇を以てこれを揮揚る笛鉦大鼓ホの物にてこれと拍を凡鉾毎に一本一箇うしろよりひくその大なる物車にのせてこれを引京極を下りて五条松原通りより各本所に還る神輿旅所より至て神を假宮に遷し十四日巳の刻よりまた山渡る第一 辨慶山 その次鈴鹿山 觀音山 八幡山 役行者山 黒主山 淨明山 鯉山 以上八本昨日とる所の鬮の次第に因てこれを渡す凡鷹野山 第十 船鉾鬮をとるに及ばず此鉾三条通西の終りになるによりてなり西は三条より東は京極を歴て四条通まで過て各本所に還る同日午の刻より三社の神を神輿に移し旅所に至る四条通までの西を歴て大宮通御供町より至て三社の神輿を安置し御供を献じ終て後東の方三条通までを過京極と歴四条通までより本山に入る両日前後の祭式古例あまたあり畧之

祇園臨時の祭

十五日 諸神根元抄 天延三年圓融院の御宇六月十五日始て走馬を奉らる勅楽東遊御幣ホの使左少将藤原理兼左右御馬五足あり左右近衛の官人供奉この後中絶す崇徳院天治以後毎年相續す 慈覚大師傳 圓融院天延二年甲戌感心院を以て師に附す 三十二社註式 天延年中祇園の社を以て日吉の末社となす○この臨時祭は慈覚

大師寺務の翌年はじめて行ハる、今猶祇園宮殿の傍に大師の尊像を置、

北野九度詣 九日 〔神社考〕北野の聖廟ハ天慶三年七月十六日右京七条坊の婢文子に託して、右京の馬場に捿んと欲す、其女甚だ賤して営構することあたハず、家の側に祠をせ、天暦元年六月九日始て北野に移す、〔滑稽雑談〕当世に至て毎歳今日九度詣と称して、南門の外弁慶松の辺、或ハ東向観音の堂前より、神前まで往返九度して、神拝をなせり、是聖廟此地に遷座の日なるにより、九度ハ九日の義を用ゆるにや、

木耳取 時珍曰木耳朽木の上に生ず、枝葉なく湿熱の気に生ずる所、木耳木蛾といふ○按ずるに此物多く梅雨の前後に生ず、六月に至て木耳堅く備る、此時取ならし、

麒麟草 漢名未詳、高さ尺余り、茎葉景天に似て小く、其葉浅緑にして鋸歯あり、茎の端に花を生ず、花もまた景天に似て色黄なり、夏より秋に至て其花猶あり、景天の別種か、

金瓜 摂州兎原郡田辺村小路村よりこれを出す、其色黄金の如し、

銀瓜 参州の産、其色白銀の如し、

ゆ

四月

雪見草 卯の花の異名なり〔藏玉〕おとゝもたりうち袖ぬれし雪見草名をこそ雪にてけぬまでむ、

鴨足草 〔本草綱目〕螺厴 虎耳草 陰湿の處に生ず、人亦石山の上に栽、高さ五六寸、細き毛あり、一茎一葉荷蓋の状の如し、葉の大さ銭の状の如し、初生小葵の葉及虎の耳の形に似たり、夏小花をひらく、淡紅色、

兼三夏物

内衣 〔和名鈔〕温室ニ云、澡浴の法、七物、其七ツを内衣といふ、和名由加多比良、論語註〔明衣ハ布を以て沐浴の衣とす、○今ハ夏月平服とする所の木布あり、以てゆかたと云、ゆかたハゆかたびらの畧也、

五月

百合 時珍曰百合の根、衆瓣を以て合成す、或ハ云百合病を治す、故に名く、其葉短くして濶く、微竹の葉に似たり、白花四垂の者百合也、○〔姫百合〕〔鬼百合〕〔袂百合〕〔黒百合〕〔博多百合〕〔車百合〕〔透百合〕〔鹿の子百合〕ホの数品あり、各其頭字の部にわかち入されハ、たづねみるべし、

六月

夕祓 夕の部夏祓の条に出

白雨

月令 此月土潤溽暑大雨時行 漢字和訓 五色線ニ云夏の雨ゟいふこと錦雨といへり 御令 白雨と書ことハ天満の森由已法橋山谷詩にありと申されしを丸執筆の時書始し文字之 離騒註 涷雨ハ夏天の暴雨也

夕顔 和漢三才図会 彼岸の中に種を下し立夏前後に種を移し五六月正白花をひらく日午ハ凋み暮に盛也故に夕顔と称す實を結ぶ早晩の二種あり ○

夕顔や秋ハいろ〳〵のふくべかな　八翁

めノ四月

冥途の鳥 ほとゝぎすの異名 十王経 閻王の卒三魂を縛めて閻の樹下に至るに二の鳥棲掌る一を無常鳥と名づく二を抜目鳥と名づく我汝が旧里に化して鴟鵂鳥とあり怪語を示して別都頓宣寿と鳴ん我汝が旧里に化して烏鳥とあり怪語を示して阿和薩迦とあるん云云 倭名抄 鴟鵂 和名保度々木須

兼三夏物 **めに見ぬ鳥** こと蝶蝈といふとぞ 諸歌未考

飯鮓 毛吹草 和州南都飯鮓 ○世俗まで夏月にすしを賞せる其製多しといへとも京の六條南都の製に限る

みノ四月

水屋の能 四日五日にあり 紀事 南都水屋川の南に水屋の社あり祭る所の神二座素盞烏尊稲田姫なりと云云 此祭ハ伏見院の御宇疫病流行によりて始めて行はるいにしへハ神楽なりしか今ハ申楽四番あり地人能藝を施す也四月四日五日にあり

御形の日 この部賀茂祭の条にあるべし

三月過鳥 ほとゝぎすその異名 躬恒抄 四月五月六月かけてあるにハみつきすぐるといふ

○さみだれの雲間と鳴てすぐるゝおかそへし良のみつきすぐる鳥　大伴黒主

都草 大和本草 細草也四月黄花をひらく花の形豌豆の花に似て色よし葉小なりて三ツにわかる仙臺萩の如くして小なり實ハ莢ありて両々相對す

蜜柑の花 本草綱目 樹の高さ丈餘其葉両頭小尖り緑色にして面光る四月小花をひらく色白くして甚だ香し 大和本草 其花を花橘と古哥によみて

兼三夏物 **短夜**

明安し［月令廣義］夏至の節 晝六十一刻三十分夜三十八刻三十分○［古今］夏の夜のふすかとすれハほとゝぎすなく一声に明るしのゝめ、貫之、○寝入らぬに飯焚家を明安き、冬松、

水鯵［和漢三才圖会］

恵曽魚正字未詳、按ずるに鯿に類して灰色に黄を帶、頭畧蝮蛇の如し、鱗硬く鬐短し、下に碧の線文二三條あり、大サ五六寸より大半に至る、［糸切歯］水鯵水鱧此節を賞して、ひらきて潮にひたし一夜を越て生脯とし用ひ又潮に漬さると其儘用ると、畿内にて切流し、漬流しといふ、ごまと水鯵といふ、

水鱧［和漢三才圖会］

海鰻 慈鰻鱺 狗魚 和名波無、俗ニ波毛、唐音の略なり、俗に鱧の字を用ふるハ甚だ非なり、［糸切歯］五月の頃ハ潮も自然と多し、此時磯辺へよると網にて取る、ごまと水鱧といふとぞ、又一説に鯵鱧の両種を大坂より大和へ送るに桶の水を湛へ魚を漬る、大和川を舟にて引のぼる、大和の土人鯵を身一に賞し、鯛よりも勝まさりとす、彼水に浸し大和へ送るゆゑに名とすとぞ

蚯蚓出

［月令］孟夏月、螻蟈鳴、蚯蚓出［本草綱目］土龍 地龍子 歌女等の諸名あり○時珍曰、術家ニ云、蚓雲と起をべし、又陰晴と知る、故に土龍、地龍子の名あり、其鳴ヲ長吟、故ニ哥女といふ、

海松 みるふさ うみまつ

［崔禹錫食經］水松狀松の如くにして葉なし、［土佐日記］おぼつかなけふハ子の日かあまならバうみまつをだにひかましものを、［源氏葵の巻］はかりなき千ひろの底のみるふさのおひゆくすゑハ我のみぞ見む、源氏

［五月］

みづすまし

［通俗志］［糸切歯］［年浪草］等みづすましハ水馬虫とす、［わくらせも］にハ鼓虫の事とす、青藍按ずるに今も関東にてハ鼓虫をみづすましといひ、わくらせもの説にあらざるもの、猶まの部鼓虫の条、すの部水馬虫の条を見合せてまがひなきをしるべし、

水鳥の巣 浮巣

［字彙］鳥穴にあるを窠といひ、水にあるを巣といふ、［本朝食鑑］菰の集解に云、菰の葉蒲草に類して葛茂す、夏月水鳥此中に宿して以て乳ふ、

［六月］

御手洗詣 十九日より

て晦日まで、

紀の納凉 山城国愛宕郡紀或ハ只洲に作る、下鴨の社これを紀の宮といふ、蓋地名によりて是を称ス、社の東に御手洗川あり、その水清冷にして溢れ流る、是禊を修る七瀬の一ツ、諸人此水に臨て暑を避く、紀事 下鴨の社司、川合の社の前、住吉の東の川辺においてて六月禊を修ス、十九日より晦日に至まて、諸人参詣し、納凉の遊びとなして、林間に仮に茶店を設け、酒食及び和多加の鮎、鯉のさし身、鰻の樺焼、真桑瓜、林檎ホの果を賣、或ハ竹串を以小團子數を貫き焼てこれを賣る、是を御手洗團子といふ、

御禊 神代巻 諸の神たち罪を素盞烏尊に帰て、科之に千座の置戸を以て、遂に促徴髪を抜しむるに至て、以て其罪を贖ふと云、亦曰其手足の爪を抜てこれを贖ふ、已にして竟に逐降ると云云 故に夏禊とこれをせしといふなり、

御禊川 御禊とする川、古より七瀬あり、拾芥抄 川合、耳敏川、東の瀧、松ヶ崎、石影、西の瀧、大井川、

道饗祭 晦日 公事根源 是ハ疫神の祭なり、毎年に必行るべきなれど、近ごろハ絶て侍るにや、鬼魅の他方より京路に入ざらん為に路上に供物をそなへて祭る也、鎮火道饗の祭を、四角四境の祭と申し、

水うけ合 通俗志 にこれといだす、是ハ卑賤の者、夏日炎暑に堪ずして、水練のまねびにて、大勢集て、其興に乗じ、左右にわかれて互に水をあびせかけて、勝負を争ふといふ、

茗荷笋 蘇頌曰蘘荷春初て葉を生じ、甘蕉に似て、根姜芽に似たり、其葉冬枯る、根殖とするに堪たり、其性陰を好む、木の下に在て生るものハ尤美也、

水芙蓉 貞享式 此名ハ新撰なり、芙蓉を和漢ともに秋の部に入れども、水芙蓉といふ時ハ漢にハ蓮の一名とす、倭にハ和らげて水芙蓉と読ども、芙蓉に水を結びたる詞とす、散るといふ詞をそへてハ決して夏より用ふべきなり、秋の芙蓉ハ陸に咲て、凋てちらぬ物なれバ之云云 猿蓑集 附芙蓉の花のちらくとちる 云云、ちると云言をそへて夏の句とせられ、證句とすべし、

水葵 こくうせも 本名蓴、又鳧葵とも水鏡ともいふ、葉ハ蓴に似て夏黄花をひらく、又白花のもあり、

水中に生立て潔し、人家近き池にも生ぜざれど、依て見られる人稀也、こあぎさと水葵とおぼえたる葦まじりて浮蕾ハ秋なり、碧花なり混ぞべからず、

志

四月

白重

〔桃花菜葉〕

白重表裏

白茎平絹更衣の時上下にこれを著

薔薇

時珍曰営實牆蘼 此草蔓柔ヿ靡き牆に依て攀て生ず故に牆蘼と名く、其莖棘刺多く、其子簇て生じ、営星の如し、故にこれを営實と名く、又曰春嫩き蘖を抽んで、既に長ずるときハ叢を成す、蔓に似て莖硬く刺多し、小き葉尖て薄く細なる齒あり、四五月花さく、四出、黄心白色、粉紅の二色あり、實を結び簇て成る、生ハ青く熟すれバ紅なり、人家に栽玩ぶもの、莖一粗葉大に延長なるを數丈、花も又厚く大に、白黄紅紫の數色、百葉八出、六出のものあり、〔大和本草〕野薔薇花白く單也、野に多し、

新樹

もの部若葉の条に出す、

茂り

〔元帝纂要〕夏草を茂草といひ、木を蔚林茂林といふ、

棕櫚の花

時珍曰三月木端莖中に於て、數の黄苞を出す、苞中に孥あり、列をなし、乃花を孕める、状魚腹の孕子が如し、是と〔椶魚亦椶筍といふ〕漸く長じ、苞を出すときハ花穗を成し、黄白色實を結び累々として大さ豆のごとし、

芍藥

蘇頌曰芍藥春芽を生じ、叢をなす、莖の上に三枝五葉、牡丹に似て狹く長し、一二尺、夏のはじめ花をひらく、紅白紫の數種あり、子を結ぶ、牡丹の子に似て小し、秋時根を採る、○時珍曰芍藥ハ婥約の如し、婥約ハ美好き貌、此草花の容婥約なり、故に名とせし、○董子曰芍藥一名〔將離〕別んとする時これを贈る、○花の宰相、えびす藥、えびす草、貞好草、木の異名あり、其頭假字の部にわかちて註しおきぬ、

胡蝶花

〔和漢三才圖会〕扇是今云胡蝶花なり、四月花をひらく、状鳶尾の花に似て小し、灰白色黄の紋あり、實を結ばず、一種小著莪あり、大にして長六七寸、石菖の葉の葦のごとし、花もまた小し、浅紫累菖蒲の花に似て小く美し、愛すべし、

白及

けの部蔥の条に註せ、

羊蹄根

きの部羊蹄花までの条に註す、

四手孔

田長 ほとゝぎすの異名あり或書にいふ此鳥農業を催さんため四月のころ来る田を作らず則作るも時過ぬ又ハ熟せざると啼云云田長の名是による○越谷吾山いはく凡諸鳥皆三指只杜鵑のミ四指ありその樹上に宿するときハ二指前に向ひ二指後にむかふ四手の田長ハ是をもて名つく或ハ死出とあるものハ非也

古今

いくばくの田をつくればかほとゝぎす
しでの田長を朝なく〳〵よふ　藤原敏行

蜀魂 ほとゝぎすの異名あり 蜀王本紀 望帝其臣鼈靈が妻と淫して乃ち位を禅りて亡去ぬ時に子規なく故に蜀人杜鵑の啼を見て望帝と悲む

謝豹 五雑組 蟲之羞を以て死す人をミれバ足を以て面を覆ふ羞る状のごとし此虫杜鵑の声を聞バ則死す故に杜鵑を又謝豹といふ

賤鳥 ほとゝぎすの異名なり

○名ゆゑものゝ山里になく
しづ鳥ハ卯花ぞのを都とやおもふ

鹿の袋角 和漢三才圖会 鹿茸 俗にいふ袋角 茸字草の生る貌俗に以て蕈菌の字とす鹿の角初て生ず未開かざる蕈に相似たり故に然して長さ二三寸尖ら

ず堅からず本草云鼻中にて嗅べからず小白虫ありこれを視れども見えず人の鼻に入て顙を虫くふ薬も及ばず

兼三夏物

新茶 古茶 紀事 此月茶を製しをはつて諸方の人壺を携へ新茶を領納し然後に壺を山岑清冷の地に寄て盛暑土用の暑湿を避く洛外愛宕山宜とす九茶を製するに前後の次第あり故に摘茶の時稽邨の時擇茶の時といふ○古茶とハ新茶に對するの名新古ともに夏（本字とも、）

紙帳 紙をもて作つくる蚊帳なり、まづ貧しき者是をもて蚊を避く

紙帳賣 用捨箱 飛鳥川に云むかし夏近くなれバ紙帳かう、冬になれバてんとくじ（紙衾　あり）といふ物を商ひけるが今ハなくなりし云云 此飛鳥川ハ享保出生の老人の筆記なれバ元文寛保の頃までハ此商人来りしなるべし○向の岡（延宝八年刻）

夕立やいかなる中にも紙帳賣　立圃

虵鮓 毛吹草 越中（の松皮鮨俗に虵の鮨といふ龍に似たる故也）

鹽烏賊 南越志 其性鳥を嗜む毎に自ら水上に浮ぶ飛鳥是を見て死せりとしてこれを啄む乃巻

取て水ふ入ることを食ふ因て烏賊と名づくといへるハ烏と賊害へばく【ヨミくせ也】夏季ふ用ふるハ邊土山中ぞらの海濱ふ遠き田舎のことなり、江戸大坂ホの繁花ふハ生烏賊春より四五月ふ至て、最中ありて、塩烏賊と用ふることなし、

新麥 【本朝食鑑】早きものハ三四月熟し、晩きものハ五六月熟す、是新麥の候なり、

蓴菜 【和名抄】蓴（和名沼奈波）【潛確類書】水中ふ生す、葉鳧葵ふ似て水上ふ浮ぶ、花黄白子ハ紫色、三月より八月ふ至て莖細く釵の股の如し、黄赤色短長水ふ随て深浅あり、名づけて蓴菜といふ嫩ふ遂くて、味甘く寒あり、十月漸く粗硬し、十一月萌泥中にあり、

紫蘓 時珍曰蘓ハ穌ふ从ふ音酥舒暢なり、蘓の性舒暢ふして氣を行て、血を和すことと蘓といふ、紫と云ハ白蘓と分こ、

蟭螟 蚊の睫ふ巣をくふ虫なりといふ【傳燈録】仰山洪恩禪師ふ問ふ、如何ふして見性を得ん、師の云ふことへバ蟭螟虫の蚊の睫ふありて巣を作るがごとし、

五月

續命縷、朱索、條達 ちの部長命縷の條下ふ見るべし、

菖蒲刀 黒川道祐曰、端午ふ用ふる處の木刀或ハ菖蒲刀といふ其形の相似るを以て、節物ふ准へてこれと称、兒童腰間ふ横ふ、端午石戰の戯の後ふ、多くこの刀を以て相戰ふ、これを菖蒲切といふ、菖蒲と勝負と和音相近し、一戰勝負の義ふ寓するなり、

神水 【金門記】重五の日午の時雨ある時急ふ一竿の竹を破れバ竹節の間ふ必神水あり、瀝を取て獺の肝と以て丸すれバ心腹の積聚を治す、【紀曆撮要】今日雨ふるときハ来年大ふ熟す、

新宮祭 昔三井寺の山中ふ於てあることを執もて祭る所ゝ神、新羅明神なり、【元亨釋書】新羅明神ハ天安二年円珍師（智證大師）船と遂て唐より帰る洋中忽ふ老翁船舷ふ現て曰、我ハ是新羅國の神、誓て師の教法を護持し慈氏の下生ふ至らん、語已てミえず、〇三井寺山下の土人今これを新宮祭といふ、〇大津所々祭多き故ふこれを關祭と誤つておもへる者あり、關祭と称するものハ貴船明神の祭なり、貴船の祭、關明神の祭ともふ逢坂山ふありと、其説迭ふ異ゝ猶考ふべし、

賑給 【公事根源】ことハいやしき民に米塩などを給ふことなり京中の條理小路を分て撿非違使承りて是を引米塩の勘文などを申その侍る也大臣陳につきて是をさだむ欽明天皇の御宇よりはじまれる貧窮の者給ふこと禮記月令にも侍るにや【西宮記】東の手ハ愛宕寺北の手ハ右近の馬場西の手ハ右兵衛の馬場、

諸鳥毛と革る はの部羽族 鳥の条に註す、

麦門冬の花 【大和本草】葉厚く五月に茎立て頭に穂の如く、長く連なる紫な花をひらきて實なる秋熟す、

下毛の花 【大和本草】繍線菊に木なり、叢生す臘月早く萌生す、四月花とひらく、あつまり開きて盛久し、真紅あり淡紅あり、愛すべし、葉ハきちうけに似たり、漢名未詳

越瓜 時珍曰越瓜地と以名くるなり、俗に稍瓜と名つく南人菜花と呼ぶ、三月種を下し苗を生じ地に就て蔓を引、青葉黄花夏秋の間に實を結ぶ、

新茄和 世人茄子の拌和豇豆の棒和といへり、其形状拌に似棒に似たる哉

名ともせんきせん こ、五音相通なり、**白ぞえ** くの部黒ぞえの条に註す、

六月

勝曼参 朔日 【元亨釈書】推古天皇十四年秋七月、太子（聖徳）御に對して勝曼経を講ず、太子曰吾昔勝曼夫人たる時釈迦世尊此経を説く故に吾よく此経を講ず、講巳て蓮花を雨らすこと大さ三四寸、義疏を製して世に傳ふ○當寺勝曼院の号、太子此道場に於て又此経を講じたまふ故に寺号となる、摂州四天王寺の西門西北百歩ばかりにあり、本尊愛染明王毎年六月朔日開帳あまと愛染参と云、

神今食 【江次第】六月十一日神今食 （其式略す）行幸あるときハ中和院において行ひ行幸なきときハ神祇官に於て行なる【公事根源】神今食年に両度あり、

志渡寺祭 （十五日より十七日迄）讃州寒河郡補陀洛山清光院志度寺 （眞言宗）【縁記】本尊十一面観世音是補陀洛界の観音の御直作なりとぞ本尊御衣木ハ継躰天皇十一年近江國高島郡三尾崎白蓮華谷より流出湖水に漂ふこと七十年崇峻天皇御宇湖

水より又宇治川ゟ流出山城國淀の津に止るとこ三ケ月、夫より海中に流出漂濤ふること數十年、推古天皇三十三年當浦の高嶋と云小島の磯辺に流よる。高麗の恵智法といふ者、彼木に瑞光あるを見て引あげ、前月に經て觀音大士童子と化現し、十一面の尊像を刻ミて暮には了子の刻に開眼等まして終と云　寺説に云この堂ハ藤原不比等公（淡海公）當浦の海人に契を結び給ひ不背の珠を龍宮城より　とり返しまゐらせし海人の死躰を葬りし所也、故に志渡寺ともいふへし、死渡寺といふ、天武天皇一年（辛巳）その暮に、精舎を建立し、死渡道場と名つく。抑志渡祭ハ房前大臣、天平九年丁丑四月十七日薨ず。房前公當浦に下て給ふ時、庶民に慈悲をくまれ玉ふの故に庶民その恩沢を報ぜん為、六月十五日より十七日まで三日夜の間これ海人の墓に於て水祭となす、此日諸人交易して市をなせしことを祭といふ。房前大臣の薨去ハ四月なれども農業の障ある故に六月に祭ると今日國主警固の義あるへし

溽暑

月令　季夏土潤ひ溽ひて暑し　注云　溽ハ濕なり、土の氣潤ふが故に蒸鬱として濕暑となる

清水

説文　岩間に出ると瀞といふ、瀞を清徹る水、石間にあるを云　御傘　清水ハ雑之、結ぶとよみて夏之、堰る夏之云　貞享式　清水ハむすぶといへる詞をそへて、古抄にハ夏とあせきど水の清涼と称まなバ其詞にも及ばざらん、云　堰結ふの詞に及ハず清水とばかりと夏季とせしハ、例の蕉門の新義をまするべし、

白梵天

和州田村の梵天瓜也、あゆうの白つくる、　和漢　種南都にも東くなり、

醤油造

三才

醤会　醤油、倭名比之保、本邦の俗油の字を加ふ、醤油ハ本草に載る豆油なり、

ゑ　えの部に従せ出ス、

ひ

四月

翡翠の簾

あの部青簾の條に注、

平野祭

此祭今絶たり、祭る神五座ゆへに北野天神の西にあり、貞觀元年十一月九日始て祭祀あり、寛弘元年四月十日臨時の祭あり、しまぞ、

廣瀬祭、龍田祭

四日〇廣瀬の社ハ大和國廣瀬郡河合村にあり〇龍田の社ハ同國平群郡龍田にあり　公事根源　祭の日ハ癸卯あり、年に二度行らる、使ハ前日こら大き

忌風神の祭といふ是なり、【増山の井】廣瀬ハ大忌の神、龍田ハ風神なりて風水の難を除き豐年の祈ふ公よりの祭らるゝ

日吉祭 山王祭なり、さの部ミるべし、

美人草 【名花譜】花四瓣色艶罌粟ふ類して小なり【古文前集】曾子固ヵ虞美人草の詩の題注ふ云項王亡滅して虞姫自刎ぬ、其墓の上の草と人呼て美人草とも同く詩ふ云青血化為原上草○一種虞美人草といふ者あり異種之 【兼三夏物】

單物 【釈名】衣の裏なきを單衣といふ

日傘 夏日日を禦ぐ傘ハ白紙或ハ青紙を以てこれを張荏の油を用ひぞこれを日傘といふ、

冷麦 きりし麦【青箱雑記】湯餅温麺くハ丸麺を以食ともこれを煎ると皆湯餅といふ、【貞享式】冷麦冷汁この二品ハ京家の式目ふ多くハ秋の季とあせるハ察るふ冷の字の惑ふや夏ハ涼を好ミ秋ハ冷を悪む天地自然の道理にして、此等ハ夏と決すべし、

冷汁 煮冷 夏月羮を調和して其器ともふ冷水ふ浸し氷のごとくならしめてこれを食ふ是を煮冷冷汁といふ、

干鱧 【和漢三才図会】風海鰻、海鰻十頭相聯て白煮ふ作り形竹枝の如きもの是夏秋これを賞む纖く刻ミ酒醤ふ和して膾ふ代ふ、

干河豚 【同上】名護屋鯸なり、背黄赤ふして白點あり棘鬣なく腹白し、味美ならも惟皮を剥てこれを乾し、皮鯸と名づく夏月曬して是を食ふ

蛭 【同上】蛭ハ水中の濕ニ生ずるもの海帯昆布を久しく雨水ふ浸すときハ共ふよく化して蛭となる、性石灰食塩を忌む試ふ塩を蛭ふ點れバ盤縮て死す、

蟾蜍 蘇頌ヵ曰蟾蜍多く人家の下の湿處ふ在り形大きく背上ふ痱磊多し、行こと極めて遲く緩し跳躍ことあたはず鳴き、【抱朴子】蟾蜍千歳頭上ふ角あり腹の下の丹書さ肉芝と名づくよく山精を食ふ人これを食ふことを得れバ仙となるべし術家取用ひて霧を起し雨を祈り兵を辟け縛を解く今技ある者蟾を聚て戯をなさしむ指使をきく、

晝寝 【笈日記】ひやくと壁をふまへて昼寐かな 翁、支考評曰此句ハいかふ聞やと翁の申されしハ是ハ只残暑とこそ承りて候へかあらなバ

蚊屋の釣手などやうまくみながら、おのがへきことをおもひゐたるに人あらんと申侍れバ、此謎ハ文考ふしられたうして笑ひてのミそてぬるうし云、

五月

辟兵繒 ちの部 長命縷の条をみるべし

闘百草を 劉公嘉話 唐の中宗の朝安樂公主端午ふ百草を闘ハしむ其物の廣きを欲し馳驛してこれを取らしむ又他の人ふ得られんことを恐れ其餘ハことごとく剪弃つ○歐陽公闘草詩ニ云共闘今朝勝盈檐百草香

ひとつれ日 さの部左近の真手番の条ニ注セり

未央柳 園史 金絲桃その莖幹二三尺叢生て其葉柳ふ似て梅雨ふる時黄花をひらく、桃ふ似て其長くして金糸の如し、

姫百合 時珍曰、山丹其葉長くして狹く尖りて、柳の葉の如し紅花六瓣四ふ垂ざる者山丹あり、四月花を開く根少ふして瓣少ふし、

菱の花 時珍曰芰一名菱其葉支散故ふ字支ふ從ふその角稜峭し故ふこれを菱といふ三月蔓を生して延引葉水上ふ浮ぶ扁ふして尖あり光面鏡

の如し葉の下の莖ふ股あり蝦股のごとし一莖一葉兩々相差ひて蝶の翅の如し五月小白花をひらく日ふ背きて晝合し宵ふ舒き月ふ隨つて轉移す、

穇蒔 時珍曰穇ハ乃粘さるの稗、山東河南ふ亦五月これを種う

枇杷 廣志 枇杷ハ冬ミ華さき實黄ふして鷄子の如し小さきものハ杏の如く味甜く酢し一書ふ云其木陰密婆娑として愛すべし四時凋まず葉驢耳の形ごとふす毛あり盛冬ミ白花をひらき三四月ふ至て實となす毬を作して黄梅の如し皮内甚ミ薄く味甘く核小栗の如し、

六月

氷室 日本紀 仁德天皇六十二年五月額田の大中彦皇子闘鷄ふ獵して時ふ皇子山上より望て野中を瞻玉ふふ物あり其形廬の如し仍て使者を遣ハして視せしむ還り來りて曰窟あり因て闘鷄稲置大山主を呼んでこれを問て曰其野中ふあるハ何の窟そ啓して曰氷室ありと皇子その氷を將來りて御所ふ獻りて天皇これを歡ミ玉ふ是より以後毎ふ季冬ふ當て必氷を藏め春分の始ふ至て氷を散る、

氷室御調 公事根源ニ氷司四月一日

よりて九月の月盡まで、是をたてまつる、

氷のおもの（ひ）　**氷水**（ひみづ）（氷のおもの）

とハ熱月（ねつげつ）なきえ、御膳にも氷を用ゆるといふ、氷水と云ハ源氏物語にもこゝえさりハ、註ニ云氷水（ひみづ）と云、［枕草紙］いミじうあつきひる中にいかなるわざをせんと、扇の風もぬるしこほり水に手をひたし、云々○室の氷のとけたるをひみづと云、

氷室の雪（ひむろのゆき）（氷室の雪とハ、氷室にかこひおきたる雪をいふ）、**氷室の櫻**（ひむろのさくら）

青藍疫なるに氷室作（つく）る山のいと寒さまさバ季夏なれど暑氣をうけて漸（やうや）く咲いでたる櫻とてあるべし、［千載集］小野の氷室山のこゝに残れる櫻をみける時「下さゆる氷室の山のおそざくらきえのこりける雪かとぞみる　仲正

［奥の細道］芭蕉翁紀行　六月九日湯殿山に登らんとする条に云、腰かけてしばしやすらふほど三尺ばかりなる櫻のつぼみ半ひらけるあり、降（ふり）つむ雪の下に埋れて、春を忘れぬ花のこゝろわりなし、

氷室守（ひむろもり）　六月

と櫻にあるや氷室守、蓼太

一夜酒（ひとよざけ）

［公事根源］一夜酒とハけふつくりてあれハ供ずるゆゑ一夜をへくる竹葉のさけあれバ、一夜ざけとも申し、又こさけとも申す

（ゐまざけ同事）［本草綱目］竹葉酒ハ諸の風熱病（ふうねつびやう）を治し、心を清くし意を暢（のぶ）、淡竹（はちく）の葉の煎汁にて常のごとく酒を醸（かも）して飲む、［延喜式］醴酒ハ米四升糵（もやし）二升酒三升と和合して醸し造る、醴九升を得、此を以率として日に造る事一度、六月朔日起て七月三十日に尽く、日に供を六升、

鎮火祭（ひしづめ）

［公事根源］卜部氏の人、火をもちて宮城の四ツのすみにて祭る事あり、火災をふせがんためとかや、此祭礼の間、紛紜多く侍る、

日盛（ひざかり）

杜甫苦熱行ニ曰祝融南来鞭火龍火旗焰々焼天紅日輪當午凝不去萬國如在紅炉中、

雲雀鷹（ひばりたか）

ねの部練雲雀の条に出つ、

火蛾（ひとりむし）

［和漢三才圖會］燈蛾、燭蛾、俗云火取虫、按ずるに蝶の小なる者を蛾（が）といふ、其種類亦多し、蠶蛾の羽化（うくわ）するもあれど、蚕蛾（さんが）とも燈蛾（とうが）多く、雀の甕より出ツ、大さ五六歩、黄蝶（きてふ）に似て色枯渇くもの也、夏の夜燈燭（ともしび）をかゝぐる時ハ火を奪（うば）はんとするがごとく、數囘して終に燈油中に投じ死す、故に愚人色欲貪欲の為に身命を抛（なげう）ちて燈蛾に譬（たと）ふ、

百日紅（ひやくじつこう）（さるすべり）

［格物論］紫薇（しび）花俗に怕痒花

と名く樹身光滑之高さ丈餘花瓣紫皺蹭蹬茸茸赤きさ莖葉相對也四五月始て花さく開謝接續して六七月ふ至るべし三才圖会 紫薇俗ふ百日紅と名く其皮を搔くときハ自ら動故怕痒花と名く大和本草 紫薇花を以て百日紅と又猿滑と号く

鼓子花

時珍曰其花瓣をふきむも状軍中に吹所の鼓子のごとし故ふ旋花鼓子の名あり和漢三才圖会 此花牽牛花の如ふして粉紅色日干ふ盛んふして且暮ふ萎む故ふ俗牽牛花を以朝顔と称するふ對して此を昼顔と名く

未草

本草ニ時珍曰孫公路北戸録ニ云睡蓮あり萍蓬草のたぐひ之其葉荷の如くして大なり其花葉ふ布て數重夏の晝ふ當りて花をひらく夜ハ萎みて水ふ入晝亦出ることを出す、○和俗ひつじ草と称も上の説のごとく未の時より花萎む故とおもへり江湖ふ多し

射干

からもも あきくさの部ふ入るべし、

瓠花

時珍曰壺盧數種あり名状一ならず其實一類各色あり並ふ正二月を以て種を下も苗を生ぜ蔓を引て延縁も其葉冬瓜の葉ふ似て稍円ふして柔毛あり嫩き時食ふべし故ふ詩ニ云幡々瓠葉采之亨之五六月白花をひらく實を結ぶこと白色大小長短各數種色あり大なる者ハ甕盎となるべく小なるもの瓢樽となすべく腰舟として水ふ浮ふべく笙として以樂を奏べし、

莧

和漢三才圖会 莧藍ふ似て微圓く皺あり六月細花をひらき穗をなして子扁して光り黒く鶏頭子ふ似たり人ハ莖葉を採て蔬とも赤莧ハ莖葉赤紫色高きもの三四尺畧雁来紅ふ似て美し五色莧亦十樣錦ふ似て共ふ庭園ふ種て愛べし 農鑑輪 黎莧此三種ハ夏季ふ採菜ニ

姫瓜

瓜

和漢三才圖会 姫瓜ハ俗称菓瓜五六月小く瓜を生ズ大さ二すむかり圓して浅青色味苦く食ふべからず熟せるときハ稍く黄微甘しとえども食ふふ堪ず 雍州府志 元條の田間より出ツ大さ梨のごとし其色至て白し故ふ姫と以てこれを称ミ女兒ノの瓜と求て少し莖をとゞめ白粉を其面ふ傅黒を以て髮鬢眉目口鼻を書き水引を以て其莖を結ひ提挈て玩具とせ 續猿蓑集 姫瓜や袖ふ入てもをもかもし至暁

醬造

時珍曰大豆の醬、按するふ劉熈が釈名ふ云醬ハ將也よく食物の毒を制も將の暴惡を平ぐるが如し○製法畧之

引飯

かの部ふし飯の条ニ出ツ

冷水賣 江戸の街頭ニ手桶一荷とおろし炎暑ニ冷水をうる

孟夏旬 扇と賜 扇の拝 年中行事歌合 夏冬季あらたまる始ニ臣下ニ御酒をたび政をきこしめす之旬とハまつりきの政事のなきを至ふ之旬ニハさもなくの義ニ乃ハ内裏あくらしく造らせて初ニ南殿出て行せとまふとハ新所の旬と申ふ後此四月の旬ニハ内侍扇ともて上達部ニたまへんとひきまこつきて請取作法など有也

杜本祭 上の申 ○河内國安宿郡國分村祭る神二座斎大人神、経津主の命ニして香取大明神是なり。公事根源 杜本祭四月上ノ申 日ク神社河内國ニあり。年の日使たつ。仁和五年四月ニ祭初る。河内志 杜本の神社ハいにしへ古市郡駒ケ谷村ニありて式ニ安宿郡ニ属せしとあれども一向その所をしらず。云〻駒ケ谷村と國分村と領つゞきの故ニや、或ハ去国分村火の谷と申ところを當時杜本の宮と唱へ来る〻。古代ハ杜本千軒とて坊舎千軒ありて勅使参向ありしよし申傳ふるし。その近辺土中より古瓦など折々堀出せしといへども、社頭と申ておさえぞも、大木の樟ありて、その木小藤のつらはとひ春ハ花咲うるま〻常ならぬ木立なる神木と申傳るのところ、四五十年以前山田の日蔭とあるを以て山の持ぬし善九郎といふ者、件の樟を伐りしをり斧ハぬけて柄ばかり残りて俄ニ山一面ニ焼出、件の斧ハ善九郎か家のうちへ飛来る程なく善九郎か妻病死せ火の谷明神の影向をこゝろへざる事やと村中騒動してとりいへぬ小祠を建て神楽を奏し神慮を慰め奉りぬ、この崇りによりて杜本の宮の事、穿鑿せるの所善九郎方ニ古き書物の證ともなくきの件の善九郎もこの節次第に死果ゆうやく九歳の孫一人残ありしよりて親族どもうち寄書物穿鑿していう出しゆるとあらハその木を伐ニやとゞまりてるものゝ末孫、今ニ明神と異名を呼来まり近年國分村の技郷ひろん所と云処より信仰し奉りて小社の上ニ覆ひとまつりひ九月九日御酒燈明を捧けて祭ることゝ○延喜式ニ杜本祭夏冬四月冬十一月並ニ上の申の日まとこを祭るよしみえさりいくさまの古きこ神社ならん今考ふべき物なし善九郎より取出せる筆記ハいかならる事ら記しありしん見まほしくそおもえる

諸蔓 かの部加茂祭の条ニ出

文字摺花

【大和本草】莖の長さ尺ふたらぬも、葉ハ百合のごとくして狹し、四五月ふ花をひらく紅白色、花連ありて小く一莖ふ十餘つらなりひらく、紫蘇のごとし、園ふ植て賞翫も、

【五月】 **ちまきゆひ草** 或人云粽ことと證云未考、

藻苅、藻舟、藻の花 時珍曰藻ハ水草の文あるかれ潔淨澡浴あるがごとし、故ふこれを藻といふ、二種あり、葉の長さ二三寸、両々相對も、即馬藻之葉細ふしく、絲及ひ魚の鰓の状の如くふして節々ふ連りて生も、即水蘊あり、俗ふ鰓草と名づく、【和漢三才圖会】時藻 水蘊 和毛毛一ニ曰毛波、海人舩ふ乗て出て、縄を以て腰ふ繋ぎ、水ふ没てこれを苅取て田ふ投、稲を養ふ、

餅梅 名義未詳、梅子ハ梅雨の時熟も、其肉黄、熟して更ふ粹なく、液多きかれ、疑らくハ是を餅梅といふべくや、和俗果穀の類の粘るものを呼で餅と云、此をいふか、

採瓜 越瓜胡瓜をもいふ、縦ふ切劈、横ふ割て、塩を糝てあまりを流ひ、水を去て、醋ふ和して食ふこれを採瓜といふ、

廿

【四月】 **千團子** 十六日

○一本ふ千誕子ふ作る、江州三井寺の鬼子母神へ今日諸人參詣も、この神一千の子ゆゑを以て享るに飴一千と供ろく、故ふ千團子といふ、

石蔛 一名いもしのね いの部ふみるべし、

【五月】 **赤靈符** 抱朴子或人兵をさくるの道を問ふ、答て曰、五月五日を以て赤靈符を作り心前ふ著、

蟬 初蟬 空蟬 【格物論】蟬両翼啄長くして腋の下にあり、或ハ以為口なし、腸を以て鳴者之、云種類多し、枚挙あるふ遑あらず、畧之○空蟬をへての蟬ともいひ又かぬけるるといふこと古哥のとも多し、

石竹 なの部撫子の条ニ注す、

栴檀の花 棟之あの部ふみるべし、

石菖 時珍曰石菖水石の間ふ生ス、葉ふ劔脊あり、瘦根密節、高サ尺余なるかれハ石菖蒲之、人家砂を以てこれを栽ること一年、春ふ至て剪洗ふ、愈剪バ愈細ふなる之、高サ四五寸ふ、葉韮の如く、根匙の柄の如し、粗き者亦石菖蒲之、甚しきとされハ根の長サ二三分、葉の長さ寸ばかりなるを銭蒲といふハ是あり、按ずるふ、臞仙神隠書ふ云石菖蒲一盆を几上ふ置、夜の間書を視る時、煙を収て目を害あるの患なし、

【六月】

施米 公事根源 施米東山西山北山などいふ所の山寺に侍るたつきなき法師ばらに米塩を施さるゝ事なり、五月賑給六月施米ハこれ貧窮孤独の者に米をたまふなり誠にありがたき事なり、

蟬の諸声 多く鳴るをいふ 玉吟 鳴立てとよむもなつや木隠れの雨よりもまさるせミのもろこゑ　後柏原院

蟬時雨 蟬の多く鳴立るをいふ、按ずるに、蟬の鳴声の多くかしましきを、時雨にたとへていふなるべし、

蟬の脱 脱ハ虫の皮を解をいふ、是を蟬退 枯蟬といふ、

せごし鱠 （との部沖鱠の条に注せし、）

す

四月

住吉卯の祭 初卯 紀事 四月卯の日摂州住吉祭相傳ふ卯の日此地に垂跡ありと二の神輿一基瑞籬の外より三の門に至りて遷幸ます神主及祢宜各卯杖を持、これをうずれ草といふ、○祭の日竹馬煎餅を鬻く者多し、

菅の宮祭 中午 神社啓蒙 小津の神社近江國野州郡に在祭所の神三座所謂大宮二宮三宮是なり○神幹ハ宇賀魂也と世に小菅の宮祭と称せし、

菅笠擔 （くの部関白賀茂詣の条に注せし、）

篠の子 和漢三才図会 篠ハ小竹、叢生して草の如し俗に笹の字を用ふ凡篠に数種あり、馬篠 兒篠 焼葉篠 五枚篠 此等の筍皆篠の子なり又一種 長間竹 俗に奈伊竹といふ 長間筍 篠笋 諸州ともにあり味ひ苦ミ多くして甜ミ微なり、多く食ふに耐ず、

兼三夏物

涼し 風土記 仲夏長風扇暑 注云此節東南の風常にあり俗に黄雀長風と名づく、

鮨 和漢三才図会 鮨を醸る法塩少し糝しまぜと壓をそこ一二日にして熟る○宇治丸、鮠鮨、をこく鮨、釣瓶鮨、早鮨、一夜鮨、飯鮨、月夜ホの鮨あり、其頭字の部にわかちて註しゐて、

雀鮨 毛吹草 摂州福島の雀鮨是也江鮒といふ魚あり、その大さ雀ほどありて魚の腹に飯を多く入るが膨れて雀の形によく似たり、依て名とせし、

馬齒莧 倭名抄 馬莧 （和名宇萬比留）○時珍曰馬齒莧其葉比並して馬の歯の如し、園野にまゝこれを生ず、六七月細花をひらき小く尖る實を結ぶ、和漢三才

〔圖會〕其性剛強にして倒檣の間に懸る事日を經て猶活を景天草の強がことし、〔大和本草〕此草を軒にかくれハ馬蚿内に入らずと云、

五月

住吉の御田植

廿八日 〔摂陽群談〕摂州住吉神田を植る以て神事を行ふ、相傳ふ、神功皇后三韓を征したまふハ、歸陣のとき、長門國より植女をめして五穀農業のことを世に廣くしらしたまふ、その季乳守の遊女をしてうゑさせたまふより、遊女今に早をと女とつとむといへり〔紀事〕

〔追加〕泉州堺乳守の妓女のうち、約するところの、奉公年季明けさる女三人来りてさまを植、今日神殿を植てのちハ妓院の暇を出すといふ云、住吉の御田ハ古き画にもみえて紅染の千早に似るを着し、赤き袴に市女笠をいたゞく、是古代の姿の残れる也、今ハたゝ植る真似をなすのみなり、

水馬虫

漢名水黽 〔わくらせて〕其身細長く五六分ばかりの黒き虫く、長き四足あつて、身ハ水につかず水上を駈ること馬のごとし、依て水馬と名づく、畿内西国にて塩売、江東の児童シヲミホといふ、筑紫にてアメカタといふ、其臭地黄煎の臭し、関東ケンボツホウ○其色黒赤にして鰹節に似たり、故に鰹虫といふ、一説に此虫味甘く、錫に似たり、故に錫売○今江戸の方言にアメンボウといふ、

忍冬花

忍冬くさの部なるべし、

透百合

〔和漢三才圖会〕白黄紅の數種あり、上に向ひてひらく、花瓣鮮明にして美く、奥州より出づ、

末摘花

ハ部紅藍の条に注、

李

〔八閩通志〕食貨ノ部云李其品一ならず、白李赤鶯も、黄と名づく、實清く脆し、五六月熟す、臙脂李ハ皮肉共に紅あり、味甘く、夏熟す、琥珀李ハ皮紅にして肉黄く、味微澁し秋熟す、

六月

住吉の御祓

同火昏 晦日 摂州住吉の社僧御祓を修すること、〔紀事〕六月小盡にハ二十九日を用ひ、大なれバ晦日を用ふ、當日毎年神輿を舁の輩、住吉の松原に宿し、潮に浸て垢離とるしハ今朝神輿一基を宮前に寄せ、社僧祝詞を誦して神をうつしまうして後、社司六七十員騎馬にて奉供す、既にして神輿堺の御旅所におもむく、是より先社僧六七輩、素絹を着し、茶磨笠をいたゞき騎馬にして神に先だちて堺におもむく、即神を旅所に遷して又祝詞を誦す、

夜ふ入神輿住吉ふ還幸殘の市民手每ふ炬を点して之を
とむハ迎送相連りて白晝の如しこれを火替といふ、こ
の日大和國神妙寺山の土をとりて神輿ふそなふ、これを壊
の宿院神事、あるひハ名越の祓、もしくハ荒和の祓といふ、

菅貫（すがぬき）ちの部茅の輪の條ふ註き、

納涼（ゆふすゞみ）〔炭俵集〕夕すゞみ　橋すゞみ　あすゞみ　あぶ
あつき石ふのぼりのぼり　野波〔五元集〕
千人の手を欄干や橋すゞみ　其角

涼臺（すゞみだい）〔開元遺事〕長安の富人暑伏の中ごとに林亭の内ふ於て畫柱を植錦を以て結ひ涼棚とそ座具を設け、名妓を召て同しく座せしめ、遊ふ相避暑會と

すゞしき玉〔秘藏抄〕そらもまていさごとてらも、も月の色ともすゞしき玉の影なとぞらる〔朗詠〕燕昭王招涼之珠當沙月ニ兮自得○すゞしき玉ハ燕の招涼珠といふ也、

菅刈（すげかり）〔和漢三才圖会〕菅本綱ふ載もて、蓋荊三稜の屬ふして根異あり、斎と蚊帳釣草との異なきし按もる小菅の葉ハ茅ふ似滑澤ふして莖ふ白粉ありと云○今云菅ハ葉ふ劔脊ありて硬く皺きて、莖の本白し、別ふ一莖を抽んで穗を出き、六月葉を剪て乾せバ白色、笠ふ縫ひて美あり、

蟕（すくもむし）時珍曰其狀蠶の如し、大さ身短く節促て足長く毛あり、樹根及び糞土の中ふ生ずるもの外黃内黑旧き茅屋の上ふ生ずるもの外白内黯皆濕熱の氣薰蒸て化生ス、夏より秋ふ入、蜺て蟬となる、

水飯（すゐはん）〔洗飯〕〔源氏物語〕常夏巻ニ云おほみきまゐり、ひみつめして、すゐはんなどとりぐにさうどきつゝくらふ云〃○弄花云、干飯などの類水つけ○或御說ニ、すゐはんとて、公家にも云飯とありして、あらひて食ふ物也、

追加

い

〔五月〕**天仙菓**（いぬびは）〔月令博物筌〕新州の山中ふあり、花なくして実を結ぶ、枇杷ふ似て小さし、小児好んで喰ふ、

は

〔四月〕**樊噲草**（はんくわいさう）〔大和本草〕和品　是亦俗の名つけし處あり、葉蓼の葉ふ似てまるくあり、莖ハ花さく、

ち

〔四月〕**茶筅草**（ちやせんさう）麥の事を茶筅草といふ、穗の形を見立ていふや、

〔五月〕朝

露草 糸切歯 下學集に銭朝露草と出る、一名銀銭花といふ花の形猪に似て小く、色白く青くるゝもあり、底に黒紅のきはひあり、葉ハ三出五出にして西瓜の葉に似たり、高さ二尺ばかり、朝に開き夕に萎む、

草石蚕 異名を甘露子、土蛹、滴露、地瓜子といへり、五月根を掘熟して喰ふ、味百合の如く、根老蚕の如し、故に名づく

る 四月 **盧陀草** 月令博物筌及び四季部類に、るうだと四月の部に出る、是ハヘンルウダ之、唯ルウダとのみいふハ、秋のはじめ花さき、秋の季とする 大和本草 ヘンルウダ近来紅夷より来る、是紅夷ルウダなり、葉ハ細にして茎の本木のごとし、三四月黄花をひらく、四出にして一片の間おのおの一蕊と出る、花の心に實あり、岩梨の実に似たり、夏実のる、その年子をまけバ来年花咲実なる、その葉茎根おのおの枯ぞ、この草、常のルウダの性に似て、性猶すぐるとぞ、常のルウダより悪臭甚し、

を 四月 **車前草の花** 秋の部に注す

た 四月 **橙の花** 喜祝に用ゆるを以て、正月の部にも載たり、その條下に注しあり、

ね 四月 **鼠もちの花** 藪捲といふ、

な 五月 **刀豆の花** 秋の部に注す、

む 六月 **葎茂る** 和漢三才図会 本綱に葎、故墟、道の旁に生ず、二月苗を生じ、茎に細き刺あり、葉節に對して生ず、一葉五尖、微く萆麻に似て細き歯あり、八九月細き紫花を開く、子を結ぶ、 続虚栗 甲斐山中 山賤のおとがい閉る葎かな 芭蕉

う 五月 **茴香の花** 秋のうの部茴香の実の条下に注しあり

く 四月 **草下毛** 大和本草 木にも下毛あり、花ハ相似たり、初夏細き紅花を発く、一朶に群て開くこと、敗醤の如し、○春の部に出せる下毛ハ木下毛なり、

苦草 此詞 四季部類 よりえらり、青藍按ずるに苦草ハ萍草の誤りか、くきハうきくさの欠畫せるなりとて爰に贅しく

初学の惑ひと解く、但し萱草ハはの部ふ注しおきぬ、まづ後見るべし、

や

五月 **蛇狀子** 本草啓蒙 蛇床子、古説ヤブシラミと充つ、自則シヤブシラミ、即竊衣、尓雅竊衣注ニ云芹ふ似て食ふべし、子の大さ麥の如し、兩々相合しもあり、人の衣ふ着く、

六月 **金龜子** 大和本草 北戸録曰、甲蟲也、五六月草蔓ふ生ず、南人收て以粉ふ養ふ、本草ニ蟲炙蟲の附録ふのせたり、婦人白粉の器中ふ入おく、雄ハ緑色光あり、雌ハ灰色光なし、形狀ハ飛蛾ふ似て長し、翼あり、額ふ両角ありて長し、六足あり、俗ニ玉虫といふ、

あ

四月 **青木の花** 花紫黯色ふて美なる葉ハ桃の葉ふて大なり、實と結ぶ、ちいさく青く熟すまもりて紅なり、故ふ漢名桃葉珊瑚といふ、

五月 **あつめ汁** 五日 そら豆、焼豆腐、干瓢などのさまくの物と汁ふ焼て食ふ、これとあつめ汁と云、

六月 **蘆茂** しげりあひて江の水細き芦間かな　紹巴

さ

蕪三

夏物曝 きの部木布の条下ふ注せ、

み

六月 **水七粉** 水の粉ハ麥とあぐのさまぞ、水飛して製したるもの、暑中砂糖ふ和し、冷水ふ浸し飲、

し

五月 **神麯製** 本草 主治、水穀宿食癥結積滞と化せ、時珍曰、葉氏水雲録ニ云、五月五日或ハ六月六日、或ハ三伏の日、白麪百斤、青蒿の葉汁三升、赤小豆の末、杏仁泥各三升、蒼耳の葉の汁、野蓼の葉の汁、各三升、汁と用ひて麪豆杏仁と和して餅ふ作り、麻の葉或ハ楮の葉ふ包ミ、罨黄を造る法の如し、黄なる衣の生ずるを待て晒し乙收む、

蕺菜の花 花四葉ふして白し、葉の臭甚しくして家圃ふ植れバ繁茂して後ハ除きがたし、篤信翁曰、駿州甲州の山中の村民とくだミの根を堀て、飯の上ふおきむして食ふ、甘しといふ、

ひ

六月 **日向葵** 大和本草 一名西番葵、花史ふ云文菊と云、向日葵も漢名也、葉大ふ莖高し、六月ふ花さく、頂上ふ只一花のミ、日ふつきてめぐる花なるぞ、最下品也

只日につきてはかると覚ゆるのミ

猿蓑　日の道や葵傾く五月雨　芭蕉

葵　大和本草　冬ゝ葵に似て別之、冬葵ハ葉に岐ありて五ッにきるゝ錦葵ハ葉円にして岐なし錦葵を其花紅紫白数色あり、四五月に開く銭の大さの如し、実をうゑて翌年茎高からず花さく、三年とやゑて茎高く枝多くして悪し、

千日紅　花鏡　木の高さ二三尺茎淡紫色、枝葉婆娑として夏深紫色を開く、花千瓣細砕、円整にして毬のごとし、枝の杪に生ず、冬に至て葉萎むといへども花萎まず、婦女採て鬢に簪とし、最能久に耐ふ、

増補歳時記栞草夏之部終